

『日本書紀』年表

2

(神武紀～応神紀)

編集・林 伸禧

目 次

凡 例	2
解 説	3
第 1 概要	5
第 2 詳細	7
第 3 天皇家系譜	1 5
年 表	2 1
神武天皇	2 3
綏靖天皇	2 9
安寧天皇	3 0
懿德天皇	3 1
孝昭天皇	3 2
孝安天皇	3 4
孝靈天皇	3 6
孝元天皇	3 8
開化天皇	4 0
崇神天皇	4 2
垂仁天皇	4 5
景行天皇	5 0
成務天皇	5 5
仲哀天皇	5 7
神功皇后	5 9
応神天皇	6 5

凡

例

- 1 原文を天皇紀別に日単位で作成した。また、原文が記述されていない年次も明示した。
- 2 原文は、次を参考して作成した。
 - ・『日本書紀』を原文で読む (<http://www009.upp.so-net.ne.jp/tocda>)
 - ・古代史癩祭 (<http://www001.upp.so-net.ne.jp/dassai/sitemap/sitemap.htm>)
 - ・ALEXの書斎 (<http://www.ceres.dti.ne.jp/~alex-x/wakan/menu-w.htm>)
- 3 干支・西暦は『日本書紀暦日原典』*1によった。
- 4 「?、□」は、旧漢字のため、漢字変換ができなかった文字である。
- 5 句読点は記述せず、文節間は空白1字で示した。
但し、会話文には、「」または『』で表示した。
- 6 [] は、原文が割注・細字を示めている。
- 7 略号
 - ・記：『古事記』
 - ・海：『海東諸國記』
- 8 参考文献
 - ・日本古典文学大系『日本書紀』上
(校注者：坂本太郎他、岩波書店、昭和42〈1967〉年3月)
 - ・新編 日本古典文学全集『日本書紀』1
(校注・訳者：小島憲之他、小学館、1994〈平成6〉年4月)
 - ・新訂補正『三正綜覧』*2(藝林舎)

*1 『日本書紀暦日原典』：内田正男編著、昭和53(1978)年1月、雄山閣
暦の対照表。450年頃以前の暦日は『日本書紀』編纂時に儀鳳暦に基づいて逆算されたものに過ぎないとする小川清彦の説を採用して、神武紀から持統紀までの全月朔干支を儀鳳(平朔)、元嘉両暦法をもって電子計算機を用いて計算し、『日本書紀』にある月朔干支をそこに付記して、その異同を一見してわかるように示している。

*2 新訂補正『三正綜覧』：内務省地理局編纂、昭和48(1973)年11月、藝林舎
暦の対照表(長暦)。孝元天皇元年、始皇帝33年、西暦紀元前214年からの、日本暦、中国暦、イスラム暦、西暦との対照表が掲載されており、きわめて便利である。日本暦の暦日は渋川春海の『日本長暦』及び中根元圭の『皇和通暦』を参考に行っている。だが、江戸時代以前の暦は正確な理論・計算上に依らない人為的な修正(改暦)が加えられるなど単純ではなく、後に小川清彦・神田茂らから誤謬が指摘されている。

解 説

第 1 概 要

原文を年表形式に編纂して判明した概要は次のとおりである。

1 天皇名の別称

- (1) 次の天皇には別称がつけられている。
 - ・神武：始馭天下之天皇
 - ・崇神：御肇國天皇
- (2) 名前を取替えた天皇がいる。
 - ・応神：去来紗別尊→誉田別尊

2 天皇の年令等

- (1) 年令の算出
立太子年及び立太子年令（除く綏靖、神功）から、誕生年及び即位・崩御年令を算出した。
- (2) 誕生年
誕生年が記述されているのは、次ぎの天皇のみである。
垂仁、応神
- (3) 立太子年令
・立太子年令が記述されていない天皇：綏靖
・立太子年令が2説記述されている天皇：垂仁、成務
・立太子年令に矛盾（割注記述年令と計算上年令）がある。：応神
- (4) 崩御年令
崩御したときの寿令が記述されていない天皇は、次ぎのとおりである。
懿德、孝昭、孝安、孝靈、孝元

3 崩御年・即位年・天皇元年の関連

前天皇の崩御年、天皇の即位年及び天皇元年の関連は、次のとおりである。

表 1 前天皇の崩御年・天皇の即位年及び天皇元年関連表

区 分		即 位 年		
		崩御年 (崩御年＝即位年)	崩御年の翌年	崩御年の数年後 (1～3年の空白)
天皇 元年	即位年 (即位＝元年)	—	孝安、孝靈、孝元、崇神、垂仁、 景行、成務、神功、応神、 (神功)	綏靖、孝昭、仲哀
	即位年の翌年	安寧、開化	—	—

※神功：仲哀崩御の翌年に皇太后と称され、摂政元年としている。

4 太歳

太歳は、天皇元年（神功は皇太后称号年）条に記述されているが、次のような異例がある。

- ・神武：東征年に記述されており、即位年には記述がされていない。
- ・綏靖：天皇元年(即位年)を始め、2回記述されている。
- ・神功：摂政元年(皇太后と称された年)を始め、3回記述されている。

5 崩御

- (1) 天皇が死去した場合は「崩」と記述されているが、天皇以外にも「崩」と記述されている人達がいる。

日本武尊、神功皇后

- (2) 天皇が崩御した場合は陵に葬られるが、次のような異例がある。

- ・神功：皇后であるが、陵に葬られている。
- ・応神：葬った陵が不明である。
- ・日本武尊：天皇ではないが、陵に葬られている。

- (3) 天皇以外で、葬った場所を記述されている人達がいる。

神八井耳命、日本武尊

6 その他

- (1) 手研耳命

神武崩御後は最高権力者となったが、神渟名川耳尊(綏靖天皇)に暗殺された。

- (2) 神八井耳命(綏靖紀)

名称に「神」が付されている。

- (3) 成務天皇

皇后に関する記述なし

- (4) 日本武尊(景行紀)

天皇であった徴候がある。

- (5) 武内宿禰

出生についての記述がある。

第 2 詳 細

1 天皇の諡号・宮・陵及び年令

(1) 天皇名、宮殿、陵等は次のとおりである。

表 2 天皇名・宮・陵 一 覧

代	漢風諡号	国 風 諡 号 ・ 尊 号	宮(地名)	陵 号
1	神武	神日本磐余天皇、神日本磐余火々出見天皇、 神日本磐余彦天皇、磐余彦火々出見尊、 【始馭天下之天皇】	埃宮(安芸)、 高嶋宮(吉備)、 橿原宮	東北陵(畝傍山)
2	綏靖	神淳名川耳天皇、神淳名川耳尊	高丘宮(葛城)	桃花鳥田丘上陵(倭)
3	安寧	磯城津彦玉手看天皇、磯城津彦玉手看尊	浮孔宮(片塩)	南御陰井上陵(畝傍山)
4	懿德	大日本彦耜友天皇、大日本彦耜友尊	曲峽宮(輕)	南織沙谿上陵(畝傍山)
5	孝昭	觀松彦香殖稻天皇、觀松彦香殖稻尊	池心宮(掖上)	博多山上陵(掖上)
6	孝安	日本足彦國押人天皇、日本足彦國押人尊	秋津嶋宮(室)	玉手丘上陵
7	孝靈	大日本根子彦太瓊天皇、大日本根子彦太瓊尊	廬戸宮(黒田)	片丘馬坂陵
8	孝元	大日本根子彦國牽天皇、彦國牽尊	境原宮(輕)	劍池嶋上陵
9	開化	稚日本根子彦大日日天皇、 稚日本根子彦大日日尊	率川宮(春日)	春日率川坂本陵 (又、坂上陵)
10	崇神	御間城入彦五十瓊殖天皇、御間城天皇、 御間城入彦尊、【御肇國天皇】	瑞籬宮(磯城)	山邊道上陵
11	垂仁	活目入彦五十狹茅天皇、活目尊	高宮、纏向宮	菅原伏見陵
12	景行	大足彦忍代別天皇、大足彦尊	綺宮(伊勢)、 纏向宮(倭)、 高穴穗宮(近江)	山邊道上陵(倭國)
13	成務	稚足彦天皇、稚足彦尊	—	狹城盾列陵(倭國)
14	仲哀	足仲彦天皇、足仲彦尊	筥飯宮(敦賀)、 徳勒津宮(紀伊)、 豊浦宮(穴門)、 橿日宮(筑紫)	長野陵(河内国)
—	神功	【氣長足姫尊】	豊浦宮(穴門)、 若櫻宮(磐余)、 稚櫻宮	狹城盾列陵(倭国)
15	応神	誉田天皇、誉田別尊(元：去来紗別尊)、 誉田別皇子	吉野宮、大隅宮、 葦守宮、明宮	—※

※1 (神功摂政六十九年夏四月辛酉朔丁丑) 是日 追尊皇太后 曰氣長足姫尊

また、『古事記』では息長帯比賣(仲哀に娶られる時)

2 応神：筥飯大神と名前の取替えをした。(去来紗別尊→誉田別尊)

3 応神：「陵」について記述なし。『古事記』に「御陵 在川内恵賀之裳伏岡也」

(2) 天皇の「生誕・立太子・即位・崩」での年令は次のとおりである。

表3 天 皇 年 令 一 覧

代	天皇	区分	誕生		立太子		即位		崩		御古事記
			西暦	和 暦	西暦	和 暦	西暦	和 暦	西暦	和 暦	
1	神武	暦 歳	-711	即位前五 1	-697	即位前三 1 5	-660	神武 元 5 2	-585	神武七六 1 2 7 (1 2 7)	1 3 7
2	綏靖	暦 歳	-632	神武二九 1	-619	神武四二 1 4	-581	綏靖 元 5 2	-549	綏靖三三 8 4 (8 4)	4 5
3	安寧	暦 歳	-577	綏靖 五 1	-557	綏靖二五 2 1	-549	綏靖三三 2 9	-511	安寧三八 6 7 (5 7)	4 9
4	懿德	暦 歳	-553	綏靖二九 1	-538	安寧十一 1 6	-510	懿德 元 4 4	-477	懿德三四 7 7 (-)	4 5
5	孝昭	暦 歳	-506	懿德 五 1	-489	懿德二二 1 8	-475	孝昭 元 3 2	-393	孝昭八三 1 1 4 (-)	9 3
6	孝安	暦 歳	-427	孝昭四九 1	-408	孝昭六八 2 0	-392	孝安 元 3 6	-291	孝安一〇二 1 3 7 (-)	1 2 3
7	孝靈	暦 歳	-342	孝安五一 1	-317	孝安七六 2 6	-290	孝靈 元 5 3	-215	孝靈七六 1 2 8 (-)	1 0 6
8	孝元	暦 歳	-273	孝靈十八 1	-255	孝靈三六 1 9	-214	孝元 元 6 0	-158	孝元五七 1 1 6 (-)	5 7
9	開化	暦 歳	-208	孝靈 七 1	-193	孝元二二 1 6	-158	孝元五七 5 1	-98	孝元六〇 1 1 1 (1 1 5)	6 3
10	崇神	暦 歳	-148	開化 十 1	-130	開化二八 1 9	-97	崇神 元 5 2	-30	崇神六八 1 1 9 (1 2 0)	1 6 8
11	垂仁	暦 歳	-69	崇神二九 1	-46	崇神五二 2 4 (2 0)	-29	垂仁 元 4 1	70	垂仁九九 1 3 9 (1 4 0)	1 5 3
12	景行	暦 歳	-13	垂仁十七 1	8	垂仁三七 2 1	71	景行 元 8 4	130	景行六〇 1 4 3 (1 0 6)	1 3 7
13	成務	暦 歳	93	景行二三 1	116	景行四六 2 4 (2 9)	131	成務 元 3 9	190	成務六〇 9 8 (1 0 7)	9 5
14	仲哀	暦 歳	148	成務十八 1	178	成務四八 3 1	192	仲哀 元 4 5	200	仲哀 九 5 3 (5 2)	5 2
-	神功	暦 歳	170	成務四十 1	(皇 后)		(皇太后)		269	摂政六九 1 0 0 (1 0 0)	1 0 0
					193	仲哀 二 2 4	201	摂政 元 3 2			
15	応神	暦 歳	200	仲哀 九 1	203	摂政 三 4 (3)	270	応神 元 7 1	310	応神四一 1 1 1 (1 1 0)	1 3 0

- (注) 1 「網目」は、誕生年及び年令等を算出するための基準である。これにより、年令を算出した。
2 綏靖の年令は、即位前紀の「至四十八歳神日本磐余彦天皇崩(神武76年)」から算出した。
3 立太子年令
・垂仁・成務の立太子年令は2説(前天皇記事、即位前紀記事)あるが、即位前紀記事による年令により算出した。()書きは前天皇記事による年令。
・応神の立太子年令は、即位前紀記事(割注)には「3歳」とされているが、誕生年・立太子年から計算上「4歳」となるので、それによった。
・景行、成務：割注での記述年令。
4 崩御年令
・()書き：記事による年令(割注を含む)。
・開化、神功：割注での記述年令。

(3) 神武、崇神に別称がある。

① 神武：(神武元年)故古語稱之曰「於畝傍之樞原也 太立宮柱於底磐之根 峻時搏風於高天之原 而始馭天下之天皇 號曰神日本磐余火々出見天皇焉」

② 崇神：(崇神十二年)是以 天神地祇共和享 而風雨順時 百穀用成 家給人足 天下大平矣 故稱謂御肇國天皇也

(参考)『古事記』：所知初國之御真木天皇、
『常陸国風土記』香島郡：初國所知美麻貴天皇

(4) 応神は筭飯大神と名前の取替えをした。

去来紗別尊→誉田別尊

(応神即位前紀) 故称其名 謂誉田天皇

上古時俗 号額謂褒武多焉 一云 初天皇為太子 行于越国 拜祭角鹿筭飯大神 時大神與太子名相易 故号大神曰去来紗別尊 太子名誉田別尊 然則可謂大神本名誉田別尊 太子元名去来紗別尊 然無所見也 未詳

2 空白年

前天皇が崩御した年の翌年を次天皇(神功は皇太后)の元年としているが、次の天皇は前天皇の崩御から天皇元年までに空白年(1～3年)が生じている。

表 4 空 白 年 一 覧

天皇紀	西暦〈干支〉和暦			記	事
神武紀	-585	丙子	神武 7 6	(神武崩) 七十有六年春三月甲午朔甲辰 天皇崩 于樞原宮 【綏靖紀】至四十八歲神日本磐余彦天皇崩 時神淳名川耳尊 孝性純深 悲恭無已 特留心於喪葬之事焉 其庶兄手研耳命 行年已長 久歷朝機 故亦委事而親之	
綏靖紀	-584	丁丑	即位前-3	明年秋九月乙卯朔丙寅 葬畝傍山東北陵	
綏靖紀	-583	戊寅	即位前-2	一	
綏靖紀	-582	己卯	即位前-1	然其王立操厝懷 本乖仁義 遂以諒闇之際威福自由 苞藏禍心 圖害二弟 于時也 太歲己卯 冬十一月 …… 時神淳名川耳尊 掣取其兄所持弓矢 而射手研耳命 一發中胸 再發中背 遂殺之	
綏靖紀	-581	庚辰	綏靖 1	(綏靖即位) 元年春正月壬申朔己卯 神淳名川耳尊 即天皇位 是年也 太歲庚辰	
懿德紀	-477	甲子	懿德 3 4	懿德崩(卅四年秋九月甲子朔辛未 天皇崩)	
孝昭紀	-476	乙丑	即位前-1	明年冬十月戊午朔庚午 葬大日本彦耜友天皇 於畝傍山南織沙谿上陵	
孝昭紀	-475	丙寅	孝昭 1	(孝昭即位) 元年春正月丙戌朔甲午 皇太子 即天皇位 是年也 太歲丙寅	
成務紀	190	庚午	成務 6 0	成務崩(六十年夏六月己巳朔己卯 天皇崩)	
仲哀紀	191	辛未	即位前-1	明年秋九月壬辰朔丁酉 葬于倭國狹城盾列陵	
仲哀紀	192	壬申	仲哀 1	(仲哀即位) 元年春正月庚寅朔庚子 太子 即天皇位 是年也 太歲壬申	

※ 『三正綜覧』は、191年を「成務61年」としている。

3 誕生年

誕生年が記載されているのは、「垂仁紀・応神紀」だけである。それ以外は、立太子記事及び崩御記事から逆算して算出した。

表 5 誕生年算出一覧

算出方法	天皇名
①誕生記事が記載されている	垂仁、応神
②綏靖即位前紀の神武崩御記事から算出	綏靖
③崩御記事から算出	神武、神功
④立太子記事から算出	①～③以外の天皇(安寧、懿徳、懿徳に孝昭、孝安、孝霊、孝元、開化、崇神、景行・成務、仲哀)

4 立太子年令

(1) 次の天皇には立太子年令が2説記述されている。

表 6 立太子年令2説一覧

天皇	西暦〈干支〉和暦	年令	誕生及び立太子記事
垂仁	-16 壬子 崇神 2 9	誕生	垂仁即位前紀 天皇 以御間城天皇二十九年歳次壬子春正月己亥朔生於瑞籬宮
	-50 辛未 崇神 4 8	2 0	崇神紀 崇神 四十八年 四月戊申朔丙寅 立活目尊爲皇太子
	-46 乙亥 崇神 5 2	2 4	垂仁即位前紀 (崇神 五十二年) 廿四歳 因夢祥以立爲皇太子
成務	93 癸巳 景行 2 3	誕生	成務即位前紀 「大足彦天皇四十六年 立爲太子 年二十四」から算出
	116 丙申 景行 4 6	2 4	成務即位前紀 大足彦天皇 四十六年 立爲太子 年二十四
	121 丙寅 景行 5 1	2 9	景行紀 (五十一年) 秋八月己酉朔壬子 立稚足彦尊 爲皇太子
応神	200 庚辰 仲哀 9	誕生	応神即位前紀 天皇 以皇后討新羅之年 歳次庚辰冬十二月 生於筑紫之蚊田
		〃	神功摂政前紀 (仲哀九年) 十二月戊戌朔辛亥 生譽田天皇於筑紫
	203 癸未 神功摂政 3	4	神功摂政紀 三年 春正月丙戌朔戊子 立譽田別皇子爲皇太子
		※ 3	応神即位前紀 皇太后摂政之 三年 立爲皇太子 時年 三

※ 応神天皇の立太子年令は計算上4歳であるが、崩御年令が110歳からは、立太子年令は3歳となる。

(2) 「皇太子に爲す」との記述がない天皇は、次のとおりである。

① 神武：(即位前紀) 即位前—三十七年(甲申) **年十五立爲太子**

- ② 成務：(即位前紀) 大足彦天皇四十六年 立爲太子 年二十四
但、(景行紀：景行五十一年) 秋八月己酉朔壬子 立稚足彦尊 爲皇太子 (※29歳)
- ③ 応神妃：(応神四〇年正月辛丑朔戊申) 是時 天皇常有立菟道稚郎子 爲太子之情
(応神四〇年正月辛丑朔甲子) 立菟道稚郎子爲嗣
即日 …… 以大鷦鷯尊 (※仁徳) 爲太子輔之
令知国事

5 太歳

太歳は、天皇元年(神功は皇太后即位年)に記述されているが、それ以外にも太歳が記述されている。また、神武は天皇元年(即位年)ではなく、東征を始めた年としている。

表 7 天皇即位関連以外「太歳」一覧

天皇	西暦 (干支) 和暦			太 歳 記 事
神武	-667	甲寅	即位前 - 7	及年四五歳 謂諸兄及子等曰「昔我天神 高皇産靈尊・大日靈尊 挙此豊葦原瑞穂國 而授我天祖彦火瓊々尊 ……」 是年也 太歳甲寅
	-660	辛酉	神武 元	其年十月丁巳朔辛酉 天皇親帥諸皇子舟師東征 辛酉年春正月庚辰朔 天皇帝位於橿原宮 是歳爲天皇元年
綏靖	-582	己卯	即位前 - 1	其庶兄手研耳命 行年已長 久歴朝機 故亦委事而親之 然其王立操盾懷 本乖仁義 遂以諒闇之際威福自由 苞藏禍心 圖害二弟 于時也 太歳己卯
	-581	庚辰	綏靖 元	元年春正月壬申朔己卯 神渟名川耳尊即天皇位 是年也 太歳庚辰
神功	201	辛巳	摂政 元	冬十月癸亥朔甲子 羣臣尊皇后 曰皇太后 是年也 太歳辛巳 則爲攝政元年
	239	己未	摂政 39	三十九年 是年也 大歳己未 魏志云 明帝景初三年六月 倭女王遣大夫難斗米等 詣郡求詣天子朝獻 太守鄧夏遣吏 將送詣京都也
	269	己丑	摂政 69	六十九年夏四月辛酉朔丁丑 皇太后崩 於稚櫻宮 時年 一百歳 冬十月戊午朔壬申 葬狹城盾列陵 是日 追尊皇太后 曰氣長足姫尊 是年也 太歳己丑

※太歳：古来中国の暦法に用いた言葉で、木星即ち歳星から脱化した最高の天神の名である。木星は十二年の周期をもって巡行したので、十二支の運行と密着して考えられ、大歳干支をもって歳を記すことが行なわれるようになった。書紀では、ここを初めとして、歴代即位元年の紀の終りに「是年也、太歳へ」と、その年の干支を記す例である。

伴信友によると、中国の古書、春秋・史記・漢書・三国志・尚書などで、紀年に干支を記したものはない。日本でも書紀を除く以後の国史は年の干支を記していない。書紀にだけあるのは、初めて歴代の年紀干支を定めたからであろう。そして継体二十五年に引く百済本記に「太歳辛亥三月」とあることから考えると、これはもと韓国に行われた書法で、書紀は百済本記の例によったものであろうかという。

(日本古典文学大系『日本書紀』上、577・578頁)

6 死去

天皇等が死去した場合は、「崩、薨」と記述されているが、その状況は次のとおりである。

表 8 「崩、薨」と記述された人々

区分	死 去 し た 時 の 記 述 方 法
崩	天皇(すべて) 日本武尊 (【景行紀】景行四十三年 日本武尊 於是 始有痛身…… 既而 崩于能褒野 時年三十) 神功皇后 (【神功紀】神功摂政六十九年夏四月辛丑朔丁丑 皇太后崩)
薨	五瀬命、神八井耳命、倭迹迹姫命、倭彦命、葉酢媛命(垂仁皇后)、播磨太郎姫(景行皇后)、豊城命、彦狭嶋王 【百濟】肖古王、貴須王、枕流王、阿花王、直支王

7 その他

(1) 手研耳命(綏靖紀)

① 神武東征に同行した。

【神武妃】

(即位前三年) 天皇獨與皇子手研耳命 帥軍而進 至熊野荒坂津

② 神武崩御後は最高権力者となったが、神淳名川耳尊(綏靖天皇)に暗殺された。

【綏靖紀】

(即位前紀) 其庶兄手研耳命 行年已長 久歴朝機 故亦委事而親之 ……

〃 時神淳名川耳尊 掣取其兄所持弓矢 而射手研耳命 一發中胸 再發中背 遂殺之

(2) 神八井耳命(綏靖紀)

① 名称に「神」が付されているのは、「神八井耳命、神日本磐余彦天皇、神淳名川耳天皇」の3人だけである。

② 死去したときの記事が記載されている。

【綏靖紀】(綏靖)四年夏四月 神八井耳命薨即葬于畝傍山北

③ 参考

- ・『古事記』：神八井耳命者 意富臣 小子部連 坂合部連 火君 大分君 阿蘇君 筑紫三家連 雀部臣 雀部造 小長谷造 都直 伊余國造 科野國造 道奥石城國造 常道仲國造 長狹國造 伊勢船木直 尾張丹波臣 嶋田臣等之祖也
- ・神八井耳命の子「健磐龍命」は、阿蘇神社の主祭神(阿蘇山の開拓神・農業神)である。

表 9 「阿蘇神社神系図」参照

(3) 成務天皇

① 皇后(妃)に関する記述なし。

② 【仲哀即位前紀】稚足彦天皇四十八年立爲太子 時年卅一 稚足彦天皇無男 故立爲嗣

③ 参考

『古事記』：若帶日子天皇 …… 此天皇 娶 穗積臣等之祖建忍山垂根之女 名弟財郎女生 御子 和訶奴氣王 一柱

(4) 日本武尊

天皇に準ずる記述がある。

① 名前の尊称に「尊」を用いている。

・小碓尊

(景行二年) 立播磨稻日大郎姫<sup>一云 稻日稚郎姫
郎姫 此云異羅菟咩</sup> 爲皇后 后生二男 第一曰大碓皇子 第二曰小碓尊<sup>一書云 皇后生三男
其第三曰稚倭根子皇子</sup>
其大碓皇子・小碓尊 一日同胞而雙生 天皇異之 則詰於碓 故因號其二王曰大碓・小碓也
是 小碓尊 亦名日本童男<sup>童男 此
云鳥具奈</sup> 亦曰日本武尊

・日本武尊（日本武皇子）

(景行二七年) 即啓曰「自今以後 號皇子應稱日本武皇子」 言訖乃 通胸而殺之 故至于今 稱曰日本武尊 是其緣也

・但し、日本武尊と呼ばれる以前の自称は「日本童男」

(景行二七年) 川上梟帥啓之曰「汝尊誰人也」 對曰「吾是大足彦天皇之子也 名日本童男也」

② 「妃」とした皇女・媛、及び子孫を記している。

・(景行四三年) 日本武尊 更還於尾張、即娶尾張氏之女宮簀媛

・(景行五一年) 初 日本武尊 娶

兩道入姫皇女爲妃 生稻依別王 次足仲彦天皇 次布忍入姫命 次稚武王
其兄稻依別王 是犬上君・武部君凡二族之始祖也
又妃 吉備武彦之女吉備穴戸武媛 生武卵王 與十城別王
其兄武卵王 是讃岐綾君之始祖也 弟十城別王 是伊豫別君之始祖也
次妃 穗積氏忍山宿禰之女弟橘媛 生稚武彦王

③ 死去した場合「崩」を用いている。

・(景行四三年) 日本武尊 於是 始有痛身 …… 既而 崩于能褒野 時年卅

④ 墓を「陵」として記述している。(天皇以外に記述しているのは「日本武尊」のみ)

・(景行四三年) 即詔羣卿命百寮 仍葬於伊勢國能褒野陵 時日本武尊化白鳥 從陵出之 指倭國而飛之 羣臣等 因以 開其棺槨而視之 明衣空留 而屍骨無之 於是 遣使者追尋白鳥 則停於倭琴彈原 仍於其處造陵焉 白鳥更飛至河内 留舊市邑 亦其處作陵 故時人號是三陵 曰白鳥陵

⑤ 妃(仲哀の母)を「皇后及び皇太后」と記述している。

【仲哀紀】

・(即位前紀) 足仲彦天皇 日本武尊第二子也

母皇后曰兩道入姫命 活目入彦五十狹茅天皇之女也 天皇容姿端正 身長十尺

・(仲哀元年) 秋九月丙戌朔 尊母皇后曰皇太后

⑥ その他

年令に整合性がない(2歳のずれ)。

・景行27(97)年10月 冬十月丁酉朔己酉 遣日本武尊 令擊熊襲 時年十六

・景行43(113)年 逮于能褒野 而痛甚之 …… 既而 崩于能褒野 時年卅

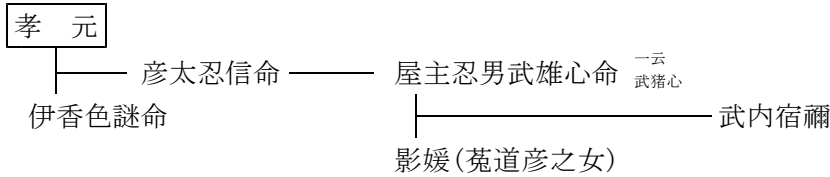
・熊襲暗殺16歳から崩は「32歳」、崩30歳から熊襲暗殺は「14歳」。

⑦ 参考

・『古事記』：小碓命、倭男具那王、倭建命

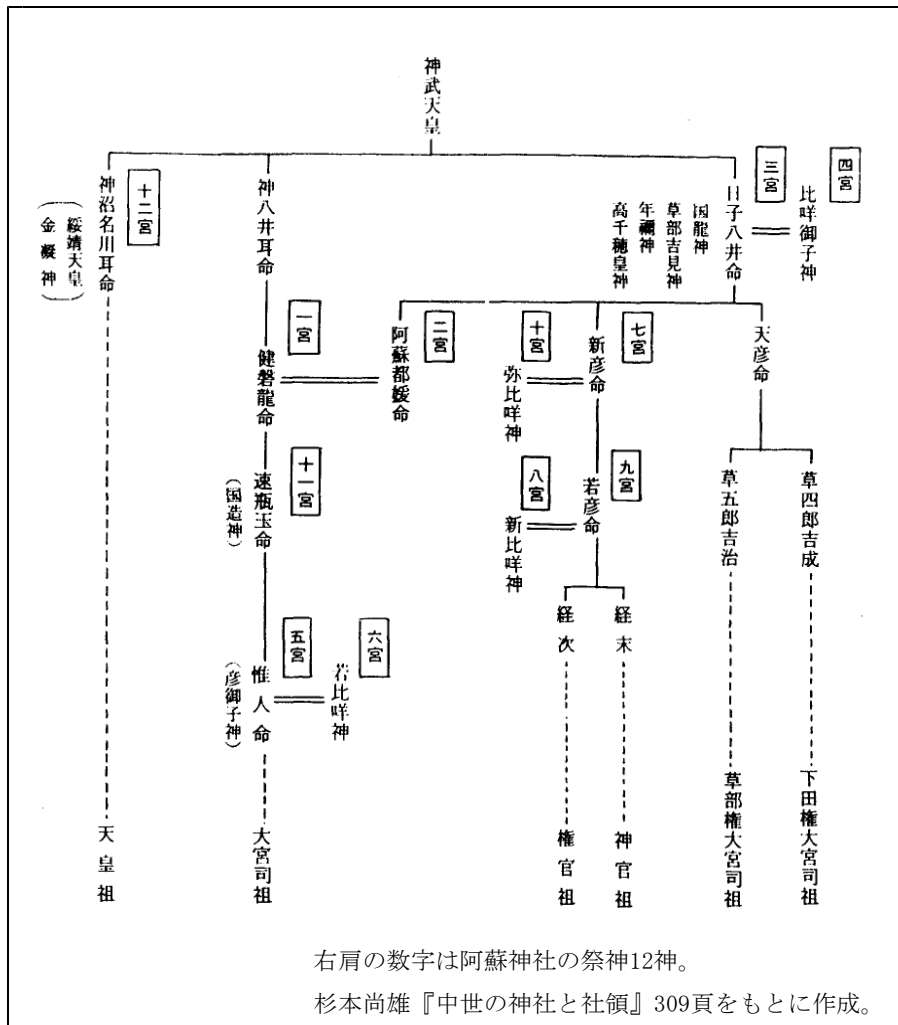
・『常陸國風土記』：倭^{やまとたける} 武天皇

(5) 武内宿禰の出生



- ・(孝元七年二月) 彦太忍信命 是武内宿禰之祖父也
- ・(景行三年二月) 遣屋主忍男武雄心命 一云 武猪心 令祭 爰屋主忍男武雄心命詣之 居于阿備柏原而 祭祀神祇 仍住九年則娶紀直遠祖菟道彦之女影媛 生武内宿禰

表 9 阿蘇神社神系図



村崎真智子著 (『阿蘇神社祭祀の研究』28頁)

第 3 天 皇 家 系 譜

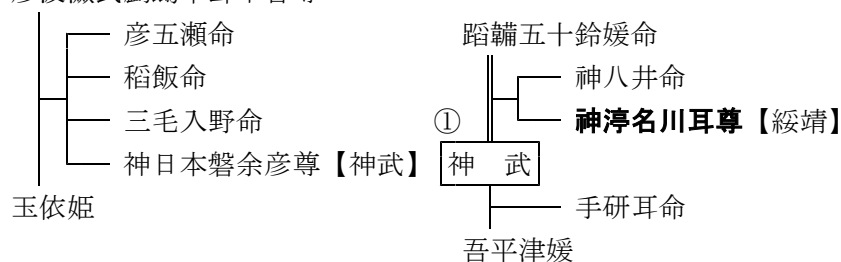
※ 1 「＝」 で結んだ名前は皇后

2 [] : 細字・割注

1 神武

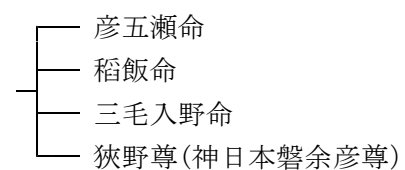
〔神代〕

彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊

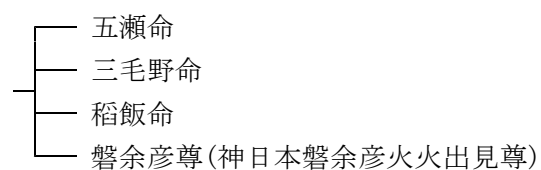


〔神代一書(異文)〕

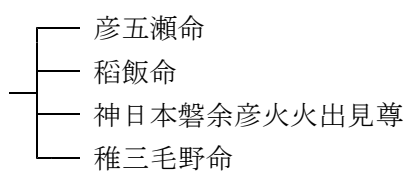
〔一書第一〕



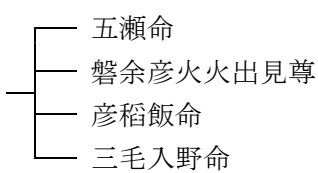
〔一書第二〕



〔一書第三〕

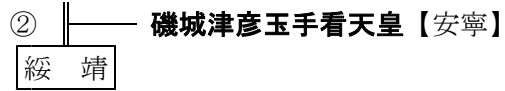


〔一書第四〕

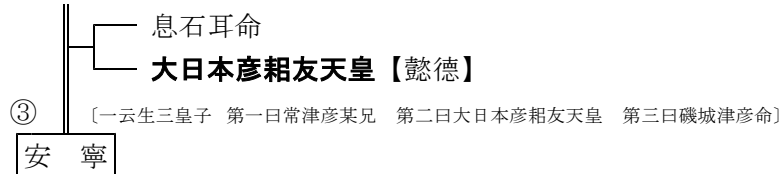


2 綏靖、3 安寧、4 懿德、5 孝昭、6 孝安、7 孝靈

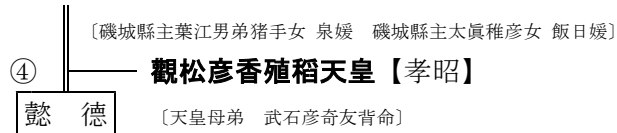
五十鈴依媛〔川派媛 糸織媛也〕



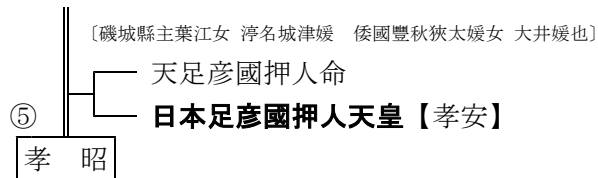
淳名底仲媛命〔淳名襲媛〕〔磯城縣主葉江女 川津媛 大間宿禰女 糸井媛〕



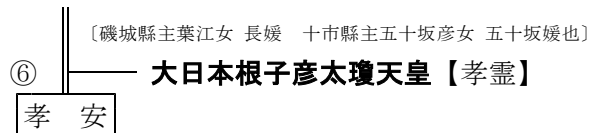
天豐津媛命



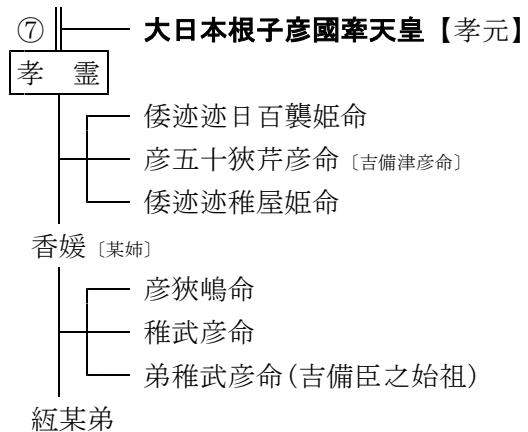
世襲足媛



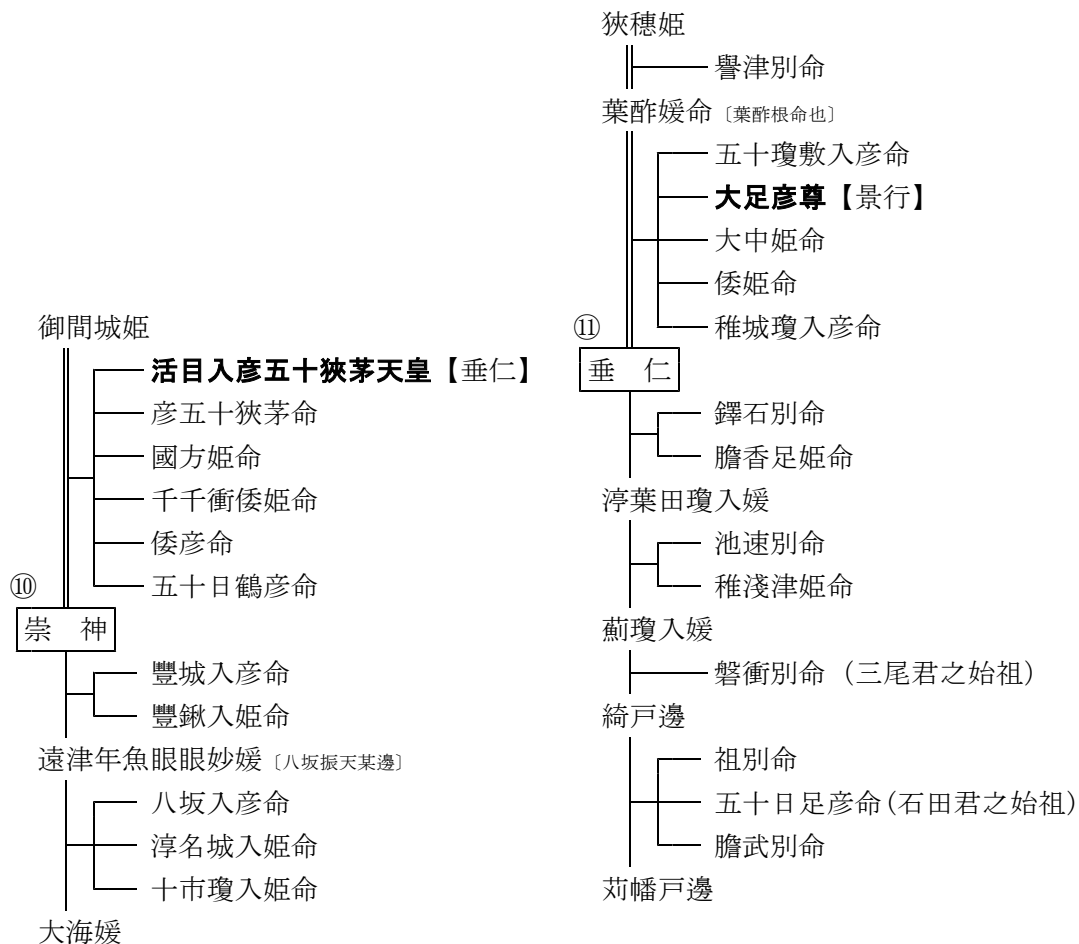
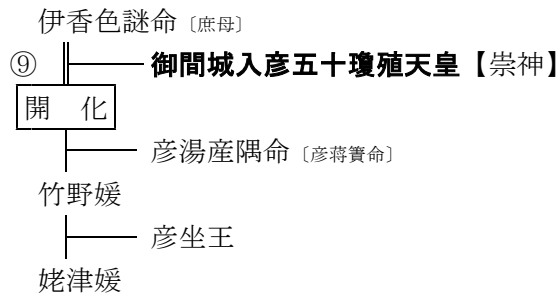
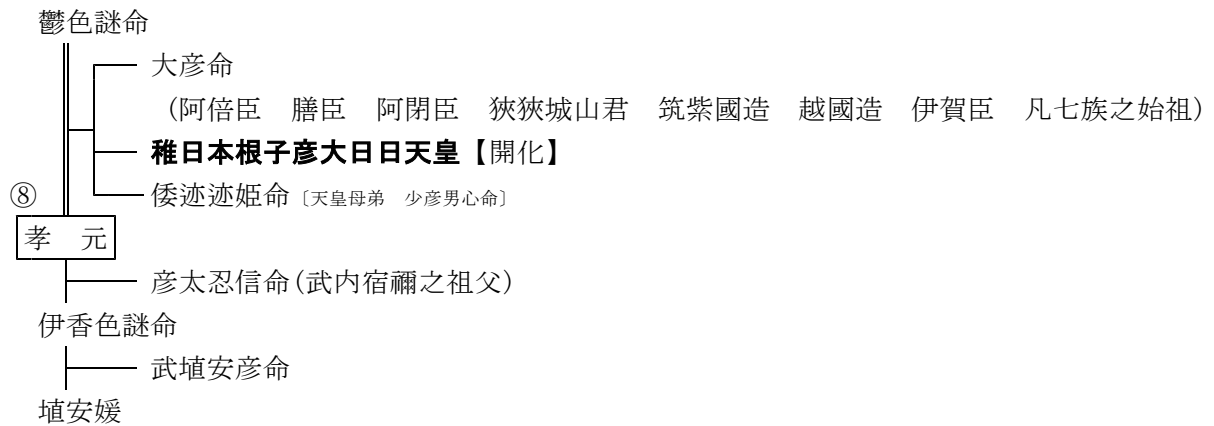
姪押媛



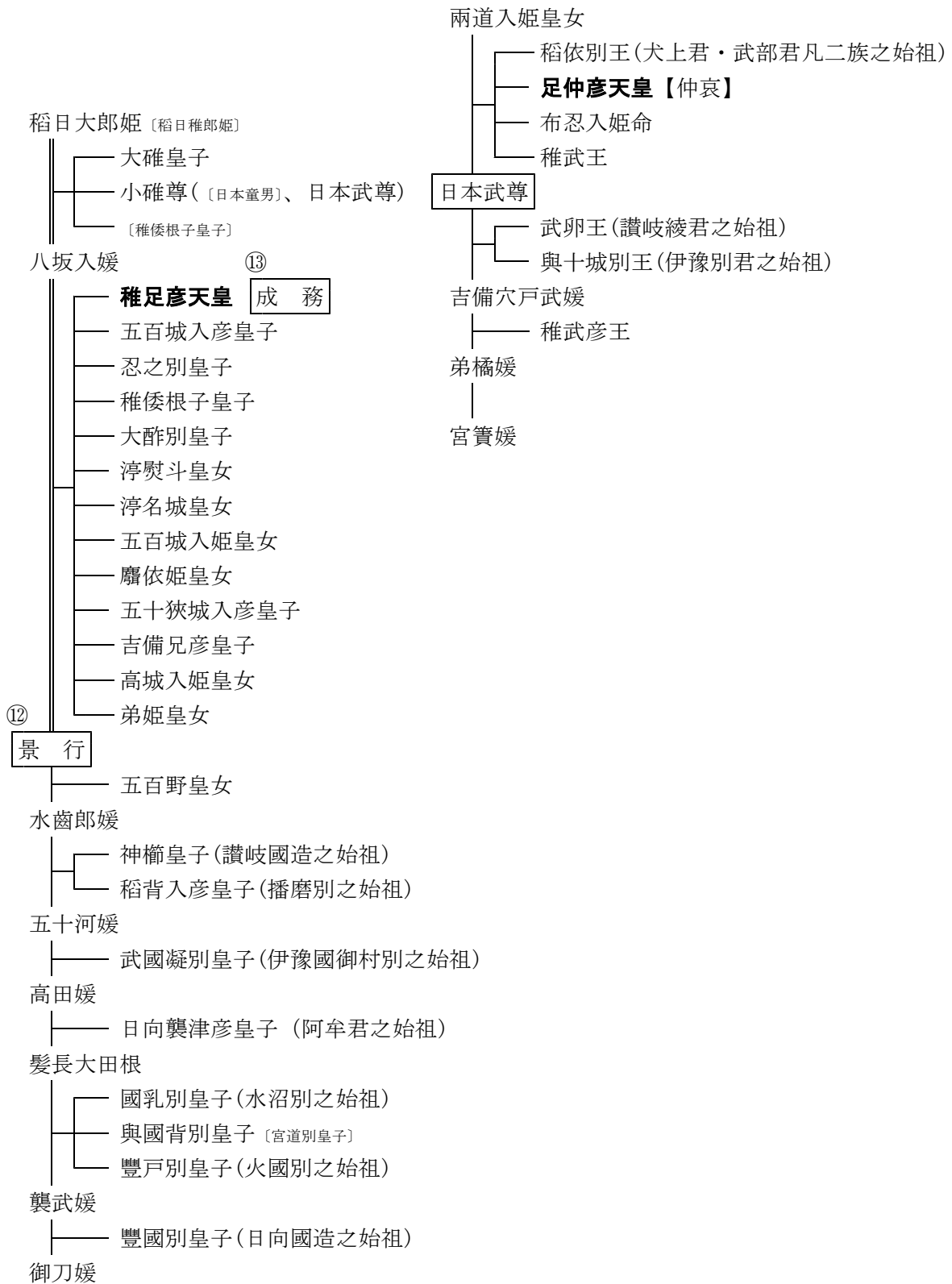
細媛命〔春日千乳早山香媛 十市縣主等祖女 眞舌媛〕



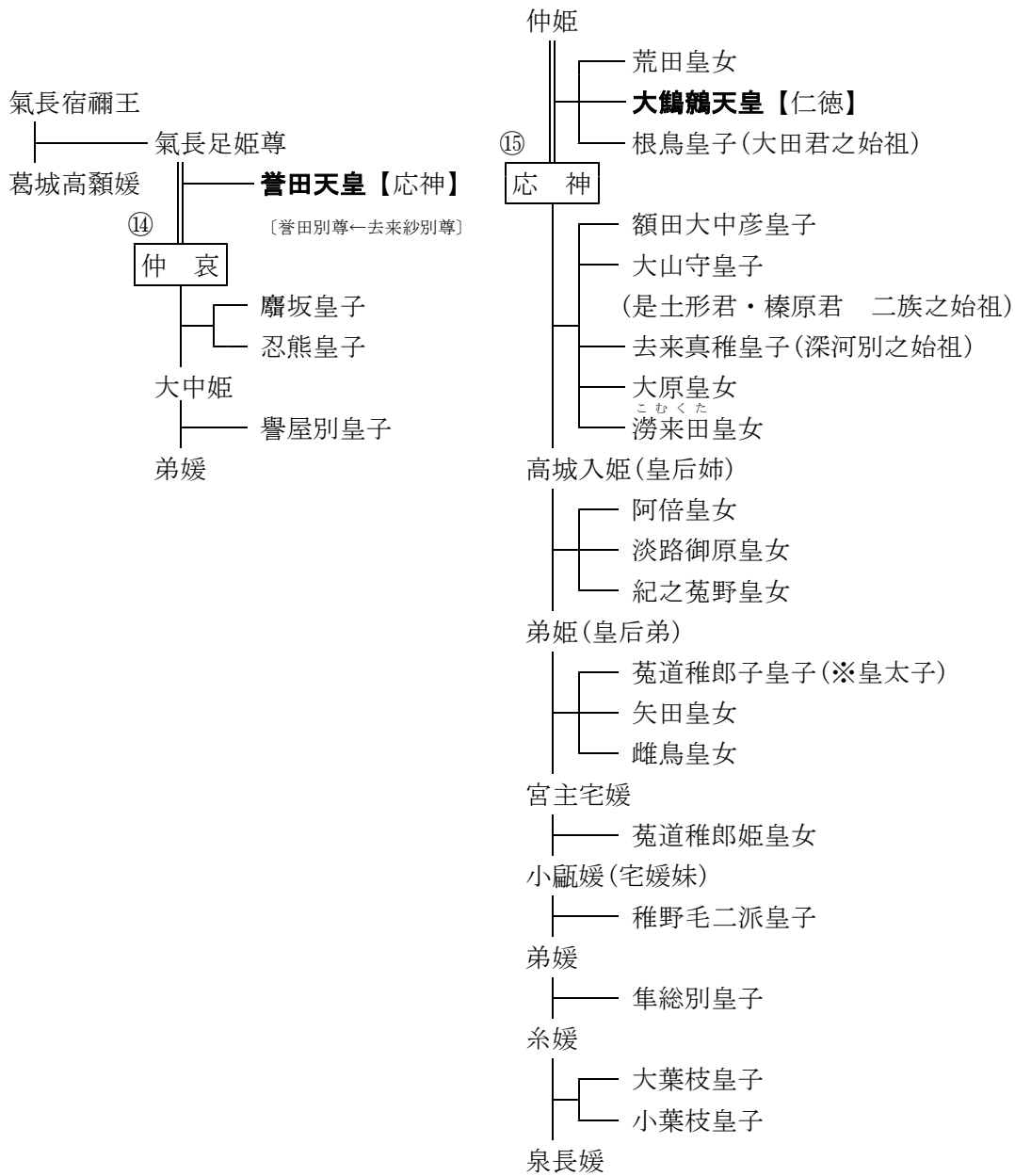
8 孝元、9 開化、10 崇神、11 垂仁



12 景行、13 成務、日本武尊



14 仲哀、15 应神



※ 菟道稚郎子皇子

・ 卅年春正月辛丑朔戊申 是時 天皇常有立菟道稚郎子 為太子之情 然欲知二皇子之意
・ (応神四十年正月) 甲子 立菟道稚郎子為嗣
・ (") 即日 任大山守命 令掌山川林野 以大鷦鷯尊 為太子輔之 令知国事

年 表

【神武天皇（神日本磐余尊）】

西曆	天皇 代 天皇	年号	年 年	干支	月 閏月	日 朔日	干支	記事・原文	年令	備考
-		神代	-	-	-	-	-	彦波瀲武□□草薙不合尊 以其姨玉依姬爲妃 生彦五瀨命 次稻飯命 次三毛入野命 次神日本磐余彦尊 凡生四男 久之彦波瀲武？草薙不合尊 崩於西洲之宮 因葬日向吾平山上陵 一書曰 先生彦五瀨命 次稻飯命 次三毛入野命 次狹野尊 亦號神日本磐余彦尊 所稱狹野者 是年少時之號也 後撥平天下 奄有八洲 故復加號 曰神日本磐余彦尊 一書曰 先生五瀨命 次三毛野命 次稻飯命 次磐余彦尊 亦號神日本磐余彦火火出見尊 一書曰 先生彦五瀨命 次稻飯命 次神日本磐余彦火火出見尊 次稚三毛野命 一書曰 先生彦五瀨命 次磐余彦火火出見尊 次彦稻飯命 次三毛入野命 神日本磐余天皇 諱火々出見 波瀲武□□草薙不合尊第四子也 母曰玉依姬 海童之少女也 天皇生而明達 意□如也	-	
-711			-51	庚午	-	-	-	神武生（「年十五立爲太子」から算出） 『海東諸国紀』（申叔舟著）：周幽王11年＝前771年 『異称日本傳』（松下見林著）：恒王9年＝前711年	1	○神武：誕生
-710			-50	辛未	-	-	-	-	2	
-709			-49	壬申	-	-	-	-	3	
-708			-48	癸酉	-	-	-	-	4	
-707			-47	甲戌	-	-	-	-	5	
-706								-	6	
-705								-	7	
-704								-	8	
-703								-	9	
-702								-	10	
-701								-	11	
-700								-	12	
-699								-	13	
-698								-	14	
-697			-37	甲申	-	-	-	年十五立爲太子 長而娶日向國吾田邑吾平津媛 爲妃 生手研耳命	15	○神武：15歳（太子）
-696								-	16	
-695								-	17	
-694								-	18	
-693								-	19	
-692								-	20	
-691	神武 1即位 前紀							-	21	
-690								-	22	
-689								-	23	
-688								-	24	
-687			-27	甲午	-	-	-	-	25	
-686		即位 前						-	26	
-685								-	27	
-684								-	28	
-683								-	29	
-682								-	30	
-681								-	31	
-680								-	32	
-679								-	33	
-678								-	34	
-677			-17	甲辰	-	-	-	-	35	
-676								-	36	
-675								-	37	
-674								-	38	
-673								-	39	
-672								-	40	
-671								-	41	
-670								-	42	
-669								-	43	
-668								-	44	
-667			-7	甲寅	-	-	-	及年四五歳 謂諸兄及子等曰 「昔我天神 高皇產靈尊・大日□尊 拳此豐葦原瑞穗國 而授我天祖彦火瓊々尊 於是 火瓊々杵尊 闢天關披雲路 駟仙蹕□以戾止 是時 運屬鴻荒 時鍾草昧 故蒙以養正 治此西偏 皇祖皇考 乃神乃聖 積慶重暉 多歷年所 自天祖降跡以 于今一百七十九萬二千四百七十餘歳 而遼□之地 猶未霑於王澤 遂使邑有君 村有長 各自分疆 用相凌□ 抑又聞於鹽土老翁 曰『東有美地 青山四周 其中亦有下乘天磐船而飛降者』 余謂 彼地 必當足下以恢弘大業 光宅天下 蓋六合之中心乎 厥飛降者 謂是饒速日歟 何不就而都之乎」 諸皇子對曰「理實灼然 我亦恆以爲念 宜早行之」 是年也 太歳甲寅	45	○神武見東征 宋史：元年甲寅當周僖王時

【神武天皇（神日本磐余尊）】

西曆	天皇 代 天皇	年号	年 干支	月 閏月	日 朔日	日 干支	記事・原文	年令	備考
-667			-7甲寅	-	10丁巳	5辛酉	其年十月丁巳朔辛酉 天皇親帥諸皇子舟師東征 至速吸之門 時有漁人 乘艇而至 天皇招之 因問曰「汝誰也」 對曰「臣是國神 名曰珍彥 釣魚於曲浦 聞天神子來 故即奉迎」 問之曰「汝能為我導耶」 對曰「導之矣」 天皇勅授漁人椎 [□] 末 令執而牽於皇舟 以為海導者 乃特賜名 為椎根津彥（椎 此云辭 [□] ） 此即倭直部始也 行至筑紫國菟狹祖（菟狹地名也 比云字佐） 時有菟狹國造祖 號曰菟狹津彥・菟狹津媛 乃於菟狹川上 造一柱膳宮而奉饗焉（一柱饗宮此云阿斯 [□] 苔徒鞅離能宮） 是時 勅以菟狹津媛 賜妻之於侍臣天種子命 天種子命 是中臣氏之遠祖也 十有一月丙戌朔甲午 天皇至筑紫國岡水門 十有二月丙辰朔壬午 至安藝國 居于埃宮 乙卯年春三月甲寅朔己未 徙入吉備國 起行館以居之 是曰高嶋宮 積三年間 脩舟 [□] 蓄兵食 將欲以一舉而平天下也	45	
-666			-6乙卯	-	3甲寅	6己未		46	
-665			-5丙辰	-	-	-		47	
-664			-4丁巳	-	-	-		48	
					2丁酉	11丁未	戊午年春二月丁酉朔丁未 皇師遂東 舳艫相接 方到難波之碕 曾有奔潮太急 因以 名為浪速國 亦曰浪花 今謂難波訛也（訛 此云與許奈廬盧）		海：49才戊午
					3丁卯	10丙子	三月丁卯朔丙子 溯流而上 徑至河內國草香邑青雲白肩之津 夏四月丙申朔甲辰 皇師勒兵 步趣龍田 而其路狹隘 人不得並行 乃遣更欲東踰龍駒山 而入中洲 時長髓聞之曰「夫天神等所以來者 必將奪我國」 則盡起屬兵 徵之於孔舍衛坂 與之會戰 有流失 中五瀨命脇脛 皇師不能進戰 天皇憂之 乃運神策於沖杵曰「今我是日神子孫 而向日征虜 此逆天道也 不若 退還示弱 禮祭神祇 背負日神之威 隨影壓躡 如此 則曾不血刃 虜必自敗矣」 倉曰「然」 於是 令軍中曰「且停 勿須復進」 乃引軍還 虜亦不敢 [□] 却至草香之津 植盾而為雄詰焉（雄詰 此云烏多雞摩） 因改號其津曰舊津 今云夢津訛也 初孔舍衛之戰 有人隱於大樹 而得免難 仍指其樹曰「恩如母」 時人因號其地 曰母木邑 今云鉢悶迦奇訛也		
					4丙申	9甲辰	五月丙寅朔癸酉 軍至茅渟山城水門（亦名山井水門 茅渟 此云智怒） 時五瀨命失瘡痛甚 乃撫劔而雄詰之曰（撫劔 此云盧耆能多伽彌屠利辭 [□] ）「慨哉 大丈夫（慨哉 此云宇黎多棄伽夜）被傷於虜手 將不報而死耶」 時人因號其處 曰雄水門 進到于紀國龜山 而五瀨命薨于軍 因葬龜山 六月乙未朔丁巳 軍至名草邑 則誅名草戶畔者（戶畔 此云妬） 遂越狹野 而到熊野神邑 且登天磐盾 仍引軍漸進 海中卒遇暴風 皇舟漂蕩 時稻飯命乃歎曰「嗟乎 吾祖則天神母則海神 如何厄我於陸 復厄我於海乎」 言訖 乃拔劔入海 化為鋤持神 三毛入野命 亦恨之曰「我母及姨並是海神 何為起波瀾 以灌溺乎」 則蹈浪秀 而往乎常世鄉矣		
-663	神武 1即位 前紀	即位 前	-3戊午		5丙寅	8癸酉	天皇獨與皇子手研耳命 帥軍而進 至熊野荒坂津（亦名丹敷浦） 因誅丹敷戶畔者 時神吐毒氣 人物咸瘁 由是 皇軍不能復振 時彼處有人 號曰熊野高倉下 忽夜夢 天照大神 謂武甕雷神曰「夫葦原中國猶聞喧擾之響焉（聞喧擾之響焉 此云左擲寬利奈離） 宜汝更往而征之」 武甕雷神對曰「雖予不行 而下予平國之劔 則國將自平矣」 天照大神曰「諾（諾 此云宇每那利）」 時武甕雷神 登謂高倉曰「予劔號曰靈（靈 此云赴屠能瀾磨） 今當置汝庫裏 宜取而獻之天孫 高倉曰「唯々」而寤之 明日 依夢中教 開庫視之 果有落劔 倒立於庫底板 即取以進之 于時 天皇適寐 忽然而寤之曰「予何長眠若此乎」 尋而中毒士卒 悉復醒起 既而皇師 欲趣中洲 而山中嶮絕 無復可行之路 乃棲遑不知所跋涉 時夜夢 天照大神訓于天皇曰「朕今遣頭八咫鳥 宜以為導導者」 果有頭八咫鳥 自空翔降 天皇曰「此鳥之來 自叶祥夢 大哉 赫矣 我皇祖天照大神 欲以助成基業乎」 是時 大伴氏之遠祖日臣命 帥大來目 督將元戎 蹈山營行 乃尋鳥所向 仰視而追之 遂達于菟田下縣 因號某所至之處 曰菟田穿邑（穿邑 此云于介知能務羅） 于時 勅誓曰臣命曰「汝忠而且勇 加有能導之功 是以 改汝名為道臣」	49	○靈劔・頭八咫鳥
					23丁巳				
					6乙未				
					24戊午				

【神武天皇（神日本磐余尊）】

西曆	天皇 代	天皇	年 号	年	月	日	記事・原文	年令	備考
西曆	天皇 代	天皇	年 号	年	月	日	記事・原文	年令	備考
-663	神武 1即位 前紀	即位 前	-3戊午	-	9甲子	5戊辰	秋八月甲午朔乙未 天皇使徵兄狛及弟狛者〔狛 此云宇介志〕 是兩人 菟田縣之魁帥者也〔魁帥 此云比鄧誤迦彌〕 時兄狛不來 弟狛即詣至 因拜軍門 而告之曰「臣兄々狛之爲逆狀也 聞天孫且到 即起兵將襲 望見皇師之威 懼不敢敵 乃潛伏其兵 權作新宮 而殿內施機 欲因讐響 以作難 願知此詐 善爲之備」 天皇即遣道臣命 察其逆狀 時道臣命 審知有賊害之心 而大怒詰責之曰 「虜爾所造屋 爾自居之」〔爾 此云飢例〕 因案劔彎弓 逼令催入 兄狛獲罪於天 事無所辭 乃自蹈機而壓死 時陳其屍而斬之 流血沒踝 故號其地 曰菟田血原 已而弟狛大設牛酒 以勞饗皇師焉 天皇以其酒穴 班賜軍卒 乃爲御謠之曰〔謠 此云宇預彌〕 于能多加機珥 辭藝和奈破瀨 和餓末夜夜 辭藝破佐夜羅孺 伊殊區波辭 區羅佐夜離 固奈瀨餓 那居波佐麼 多智曾麼能 未迺那鷄句場 居氣辭被惠禰 宇破奈利餓 那居波佐麼 伊智佐介幾 未迺那鷄句場 居氣被惠禰 是謂來目歌 今樂府奏此歌者 猶有手量大小 及音聲巨細 此古之遺式也 是後 天皇欲省吉野之地 乃從菟田穿邑 親率輕兵巡幸焉 至吉野時 有 人出自井中 光而有尾 天皇問之曰「汝何人」 對曰「臣是國神 名爲井 光」 此則吉野首部始祖也 更少進 亦有尾而披磐石而出者 天皇問之曰「汝何人」 對曰「臣是磐排 別之子」〔排別 此云飢時和句〕 此則吉野國櫛部始祖也 及緣水西行 亦有作梁取魚者〔梁 此云擲奈〕 天皇問之 對曰「臣是苞 直擔之子」〔苞直擔 此云珥倍毛菟〕此則阿太餐部始祖也 九月甲子朔戊辰 天皇陟彼菟田高倉山之巔 瞻望域中 時國見丘上則有八 十梟帥〔梟帥 此云多稽〕 又於女坂置女軍 男坂置男軍 墨坂置炭 其 女坂 男坂 墨坂之號 由此而起也 復有兄磯城軍 布滿於磐余邑〔磯 此云志〕 賊虜所據 皆是要害之地 故道路絕塞 無處可通 天皇惡之 是夜自而寢 夢有天神訓之曰「宜取天香山社中土〔香山 此云介遇夜摩〕 以造天平瓮八十枚〔平瓮 此云遲介〕 造嚴瓮 而敬祭天神地祇〔嚴瓮 此云怡途背〕 亦爲嚴呪詛 如此 則虜自平伏〔嚴呪詛 此云怡途能伽 辭離〕 天皇祇承夢訓 依以將行 時弟狛又奏曰「倭國磯城邑 有磯城八十梟帥 又高尾張邑〔或本云 葛城邑也〕 有赤銅八十梟帥 此類皆欲與天皇距戰 臣竊爲天皇憂之 宜今當取天香山壇 以造天平瓮 而祭天社國社之神 然後擊虜則易除也」 天皇既以夢辭爲吉兆 及聞弟狛之言 益喜於懷 乃使椎根津彥 著弊衣服 及蓑笠 爲老父貌 又使弟狛被箕 爲老嫗貌 而勅之曰「宜汝二人 到天 香山 潛取其巔土 而可來旋矣 基業成否 當以汝爲占 努力慎歟」 是時 虜兵滿路 難以往還 時椎根津彥 乃之曰「我皇當能定此國者 行路自通 如不能者 賊必防禦」 言訖徑去 時群虜見二人 大咲之曰「 大醜乎〔大醜 此云鞅奈彌句〕 老父老嫗」 則相與關道使行 二人得至 其山 取土來歸 於是 天皇甚悅 乃以此壇 造作八十平瓮 天手挾八十枚〔手挾 此云多 衛餽離〕 嚴瓮 而陟于丹生川上 用祭天神地祇 則於菟田川之朝原 譬如水沫 而有所呪著也 天皇又因之曰「吾今當以八十平瓮 無水造飴 々成 則吾必不假鋒刃之威 坐平天下」 乃造飴 々即自成 又之曰「吾今當以嚴瓮 沈于丹生之川 如魚無大小 悉醉而流 譬猶？葉之浮流者〔？ 此云磨紀〕 吾必能定 此國 如其不爾 終無所成」 乃沈瓮於川 其口向下 頃之魚皆浮出 隨 水 時椎根津彥 見而奏之 天皇大喜 乃拔取丹生川上之五百箇眞坂樹 以祭諸神 自此始有嚴瓮之置也 時勅道臣命 「今以高皇產靈尊 朕親作顯齋〔顯齋 此云于圓詩怡破〕 用汝爲齋主 授以嚴媛之號 而名某所置壇瓮 爲嚴瓮 又火名爲嚴香來雷 水名爲嚴罔象女〔罔象女 此云瀾菟破迺迷〕 粮名爲嚴稻魂女〔稻魂女 此云于伽能迷〕 薪名爲嚴山雷 草名爲嚴野椎」 冬十月癸巳朔 天皇嘗其嚴瓮之粮 勒兵而出 先擊八十梟帥於國見丘 破 斬之 是役也 天皇志存必克 乃爲御謠之曰 伽牟伽並能 伊齊能于瀨能 於費異之珥夜 異波臂茂等倍 之多瀨能 之多瀨能 阿誤豫 阿誤豫 之多太瀨能 異波比茂等倍離 于智弓之夜務 于智弓之夜務 謠意 以大石喻其國見丘也 既而餘黨猶繁 其情難測 乃勅道臣命「汝宜帥大來目部 作大室於忍坂邑 盛設宴饗 誘虜而取之 」 道臣命 於是 奉密旨 掘於忍坂 而遣我猛卒 與虜難居 陰期之曰 「酒酣之後 吾則起歌 汝等聞吾歌聲 則一時刺虜」 已而坐定酒行 虜 不知我之有陰謀 任情徑醉 時道臣命 乃起而歌之曰 於佐箇遜 於勝務露夜珥 比苔瑳破而 異離烏利苔毛 比苔瑳破而 根伊離烏利苔毛 瀾都瀾都志 俱梅能固違餓 勾都々伊 異志都々伊毛智 于智弓之夜務 時我卒聞歌 俱拔其頭椎劔 一時殺虜 々無復類者 皇軍大悅 仰天而 咲 因歌之曰 伊波豫 伊波豫 阿々時夜場 伊而毛 阿誤豫 伊而毛 阿誤豫 今來自部歌而後大哂 是其緣也 又歌之曰 愛瀨詩烏 利 毛々那比苔 比苔破易陪迺毛 多半伽毛勢儻 此皆承密旨而歌之 非敢自尊者也 時天皇曰「戰勝而無驕者 良將之行也 今魁賊已滅 而同惡者 尙々十數 群 其情不可知 如何久居一處 無以制變」 乃從營於別處	49	○兄狛及弟狛
						10癸巳	1癸巳		○兄磯城・弟磯城

【神武天皇（神日本磐余尊）】

西曆	天皇 代 天皇	年号	年 年 干支	月 閏月	日 朔 日 干支	記事・原文	年令	備考
-663	神武 即位前紀	即位前	-3戊午	-	11癸亥	7己巳		
						十有一月癸亥朔己巳 皇師大舉 將攻磯城彦 先遣使者 徵兄磯城 兄磯城不承命 更遣頭八咫鳥召之 時鳥到其營而鳴之曰「天神子召汝 怡裝過 怡裝過」〔過 音倭〕 兄磯城忿之曰「聞天壓神至 而吾爲憤憤時 奈何鳥鳥若此惡鳴耶」〔壓 此云飮菟〕 乃彎弓射之 鳥即避去 次到弟磯城宅 而鳴之曰「天神子召汝 怡裝過 怡裝過」 時弟磯城然改容曰「臣聞天壓神至 旦夕畏懼 善乎鳥 汝鳴之若此者歟」 即作葉盤八枚 盛食饗之〔葉盤 此云羅耐〕 因以隨鳥 詣到而告之曰「吾兄々磯城 聞天神子來 則聚八十梟帥 具兵甲 將與決戰 可早圖之」 天皇乃曾諸將 問之曰「今兄磯城 果有逆賊之意 召亦不來 爲之奈何」 諸將曰「兄磯城黠賊也 宜先遣弟磯城曉喻之 說兄倉下 弟倉下 如遂不歸順 然後舉兵臨之 亦未晚也」〔倉下 此云衝羅餽〕 乃使弟磯城開示利害 而兄磯城等 猶守愚謀 不肯承伏 時椎根津彥 計之曰「今者宜先遣我女軍 出自忍坂道 虜見之必盡銳而赴 吾則馳馳勁卒 直指墨坂 取苑田川水 以灌其炭火 忽之間出其不意 則破之必也」 天皇善其策 乃出女軍以臨之 虜謂大兵已至 畢力相待 先是 皇軍攻必取 戰必勝 而介冑之士 不無疲弊 故聊爲御謠 以慰將卒之心焉 謠曰 々々奈梅豆 伊那瑤能椰摩能 虚能由毛 易喻耆摩毛羅 多々介陪麼 和例破椰隈怒 之摩途等利 宇介饗饒等茂 伊媛開珥虚禰 果以男軍越墨坂 從後夾擊破之 斬其梟帥兄磯城等		
						十有二月癸巳朔丙申 皇師遂擊長髓彦 連戰不能取勝 時忽然天陰而雨氷 乃有金色靈鷲 飛來止于皇弓之弭 其鷲光輝 狀如流電 由是 長髓彦軍卒皆迷眩 不復力戰 長髓是邑之本號焉 因亦以爲人名 及皇軍之得鷲瑞也 時人仍號鷲邑 今云鳥見是訛也 昔孔舍衛之戰 五瀨命中矢而薨 天皇銜之 常懷憤 至此役也 意欲窮跡 乃爲御謠之曰 瀰都瀰都志 俱海能故邏餓 介耆茂等珥 阿波赴珥破 介瀰羅荖茂荖 曾迺餓毛荖 曾禰梅屠那藝豆 于答豆之夜務 又謠之曰 瀰都々々志 俱梅能故邏餓 介耆茂等珥 宇惠志破餽介瀰 句致弭比俱 和例破輸例儒 于智豆之夜務 因復縱兵急攻之 凡諸御謠 皆謂來目歌 此的取歌者而名之也 時長髓彦 乃遣行人 言於天皇曰「嘗有天神之子 乘天磐船 自天降止 號曰櫛玉饒速日命〔饒速日 此云藝波椰卑〕 是娶吾妹三炊屋媛〔亦名長髓媛 亦名鳥見屋媛〕 遂有兒息 名曰可美眞手命〔可美眞手 此云于魔詩耐〕 故吾以饒速日命 爲君而奉焉 夫天神之子 豈有兩種乎 奈何更稱天神子 以奪人地乎 吾心推之 未必爲信 天皇曰「天神子亦多耳 汝所爲君 是實天神之子者 心有表物 可相示之」 長髓彦速取饒速日命之天羽々矢一隻及步鞆 以奉示天皇 々々覽之曰「事不虛也」 還以所御天羽々矢一隻及步鞆 賜示於長髓彦 長髓彦見其天表 益懷 然而凶器已構 其勢不得中休 而猶守迷圖 無復改意 饒速日命 本知天神慙慙 唯天孫是與 且見夫長髓彦棄性悞 不可教以天人之際 乃殺之 帥其衆而歸順焉 天皇素聞饒速日命 是自天降者 而今果立忠效 則褒而寵之 比物部氏之遠祖也	49	○長髓彦・金鷲
						己未年春二月壬辰朔辛亥 命諸將續士卒 是時 層富縣波丘岬 有新城戸畔者〔丘岬 此云塙介佐葉〕 又和珥坂下 有居勢祝者〔坂下 此云瑤伽梅荖〕 瞻見長柄丘岬 有猪祝者 此三處土蜘蛛 並恃其勇力 不肯來庭 天皇乃分遣偏師 皆誅之 又高尾張邑 有土蜘蛛 其爲人也 身短而手足長 與休儒相類 皇軍結葛網 而掩襲殺之 因改號其邑曰葛城 夫磐余之地 舊名片居〔片居 此云伽羣〕 亦曰片立〔片立 此云伽知〕 逮我皇師之破虜也 大軍集而滿於其地 因改號爲磐余 或曰「天皇往嘗嚴瓮根 出軍西征 是時 磯城八十梟帥 於彼處屯聚居之〔屯聚居 此云怡波瀰婆〕 果與天皇大戰 遂爲皇師所滅 故名之曰磐余邑 又皇師立詰之處 是謂猛田 作城處 號曰城田 又賊衆戰死而僵屍 枕臂處呼爲賴枕田 天皇以前年秋九月 潛取天香山之墳土 以造八十平瓮 躬自齋戒祭諸神 遂得安定區宇 故號取土之處 曰墳安		
-662			-2己未		2壬辰	20辛亥		○大和乎定
						三月辛酉朔丁卯 下令曰 「自我東征 於？六年矣 賴以皇天之威 凶徒就戮 雖遺土未清 餘妖尚梗 而中洲之地 無復風塵 誠宜恢廓皇都 規大壯 而今運屬屯蒙 民心朴素 巢棲穴住 習俗惟常 夫大人立制 義必隨時 苟有利民 何妨聖造 且當披拂山林 經營宮室 而恭臨寶位 以鎮元元 上則乾乾靈授國之德 下則弘皇孫養正之心 然後 兼六合以開都 掩八紘而爲宇 不亦可乎 觀夫欽傍山〔欽傍山 此云宇禰摩夜摩〕 東南檀原地者 蓋國之壤區乎 可治之」 是月 卽命有司 經始帝宅		○檀原宮の造営
-661			-1庚申		8癸丑	16戊辰		
						庚申年秋八月癸丑朔戊辰 天皇當立正妃 改廣求華尊 時有人奏之曰「事代主神 共三嶋瀟？耳之女玉？媛所生兒 號曰媛蹈？五十鈴媛命 是國色之秀者」 天皇悅之 九月壬午朔乙巳 納媛蹈？五十鈴媛命 以爲正妃	51	
-660	神武	神武	1辛酉	-	1庚辰	1庚辰		○神武即位 海：52才辛酉、周惠王 17年
						辛酉年春正月庚辰朔 天皇帝位於檀原宮 是歲爲天皇元年 正妃爲皇后 生皇神八井命・神淨名川耳 故古語稱之曰「於欽傍之檀原也 太立宮柱於底磐之根 峻時搏風於高天之原 而始取天下之天皇 號曰神日本磐余火々出見天皇焉」 初天皇草創天基之日也 大伴氏遠祖道臣命 帥大來目部 奉承密策 能以謳歌倒語 掃蕩妖氣 倒語之用 始起乎	52	

【神武天皇（神日本磐余尊）】

西暦	天皇 代	天皇	年号	年 干支	月 閏	日 朔	日 干支	記事・原文	年令	備考
-659				2壬戌	-	2甲辰	2乙巳	二年春二月甲辰朔乙巳 天皇定功行賞 賜道臣命宅地 居于築坂邑 以寵異之 亦使大來目居于畝傍山以西川邊之地 今號來目邑 此其緣也 以珍彥爲倭國速〔珍彥、此云于□□故〕 又給弟狛猛田邑 因爲猛田縣主 是□田主水部遠祖也 弟磯城名黑速 爲磯城縣主 復以劔根者 爲葛城國造 又頭八咫鳥 亦入賞例 其苗裔 即葛野主殿縣主部是也	53	
-658				3癸亥	-	-	-	-	54	
-657				4甲子	-	2壬戌	23甲申	四年春二月壬戌朔甲申 詔曰「我皇之靈也 自天降鑒 光助朕躬 今諸虜已平 海內無事 可以郊祀天神 用申大孝者也」 乃立靈時於鳥見山中 其地號曰上小野榛原・下小野榛原 用祭皇祖天神焉	55	
-656				5				-	56	
-655				6				-	57	
-654				7				-	58	
-653				8				-	59	
-652				9				-	60	
-651				10				-	61	
-650				11				-	62	
-649				12				-	63	
-648				13				-	64	
-647				14甲戌	-	-	-	-	65	
-646				15				-	66	
-645				16				-	67	
-644				17				-	68	
-643				18				-	69	
-642				19				-	70	
-641				20				-	71	
-640				21				-	72	
-639				22				-	73	
-638				23				-	74	
-637				24甲申	-	-	-	-	75	
-636				25				-	76	
-635				26				-	77	
-634				27				-	78	
-633				28				-	79	
-632				29己丑	-	-	-	綏靖生（【綏靖即位前紀】「至四十八歲神日本磐余彥天皇崩」から算出）	80	綏靖：生
-631				30庚寅	-	-	-	-	81	
-630	1神武	神武		31辛卯	-	4乙酉	1乙酉	卅有一年夏四月乙酉朔 皇輿巡幸 因登腋上□間丘 而迴望國狀曰「□哉乎國之獲矣（□哉 此云執奈珥夜） 雖內木綿之真□國 猶如二蜻蛉之臂□焉 由是 始有秋津洲之號也 昔伊弉諾尊曰此國曰「日本者浦安國 細戈千足國 磯輪上秀真國（秀真國 此云二柁國□句□）」 復大己貴大神曰之曰「玉牆內國」 及下至鎮速日命 乘天磐船 而翔行太虛也 睨是鄉而降之 故因曰之 曰「虛空見日本國」矣	82	
-629				32壬辰	-	-	-	-	83	
-628				33癸巳	-	-	-	-	84	
-627				34甲午	-	-	-	-	85	
-626				35				-	86	
-625				36				-	87	
-624				37				-	88	
-623				38				-	89	
-622				39				-	90	
-621				40				-	91	
-620				41				-	92	
-619				42壬寅	-	1壬子	3甲寅	四十有二年春正月壬子朔甲寅 立皇子淳名川耳尊 爲皇太子	93	○綏靖：14歳（立太子）
-618				43癸卯	-	-	-	-	94	
-617				44甲辰	-	-	-	-	95	
-616				45				-	96	
-615				46				-	97	
-614				47				-	98	
-613				48				-	99	
-612				49				-	100	
-611				50				-	101	
-610				51				-	102	
-609				52				-	103	
-608				53				-	103	
-607				54甲寅	-	-	-	-	105	
-606				55				-	106	
-605				56				-	107	
-604				57				-	108	
-603				58				-	109	
-602				59				-	110	
-601				60				-	111	
-600				61				-	112	
-599				62				-	113	
-598				63				-	114	
-597				64甲子	-	-	-	-	115	
-596				65				-	116	
-595				66				-	117	

【神武天皇（神日本磐余尊）】

西暦	天皇 代 天皇	年号	年 年 干支	月 閏 月	日 朔 日 干支	記事・原文	年令	備考
-594			67			-	118	
-593			68			-	119	
-592			69			-	120	
-591			70			-	121	
-590			71			-	122	
-589	神武	神武	72			-	123	
-588	1		73			-	124	
-587			74甲戌	-	- - - -	-	125	
-586			75乙亥	-	- - - -	-	126	
-585			76丙子	-	3甲午 11甲辰	七十有六年春三月甲午朔甲辰 天皇崩于橿原宮 時年一百廿七歳 【綏靖即位前紀】 至四十八歳 神日本磐余彦天皇崩	127	記：137歳 海：127歳 綏靖：48歳
-584	神武 後記	-	-丁丑	-	9乙卯 12丙寅	明年秋九月乙卯朔丙寅 葬畝傍山東北陵	-	空白年

【綏靖天皇（神渟名川耳尊）】

西暦	天皇 代	天皇	年号	年 干支	月 閏月	日 朔日	日 干支	記事・原文	年令	備考
-			-	-	-	-	-	神渟名川耳天皇 神日本磐余彦天皇第三子也 母曰媛蹈備五十鈴媛命 事代主神之大女也 天皇風姿岐嶷 少有雄拔之氣 及壯容貌魁偉 武藝過人而志尚沈毅	-	
-632				29己丑	-	-	-	綏靖生（「至四十八歲神日本磐余彦天皇崩」から算出。年令以下同）	1	○綏靖誕生
-619				42壬寅	-	-	-	【神武紀】 有二年春正月壬子朔甲寅 立皇子神渟名川耳尊 爲皇太子	14	○綏靖立太子
-585			神武	76丙子	-	-	-	至四十八歲神日本磐余彦天皇崩 時神渟名川耳尊孝性純深 悲恭無已 特留心於喪葬之事焉 其庶兄手研耳命 行年已長 久歷朝機 故亦委事而親之 【神武紀】 七十有六年春三月甲午朔甲辰 天皇崩於橿原宮 時年一百廿七歲	48	
-584				-3丁丑	-	-	-	【神武紀】 明年秋九月乙卯朔丙寅、葬畝傍山東北陵。	49	空白1年
-583				-2戊寅	-	-	-		50	空白2年
-582		綏靖即位前紀	即位前	-1己卯	-	-	-	然其王立操□懷 本乖仁義 遂以諒闇之際威福自由 包藏禍心 圖害二弟（□：厂+昔） 于時也 太歲己卯 冬十一月 神渟名川耳尊 與兄神八井耳命 陰知其志而善防之 於山陵事畢 乃使弓部稚彥造弓 倭鍛部天津眞浦造眞□鏃 矢部作箭 及弓矢既成 （□：鹿+弓・耳） 神渟名川耳尊 欲以射殺手研耳命 會有手研耳命於片丘大 中獨臥于大牀 時渟名川耳尊謂神八井耳命曰「今適其時也 夫言貴密。事宜慎 故我之陰謀本無預者 今日之事唯吾與爾自行之耳 吾當先開□戸 爾其射之」 因相隨進入 （□：あなかんむり+音） 神渟名川耳尊 突開其戸 神八井耳命 則手脚戰慄不能放矢 時神渟名川耳尊 掣取其兄所持弓矢 而射手研耳命 一發中胸 再發中背 遂殺之 於是神八井耳命 慙然自服 讓於神渟名川耳尊曰「吾是乃兄 而懦弱不能致果 今汝特挺神武 自誅元惡 宜哉乎 汝之光臨天位以承皇祖之業 吾當爲汝輔之奉典神祇者」 是即多臣之始祖也	51	空白3年 空白3年
-581				1庚辰	-	1壬申	8己卯	元年春正月壬申朔己卯 神渟名川耳尊即天皇位 都葛城是謂高丘宮 尊皇后曰曼太后	52	○綏靖即位 海：神武崩四年兄弟共治國辛巳正月即位
-580		2		2辛巳	-	1丙寅	-	是年也 太歲庚辰 二年春正月 立五十鈴依媛爲皇后 〔一書云 磯城縣主女 川派媛 一書云 春日縣主大日諸女 糸織媛也〕 即天皇之姨也 后生磯城津彥玉手看天皇	53	
-579				3壬午	-	-	-		54	
-578				4癸未	-	4癸丑	-	四年夏四月 神八井耳命薨即葬于畝傍山北	55	
-577				5甲申	-	-	-	安寧生（【安寧即位前紀】「天皇以神渟名川耳天皇廿五年 立爲皇太子 年廿一」から算出）	56	安寧：生
-576				6	-	-	-		57	
-575				7	-	-	-		58	
-574				8	-	-	-		59	
-573				9	-	-	-		60	
-572				10	-	-	-		61	
-571				11	-	-	-		62	
-570				12	-	-	-		63	
-569				13	-	-	-		64	
-568				14	-	-	-		65	
-567				15甲午	-	-	-		66	
-566		綏靖	綏靖	16	-	-	-		67	
-565				17	-	-	-		68	
-564				18	-	-	-		69	
-563				19	-	-	-		70	
-562				20	-	-	-		71	
-561				21	-	-	-		72	
-560				22	-	-	-		73	
-559				23	-	-	-		74	
-558				24	-	-	-		75	
-557				25甲辰	-	1壬午	7戊子	廿五年春正月壬午朔戊子 立皇子磯城津彥玉手看尊 爲皇太子 【安寧即位前紀】 天皇以神渟名川耳天皇廿五年 立爲皇太子 年廿一	76	○安寧：21歳 (立太子)
-556				26乙巳	-	-	-		77	
-555				27丙午	-	-	-		78	
-554				28丁未	-	-	-		79	
-553				29戊申	-	-	-	懿德生（【懿德即位前紀】「磯城津彥玉手看天皇 十一年春正月壬戌立爲皇太子 年十六」から算出）	80	懿德：生
-552				30己酉	-	-	-		81	
-551				31庚戌	-	-	-		82	
-550				32辛亥	-	-	-		83	
-549				33壬子	-	5甲子	-	卅三年夏五月 天皇不豫 癸酉崩 時年八十四	84	記：45歳 海：84歳 安寧：29歳 懿德：5歳

【安寧天皇（磯城津彥玉手看尊）】

西暦	天皇 代	天皇	年号	年 干支	月 閏	日 朔	日 干支	記事・原文	年令	備考
-			-	-	-	-	-	磯城津彥玉手看天皇 神淳名川耳天皇太子也 母曰五十鈴依媛命 事代主神之少女也	-	
-577				5甲申	-	-	-	安寧生（「天皇以神淳名川耳天皇廿五年 立為皇太子 年廿一」から算出）	1	○安寧誕生
-557		安寧即位前紀	綏靖	25甲辰	-	-	-	天皇以神淳名川耳天皇廿五年 立為皇太子 年廿一 【綏靖紀】 廿五年春正月壬午朔戊子 立皇子磯城津彥玉手看尊為皇太子	21	○安寧立太子
-549				33壬子	-	5甲子	-	三十三年夏五月 神淳名川耳天皇崩 【綏靖紀】 卅三年夏五月 天皇不豫 癸酉崩 時年八十四 其年七月癸亥朔乙丑 太子即天皇位	29	○安寧即位
-548				1癸丑	-	10丙戌	11丙申	元年冬十月丙戌朔丙申 葬神淳名川耳天皇於倭桃花鳥田丘上陵 尊皇后曰皇太后	30	海：元年甲寅
-547				2甲寅	-	-	-	是年也 太歲癸丑		
-546				3乙卯	-	1戊寅	5壬午	二年 遷都於片鹽 是謂浮孔宮 三年春正月戊寅朔壬午 立淳名底仲媛命（亦曰 淳名襲媛）為皇后（一書云 磯城縣主葉江女 川津媛 一書云 大間宿禰女 糸井媛） 先是 后生二皇子 第一曰息石耳命 第二曰大日本彥耜友天皇（一云生三皇子 第一曰常津彥某兄 第二曰大日本彥耜友天皇 第三曰磯城津彥命）	31	
-545				4				-	32	
-544				5				-	33	
-543				6				-	34	
-542				7				-	35	
-541				8				-	36	
-540				9				-	37	
-539				10				-	38	
-538	3			11癸亥	-	1壬戌	1壬戌	十一年春正月壬戌朔 立大日本彥耜友尊 為皇太子也 弟磯城津彥命 是猪使連之始祖也 【懿德即位前紀】 磯城津彥玉手看天皇 十一年春正月壬戌立為皇太子 年十六	39	○懿德：16歳（立太子）
-537				12甲子	-	-	-	-	40	
-536				13				-	41	
-535				14				-	42	
-534				15				-	43	
-533	安寧	安寧		16				-	44	
-532				17				-	45	
-531				18				-	46	
-530				19				-	47	
-529				20				-	48	
-528				21				-	49	
-527				22甲戌	-	-	-	-	50	懿德：26歳
-526				23				-	51	
-525				24				-	52	
-524				25				-	53	
-523				26				-	54	
-522				27				-	55	
-521				28				-	56	
-520				29				-	57	
-519				30				-	58	
-518				31				-	59	
-517				32甲申	-	-	-	-	60	懿德：36歳
-516				33乙酉	-	-	-	-	61	
-515				34丙戌	-	-	-	-	62	
-514				35丁亥	-	-	-	-	63	
-513				36戊子	-	-	-	-	64	懿德：40歳
-512				37己丑	-	-	-	-	65	
-511				38庚寅	-	12庚戌	6乙卯	卅八年冬十二月庚戌朔乙卯 天皇崩 時年五十七	66	記：49歳 海：84歳 懿德：43歳

【懿德天皇（大日本彦耜友尊）】

西暦	天皇 代	天皇	年号	年 年	干支	月 閏月	日 朔	日 日	干支	記事・原文	年令	備考
-			-	-	-	-	-	-	-	大日本彦耜友天皇 磯城津彦玉手看天皇第二子也 母曰淳名底仲媛命 事代主神孫 鴨王女也	-	
-553		懿德即位前紀	綏靖	29	戊申	-	-	-	-	懿德生（「磯城津彦玉手看天皇 十一年春正月壬戌立為皇太子 年十六」から算出）	1	○懿德誕生
-538		安寧		11	癸亥	-	1	壬戌	1	壬戌 磯城津彦玉手看天皇 十一年春正月壬戌立為皇太子 年十六 【安寧紀】	16	○懿德立太子
-511				38	庚寅	-	12	庚戌	-	十一年春正月壬戌朔 立大日本彦耜友尊 為皇太子也 卅八年冬十二月 磯城津彦玉手看天皇崩 【安寧紀】	43	
							2	己酉	4	壬子 元年春二月己酉朔壬子 皇太子即天皇位		○懿德即位 海：元年壬辰
-510				1	辛卯	-	8	丙午	1	丙午 秋八月丙午朔 葬磯城津彦玉手看天皇 於歛傍山南御陰井上陵	44	
							9	丙子	14	己丑 九月丙子朔乙丑 尊皇后日皇太后 （「丙子朔」には「乙丑」日は存在しない。己丑 14日 と校訂。）		
							-	-	-	是年也 太歳辛卯		
-509				2	壬辰	-	1	甲戌	6	戊寅 二年春正月甲戌朔戊寅 遷都於輕地 是謂曲峽宮	45	
-508							2	癸卯	11	癸丑 二月癸卯朔癸丑 立天豐津媛命為皇后（一云 磯城縣主葉江男弟猪手女 泉媛 一云 磯城縣主太真稚彦女 飯日媛也）		
-507				3	癸巳	-	-	-	-	后生觀松彦香殖稻天皇（一云 天皇母弟 武石彦奇友背命）	46	
-506				4	甲午	-	-	-	-		47	
-506				5	乙未	-	-	-	-	孝昭生（「廿二年春二月丁未朔戊午 立觀松彦香殖稻尊為皇太子 年十八」から算出）	48	孝昭：生
-505				6						-	49	
-504				7						-	50	
-503				8						-	51	
-502				9						-	52	
-501				10						-	53	
-500				11						-	54	
-499				12						-	55	
-498				13						-	56	
-497				14	甲辰	-	-	-	-	-	57	
-496	懿德	懿德		15	乙巳	-	-	-	-	-	58	
-495				16	丙午	-	-	-	-	-	59	
-494				17	丁未	-	-	-	-	-	60	
-493				18	戊申	-	-	-	-	-	61	
-492				19	己酉	-	-	-	-	-	62	
-491				20	庚戌	-	-	-	-	-	63	
-490				21	辛亥	-	-	-	-	-	64	
-489				22	壬子	-	2	丁未	12	戊午 廿二年春二月丁未朔戊午 立觀松彦香殖稻尊為皇太子 年十八 【孝昭即位前紀】	65	○孝昭：18歳 （立太子）
-488				23	癸丑	-	-	-	-	-	66	
-487				24	甲寅	-	-	-	-	-	67	
-486				25						-	68	
-485				26						-	69	
-484				27						-	70	
-483				28						-	71	
-482				29						-	72	
-481				30						-	73	
-480				31						-	74	
-479				32						-	75	孝昭：28歳
-478				33						-	76	
-477				34	甲子	-	9	甲子	8	辛未 卅四年秋九月甲子朔辛未 天皇崩	77	記：49歳 海：84歳 孝昭：30歳

【孝昭天皇（觀松彦香殖稻尊）】

西暦	天皇 代	天皇	年号	年 干支	月 閏月	日 朔日	干支	記事・原文	年令	備考
-			-	-	-	-	-	觀松彦香殖稻天皇 大日本彦耜友天皇太子也 母皇后天豐津媛命 息石耳命之女也	-	
-506				5乙未	-	-	-	孝昭生（【懿德紀】「廿二年春二月丁未朔戊午 立觀松彦香殖稻尊爲皇太子 年十八」から算出）	1	○孝昭誕生
-489	孝昭 即位 前紀	懿德	22壬子	-	2丁未	12戊午	-	天皇以大日本彦耜友天皇廿二年春二月丁未朔戊午 立爲皇太子 【懿德紀】 廿二年春二月丁未朔戊午 立觀松彦香殖稻尊爲皇太子 年十八	18	○孝昭立太子
-477			34甲子	-	9甲子	-	-	卅四年秋九月 大日本彦耜友天皇崩 【懿德紀】 卅四年秋九月甲子朔辛未 天皇崩	30	
-476		即位 前	-1乙丑	-	10戊午	11庚午	-	明年冬十月戊午朔庚午 葬大日本彦耜友天皇於畝傍山南織沙谿上陵	31	空白1年
-475				1丙寅	-	1丙戌	9甲午	元年春正月丙戌朔甲午 皇太子即天皇位		○孝昭即位 海：元年丙寅
			1丙寅	-	4乙卯	5己未	-	夏四月乙卯朔己未 尊皇后曰皇太后	32	
				-	7甲申	-	-	秋七月 遷都於掖上是謂池心宮		
				-	-	-	-	是年也 太歲丙寅		
-474			2					-	33	
-473			3					-	34	
-472			4					-	35	
-471			5					-	36	
-470			6					-	37	
-469			7					-	38	
-468			8					-	39	
-467			9甲戌	-	-	-	-	-	40	
-466			10					-	41	
-465			11					-	42	
-464			12					-	43	
-463			13					-	44	
-462			14					-	45	
-461			15					-	46	
-460			16					-	47	
-459			17					-	48	
-458			18					-	49	
-457			19甲申	-	-	-	-	-	50	
-456			20					-	51	
-455			21					-	52	
-454			22					-	53	
-453			23					-	54	
-452			24					-	55	
-451	5		25					-	56	
-450			26					-	57	
-449			27					-	58	
-448			28					-	59	
-447	孝昭 孝昭		29甲午	-	1甲辰	3丙午	-	廿九年春正月甲辰朔丙午 立世襲足媛爲皇后（一云 磯城縣主葉江女 淳名城津媛 一云 倭國豐秋狹太媛女 大井媛也） 后生天足彦國押人命 日本足彦國押人天皇	60	
-446			30					-	61	
-445			31					-	62	
-444			32					-	63	
-443			33					-	64	
-442			34					-	65	
-441			35					-	66	
-440			36					-	67	
-439			37					-	68	
-438			38					-	69	
-437			39甲辰	-	-	-	-	-	70	
-436			40					-	71	
-435			41					-	72	
-434			42					-	73	
-433			43					-	74	
-432			44					-	75	
-431			45					-	76	
-430			46					-	77	
-429			47					-	78	
-428			48					-	79	
-427			49甲寅	-	-	-	-	孝安生（「六十八年春正月丁亥朔庚子 立日本足彦國押人尊 爲皇太子 年廿」から算出）	80	孝安：生
-426			50					-	81	
-425			51					-	82	
-424			52					-	83	
-423			53					-	84	
-422			54					-	85	
-421			55					-	86	
-420			56					-	87	
-419			57					-	88	
-418			58					-	89	
-417			59甲子	-	-	-	-	-	90	
-416			60					-	91	
-415			61					-	92	
-414			62					-	93	
-413			63					-	94	

【孝昭天皇（觀松彦香殖稻尊）】

西曆	天皇 代	天皇	年号	年 干支	月 閏	日 朔	日 干支	記事・原文	年令	備考
-412				64				-	95	
-411				65				-	96	
-410				66				-	97	
-409				67				-	98	
-408				68癸酉	-	1丁亥	14庚子	六十八年春正月丁亥朔庚子 立日本足彦國押人尊 爲皇太子 年廿 天足彦國押人命 此和珥臣等始祖也 【孝安即位前紀】 天皇 以觀松彦香殖稻天皇六十八年春正月 立爲皇太子	99	○孝安：20歳 (立太子)
-407				69甲戌	-	-	-	-	100	
-406				70				-	101	
-405				71				-	102	
-404				72				-	103	
-403	5	孝昭	孝昭	73				-	104	
-402				74				-	105	
-401				75				-	106	
-400				76				-	107	
-399				77				-	108	
-398				78				-	109	孝安：30歳
-397				79甲申	-	-	-	-	110	
-396				80乙酉	-	-	-	-	111	
-395				81丙戌	-	-	-	-	112	
-394				82丁亥	-	-	-	-	113	
-393				83戊子	-	8丁巳	5辛酉	八十三年秋八月丁巳朔辛酉 天皇崩	114	記：93歳 海：113歳 孝安：35歳

【孝安天皇（日本足彦國押人尊）】

西暦	天皇 代	天皇	年号	年 干支	月 閏月	日 朔	日 干支	記事・原文	年令	備考
-			-	-	-	-	-	日本足彦國押人天皇 觀松彦香殖稻天皇第二子也 母曰世襲足媛 尾張連遠祖 瀧津世襲之妹也	-	
-427				49甲寅	-	-	-	孝安生（【孝昭紀】「六十八年春正月丁亥朔庚子 立日本足彦國押人尊為皇太子 年廿」から算出）	1	○孝安誕生
-408		孝安即位前紀	孝昭	68癸酉	-	1丁亥	-	天皇 以觀松彦香殖稻天皇六十八年春正月 立為皇太子 【孝昭紀】 六十八年春正月丁亥朔庚子 立日本足彦國押人尊 為皇太子 年廿 天足彦國押人命 此和珥臣等始祖也	20	○孝安立太子
-393				83戊子	-	8丁巳	-	八十三年秋八月 觀松彦香殖稻天皇崩 【孝昭紀】 八十三年秋八月丁巳朔辛酉 天皇崩	35	
-392				1己丑	-	1乙酉	27辛亥	元年春正月乙酉朔辛亥 皇太子即天皇位	36	○孝安即位 海：元年己丑
-391				2庚寅	-	8辛巳	1辛巳	秋八月辛巳朔 尊皇后曰皇太后 是年也 太歲己丑		
-390				3辛卯	-	10甲戌	-	二年冬十月 遷都於室地 是謂秋津嶋宮	37	
-389				4壬辰	-	-	-	-	38	
-388				5癸巳	-	-	-	-	39	
-387				6甲午	-	-	-	-	40	
-386				7	-	-	-	-	41	
-385				8	-	-	-	-	42	
-384				9	-	-	-	-	43	
-383				10	-	-	-	-	44	
-382				11	-	-	-	-	45	
-381				12	-	-	-	-	46	
-380				13	-	-	-	-	47	
-379				14	-	-	-	-	48	
-378				15	-	-	-	-	49	
-377				16甲辰	-	-	-	-	50	
-376				17	-	-	-	-	51	
-375				18	-	-	-	-	52	
-374				19	-	-	-	-	53	
-373				20	-	-	-	-	54	
-372				21	-	-	-	-	55	
-371				22	-	-	-	-	56	
-370				23	-	-	-	-	57	
-369				24	-	-	-	-	58	
-368				25	-	-	-	-	59	
-367	6			26甲寅	-	2己丑	14壬寅	廿六年春二月己丑朔壬寅 立姪押媛為皇后（一云 磯城縣主葉江女 長媛一云 十市縣主五十坂彦女 五十坂媛也） 后生大日本根子彦太瓊天皇	60	
-366				27	-	-	-	-	61	
-365				28	-	-	-	-	62	
-364				29	-	-	-	-	63	
-363				30	-	-	-	-	64	
-362		孝安	孝安	31	-	-	-	-	65	
-361				32	-	-	-	-	66	
-360				33	-	-	-	-	67	
-359				34	-	-	-	-	68	
-358				35	-	-	-	-	69	
-357				36甲子	-	-	-	-	70	
-356				37乙丑	-	-	-	-	71	
-355				38丙寅	-	8丙子	14己丑	卅八年秋八月丙子朔己丑 葬觀松彦香殖稻天皇于掖上博多山上陵	72	
-354				39	-	-	-	-	73	
-353				40	-	-	-	-	74	
-352				41	-	-	-	-	75	
-351				42	-	-	-	-	76	
-350				43	-	-	-	-	77	
-349				44	-	-	-	-	78	
-348				45	-	-	-	-	79	
-347				46甲戌	-	-	-	-	80	
-346				47	-	-	-	-	81	
-345				48	-	-	-	-	82	
-344				49	-	-	-	-	83	
-343				50	-	-	-	-	84	
-342				51己卯	-	-	-	孝安生（「七十六年春正月己巳朔癸酉 立大日本根子彦太瓊尊 為皇太子 年廿六」から算出）	85	孝靈：生
-341				52	-	-	-	-	86	
-340				53	-	-	-	-	87	
-339				54	-	-	-	-	88	
-338				55	-	-	-	-	89	
-337				56甲申	-	-	-	-	90	
-336				57	-	-	-	-	91	
-335				58	-	-	-	-	92	
-334				59	-	-	-	-	93	
-333				60	-	-	-	-	94	
-332				61	-	-	-	-	95	
-331				62	-	-	-	-	96	
-330				63	-	-	-	-	97	
-329				64	-	-	-	-	98	
-328				65	-	-	-	-	99	
								-	100	

【孝安天皇（日本足彦國押人尊）】

西暦	天皇 代	天皇	年号	年 年	干支	月 閏月	日 朔日	干支	記事・原文	年令	備考
-327				66	甲午	-	-	-	-	101	
-326				67					-	102	
-325				68					-	103	
-324				69					-	104	
-323				70					-	105	
-322				71					-	106	
-321				72					-	107	
-320				73					-	108	
-319				74					-	109	
-318				75					-	110	
-317				76	甲辰	-	1己巳	5癸酉	七十六年春正月己巳朔癸酉 立大日本根子彦太瓊尊 爲皇太子 年廿六 【孝靈即位前紀】 天皇 以日本足彦國押人天皇七十六年春正月 立爲皇太子	111	○ 孝靈 : 26歳 (立太子)
-316				77					-	112	
-315				78					-	113	
-314				79					-	114	
-313				80					-	115	
-312				81					-	116	
-311				82					-	117	
-310				83					-	118	
-309	6	孝安	孝安	84					-	119	
-308				85					-	120	
-307				86	甲寅	-	-	-	-	121	孝靈 : 36歳
-306				87					-	122	
-305				88					-	123	
-304				89					-	124	
-303				90					-	125	
-302				91					-	126	
-301				92					-	127	
-300				93					-	128	
-299				94					-	129	
-298				95					-	130	
-297				96	甲子	-	-	-	-	131	孝靈 : 46歳
-296				97	乙丑	-	-	-	-	132	
-295				98	丙寅	-	-	-	-	133	
-294				99	丁卯	-	-	-	-	134	
-293				100	戊辰	-	-	-	-	135	
-292				101	己巳	-	-	-	-	136	
-291				102	庚午	-	1戊戌	9丙午	百二年春正月戊戌朔丙午 天皇崩	137	記 : 123歳 海 : 137歳 孝靈 : 52歳

【孝靈天皇（大日本根子彦太瓊尊）】

西暦	天皇 代 天皇	年号	年 干支	月 閏月	日 朔日	干支	記事・原文	年令	備考
-		-	-	-	-	-	大日本根子彦太瓊天皇 日本足彦國押人天皇太子也 母曰押媛 蓋天足彦國押人命之女乎	-	
-342			51己卯	-	-	-	孝靈生（【孝安紀】「七十六年春正月己巳朔癸酉 立大日本根子彦太瓊尊 爲皇太子 年廿六」から算出）	1	○孝靈誕生
-317	孝靈即位前紀	孝安	76甲辰	-	1己巳	-	天皇 以日本足彦國押人天皇七十六年春正月 立爲皇太子 【孝安紀】 七十六年春正月己巳朔癸酉 立大日本根子彦太瓊尊 爲皇太子 年廿六	26	○孝靈立太子
-291			102庚午	-	1戊戌	-	百二年春正月 日本足彦國押人天皇崩 【孝安紀】 百二年春正月戊戌朔丙午 天皇崩	52	
				9甲午	13丙午		秋九月甲午朔丙午 葬日本足彦國押人天皇于玉手丘上陵		
				12癸亥	4丙寅		冬十二月癸亥朔丙寅 皇太子遷都於黑田 是謂廬戸宮		
-290			1辛未	-	1壬辰	12癸卯	元年春正月壬辰朔癸卯 太子即天皇位 尊皇后曰皇太后	53	○孝靈即位 海：元年辛未
				-	-	-	是年也 太歲辛未		
-289			2壬申	-	2丙辰	11丙寅	二年春二月丙辰朔丙寅 立細媛命爲皇后（一云 春日千乳早山香媛 一云 十市縣主等祖女 眞舌媛也） 后生大日本根子彦國牽天皇 妃倭國香媛（亦名某姉） 生倭迹迹日百襲姫命 彦五十狹芹彥命（亦名吉備津彥命） 倭迹迹稚屋姫命 亦妃？某弟 生彦狹嶋命 稚武彥命 弟稚武彥命 是吉備臣之始祖也	54	
-288			3癸酉	-	-	-	-	55	
-287			4甲戌	-	-	-	-	56	
-286			5				-	57	
-285			6				-	58	
-284			7				-	59	
-283			8				-	60	
-282			9				-	61	
-281			10				-	62	
-280			11				-	63	
-279			12				-	64	
-278			13				-	65	
-277			14甲申	-	-	-	-	66	
-276			15				-	67	
-275			16				-	68	
-274			17				-	69	
-273			18戊子	-	-	-	孝元生（【孝元即位前紀】「天皇以大日本根子彦太瓊天皇卅六年春正月 立爲皇太子 年十九」から算出）	70	孝元：生
-272			19				-	71	
-271			20				-	72	
-270			21				-	73	
-269			22				-	74	
-268			23				-	75	
-267			24甲午	-	-	-	-	76	
-266			25				-	77	
-265			26				-	78	
-264			27				-	79	
-263	孝靈 孝靈		28				-	80	
-262			29				-	81	
-261			30				-	82	
-260			31				-	83	
-259			32				-	84	
-258			33				-	85	
-257			34甲辰	-	-	-	-	86	
-256			35乙巳	-	-	-	-	87	
-255			36丙午	-	1己亥	1己亥	卅六年春正月己亥朔 立彦國牽尊 爲皇太子 【孝元即位前紀】 天皇以大日本根子彦太瓊天皇卅六年春正月 立爲皇太子 年十九	88	○孝元：19歳 (立太子)
-254			37				-	89	
-253			38				-	90	
-252			39				-	91	
-251			40				-	92	
-250			41				-	93	
-249			42				-	94	
-248			43				-	95	
-247			44甲寅	-	-	-	-	96	
-246			45				-	97	
-245			46				-	98	孝元：29歳
-244			47				-	99	
-243			48				-	100	
-242			49				-	101	
-241			50				-	102	
-240			51				-	103	
-239			52				-	104	
-238			53				-	105	
-237			54甲子	-	-	-	-	106	
-236			55				-	107	
-235			56				-	108	孝元：39歳
-234			57				-	109	
-233			58				-	110	
-232			59				-	111	
-231			60				-	112	
-230			61				-	113	

【孝靈天皇（大日本根子彦太瓊尊）】

西暦	天皇 代	天皇	年号	年 干支	月 閏	日 朔	日 干支	記事・原文	年令	備考
-229				62				-	114	
-228				63				-	115	
-227				64甲戌	-	-	-	-	116	
-226				65				-	117	
-225				66				-	118	孝元：49歳
-224				67				-	119	
-223				68				-	120	
-222				69				-	121	
-221	7孝靈	孝靈		70				-	122	
-220				71				-	123	
-219				72				-	124	
-218				73				-	125	
-217				74甲申	-	-	-	-	126	
-216				75乙酉	-	-	-	-	127	
-215				76丙戌	-	2丙午	8癸丑	七十六年春二月丙午朔癸丑 天皇崩	128	記：106歳 海：119歳 孝元：59歳

【孝元天皇（大日本根子彦國牽尊）】

西暦	天皇 代	天皇	年号	年 干支	月 閏	日 朔	日 干支	記事・原文	年令	備考
-			-	-	-	-	-	大日本根子彦國牽天皇 大日本根子彦太瓊天皇太子也 母曰細媛命磯城縣主大目之女也	-	
-273		孝元 即位前紀		18戊子	-	-	-	孝元生（「天皇以大日本根子彦太瓊天皇卅六年春正月 立爲皇太子 年十九」から算出）	1	○孝元誕生
-258		孝元 即位前紀	孝靈	36丙午	-	1己亥	-	天皇以大日本根子彦太瓊天皇卅六年春正月 立爲皇太子 年十九 【孝靈紀】 卅六年春正月己亥朔 立彦國牽尊 爲皇太子	19	○孝元立太子
-215				76丙戌	-	2丙午	-	七十六年春二月 大日本根子彦太瓊天皇崩 【孝靈紀】 七十六年春二月丙午朔癸丑 天皇崩	59	
-214				1丁亥	-	1辛未	14甲申	元年春正月辛未朔甲申 太子即天皇位 尊皇后曰皇太后	60	○孝元即位 海：元年丁亥
-213				2戊子	-	-	-	是年也 太歳丁亥	61	
-212				3己丑	-	-	-	-	62	
-211				4庚寅	-	3癸未	11甲午	四年春三月甲申朔甲午 遷都於輕地 是謂境原宮	63	『日本書紀』原典。：原文「甲申朔」→「癸未朔」
-210				5辛卯	-	-	-	-	64	
-209				6壬辰	-	9戊戌	6癸卯	六年秋九月戊戌朔癸卯 葬大日本根子彦太瓊天皇于片丘馬坂陵	65	
-208				7癸巳	-	2丙寅	2丁卯	七年春二月丙寅朔丁卯 立鸕色謎命爲皇后 后生二男一女 第一曰大彥命 第二曰稚日本根子彦大日天皇 第三曰倭迹迹姫命（一云 天皇母弟少彥男心命也） 妃伊勢色謎命 生彦太忍信命 次妃河内青玉女埴安媛 生武埴安彥命 兄大彥命 是阿倍臣 膳臣 阿閉臣 狹狹城山君 筑紫國造 越國造 伊賀臣 凡七族之始祖也 彦太忍信命 是武内宿禰之祖父也 開化生（「廿二年春正月己巳朔壬午 立稚日本根子彦大日尊 爲皇太子 年十六」より算出）	66	開化：生
-207				8甲午	-	-	-	-	67	
-206				9	-	-	-	-	68	
-205				10	-	-	-	-	69	
-204				11	-	-	-	-	70	
-203				12	-	-	-	-	71	
-202				13	-	-	-	-	72	
-201				14	-	-	-	-	73	
-200				15	-	-	-	-	74	
-199				16	-	-	-	-	75	
-198	8			17	-	-	-	-	76	
-197				18甲辰	-	-	-	-	77	
-196				19乙巳	-	-	-	-	78	
-195				20丙午	-	-	-	-	79	
-194				21丁未	-	-	-	-	80	
-193		孝元	孝元	22戊申	-	1己巳	14壬午	廿二年春正月己巳朔壬午 立稚日本根子彦大日尊 爲皇太子 年十六 【開化即位前紀】 天皇 以大日本根子彦國牽天皇廿二年春正月 立爲皇太子 年十六	81	○開化：16歳 81（立太子）
-192				23	-	-	-	-	82	
-191				24	-	-	-	-	83	
-190				25	-	-	-	-	84	
-189				26	-	-	-	-	85	
-188				27	-	-	-	-	86	
-187				28甲寅	-	-	-	-	87	
-186				29	-	-	-	-	88	
-185				30	-	-	-	-	89	
-184				31	-	-	-	-	90	
-183				32	-	-	-	-	91	開化：26歳
-182				33	-	-	-	-	92	
-181				34	-	-	-	-	93	
-180				35	-	-	-	-	94	
-179				36	-	-	-	-	95	
-178				37	-	-	-	-	96	
-177				38甲子	-	-	-	-	97	
-176				39	-	-	-	-	98	
-175				40	-	-	-	-	99	
-174				41	-	-	-	-	100	
-173				42	-	-	-	-	101	開化：36歳
-172				43	-	-	-	-	102	
-171				44	-	-	-	-	103	
-170				45	-	-	-	-	104	
-169				46	-	-	-	-	105	
-168				47	-	-	-	-	106	
-167				48甲戌	-	-	-	-	107	
-166				49	-	-	-	-	108	
-165				50	-	-	-	-	109	
-164				51	-	-	-	-	110	
-163				52	-	-	-	-	111	開化：46歳
-162				53	-	-	-	-	112	
-161				54	-	-	-	-	113	
-160				55	-	-	-	-	114	
-159				56	-	-	-	-	115	

【孝元天皇（大日本根子彦國牽尊）】

西暦	天皇 代	年号	年	月	日	記事・原文	年令	備考
西暦	天皇 代	年号	年	月	日	記事・原文	年令	備考
-158	8孝元	孝元	57癸未	-	9壬申	五十七年秋九月壬申朔癸酉 大日本根子彦國牽天皇崩	116	記：57歳 海：117歳 開化：51歳

【開化天皇（稚日本根子彦大日日尊）】

西暦	天皇 代	天皇 名	年 号	年 干支	月 閏	日 朔	日 干支	記事・原文	年令	備考
-			-	-	-	-	-	稚日本根子彦大日日天皇 大日本根子彦國奉天皇第二子也 母曰鬱色謎命 穗積臣遠祖鬱色雄命妹也	-	
-208				7癸巳	-	2丙寅	-	開化生（【孝元紀】「廿二年春正月己巳朔壬午 立稚日本根子彦大日日尊 爲皇太子 年十六」から算出）	1	○開化誕生
-193		開化即位前紀	孝元	22戊申	-	1己巳	-	天皇 以大日本根子彦國奉天皇廿二年春正月 立爲皇太子 年十六 【孝元紀】 廿二年春正月己巳朔壬午 立稚日本根子彦大日日尊 爲皇太子 年十六	16	○開化立太子
-158				57癸未	-	9壬申	-	五十七年秋九月大日本根子彦國奉天皇崩 【孝元紀】 五十七年秋九月壬申朔癸酉 大日本根子彦國奉天皇崩 冬十一月辛未朔壬午 太子即天皇位	51	○開化即位
-157				1甲申	-	10丙申	13戊申	元年春正月庚午朔癸酉 尊皇后曰皇太后 冬十月丙申朔戊申 遷都于春日之地（春日 此云箇酒鵜） 是謂率川宮（率川 此云伊社箇波） 是年也 太歲甲申	52	海：元年甲申
-156				2乙酉	-	-	-		53	
-155				3丙戌	-	-	-		54	
-154				4丁亥	-	-	-		55	
-153				5戊子	-	2丁未	6壬子	五年春二月丁未朔壬子 葬大日本根子彦國奉天皇于鰐池嶋上陵 六年春正月辛丑朔甲寅 立伊香色謎命爲皇后（是庶母也） 后生御間城入彦五十瓊殖天皇 先是 天皇 納丹波竹野媛爲妃 生彦湯産隅命（亦名 彦蔭實命） 次妃和珥臣遠祖姥津命之妹 姥津媛 生彦坐王	56	
-152				6己丑	-	1辛丑	14甲寅		57	
-151				7					58	
-150				8					59	
-149				9					60	
-148				10癸巳	-	-	-	崇神生（「廿八年春正月癸巳朔丁酉 立御間城入彦尊 爲皇太子 年十九」から算出）	61	崇神：生
-147				11甲午	-	-	-		62	
-146				12					63	
-145				13					64	
-144				14					65	
-143				15					66	
-142				16					67	
-141				17					68	
-140				18					69	
-139				19					70	
-138				20					71	
-137				21甲辰	-	-	-		72	
-136				22乙巳	-	-	-		73	
-135				23丙午	-	-	-		74	
-134				24丁未	-	-	-		75	
-133				25戊申	-	-	-		76	
-132				26己酉	-	-	-		77	
-131				27庚戌	-	-	-		78	
-130	開化	開化		28辛亥	-	1癸巳	5丁酉	廿八年春正月癸巳朔丁酉 立御間城入彦尊 爲皇太子 年十九 【崇神即位前紀】 天皇年十九歲 立爲皇太子	79	○崇神：19歳 (立太子)
-129				29壬子	-	-	-		80	
-128				30癸丑	-	-	-		81	
-127				31甲寅	-	-	-		82	
-126				32					83	
-125				33					84	
-124				34					85	
-123				35					86	
-122				36					87	
-121				37					88	
-120				38					89	崇神：29歳
-119				39					90	
-118				40					91	
-117				41甲子	-	-	-		92	
-116				42					93	
-115				43					94	
-114				44					95	
-113				45					96	
-112				46					97	
-111				47					98	
-110				48					99	崇神：39歳
-109				49					100	
-108				50					101	
-107				51甲戌	-	-	-		102	
-106				52乙亥	-	-	-		103	
-105				53丙子	-	-	-		104	
-104				54丁丑	-	-	-		105	
-103				55戊寅	-	-	-		106	
-102				56己卯	-	-	-		107	
-101				57庚辰	-	-	-		108	
-100				58辛巳	-	-	-		109	崇神：49歳
-99				59壬午	-	-	-		110	
-98				60癸未	-	4丙辰	9甲子	六十年夏四月丙辰朔甲子 天皇崩	111	記：63歳 海：115歳 崇神：51歳

【開化天皇（稚日本根子彦大日日尊）】

西暦	天皇 代	年号	年	月	日	記事・原文	年令	備考	
			年	干支	閏月				朔
-98	9開化	開化	60癸未	-	10癸丑	3乙卯	冬十月癸丑朔乙卯	葬于春日率川坂本陵（一云坂上陵 時年百十五）	111

【崇神天皇（御間城入五十瓊殖彦尊）】

西暦	天皇 代 天皇	年号	年 干支	月 閏月	日 朔日	記事・原文	年令	備考
-		-	-	-	-	御間城入彦五十瓊殖彦尊 稚日本根子彦大日日天皇第二子也 母曰伊香色謎命 物部氏遠祖大綜麻杵之女也 識性聰敏 幼好雄略 既壯寬博謹慎 崇重神祇 恆有經綸天業之心焉 崇神生（『開化紀』「廿八年春正月癸巳朔丁酉 立御間城入彦尊 爲皇太子 年十九」から算出）	-	
-148	崇神 即位 前紀	開化	10癸巳	-	-	天皇年十九歳 立爲皇太子 【開化紀】 廿八年春正月癸巳朔丁酉 立御間城入彦尊 爲皇太子 年十九	19	○崇神誕生
-130			28辛亥	-	-	六十一年夏四月 稚日本根子彦大日日天皇崩 【開化紀】 六十一年夏四月丙辰朔甲子 天皇崩	51	○崇神立太子
-98			60癸未	-	4丙辰	元年春正月壬午朔甲午 皇太子即天皇位 尊皇后曰皇太后 二月辛亥朔丙寅 立御間城姫爲皇后 先是 后生活目入彦五十狹茅天皇 彦五十狹茅命 國方姫命 千千衝倭姫命 倭彦命 五十日鶴彦命 又妃紀伊國荒河戸畔女 遠津年魚眼眼妙媛（一云 大海宿禰女八坂振天某邊） 生豐城入彦命 豐鍬入姫命 次妃尾張大海媛 生八坂入彦命 淳名城入姫命 十市瓊入姫命 是年也 大歳甲申	53	○崇神即位・遷都
-97			1甲申	-	2辛亥	三年秋九月 遷都於磯城 是謂瑞籬宮 四年冬十月庚申朔壬午 詔曰「惟我皇祖 諸天皇等 光臨宸極者 豈爲一身乎 蓋所以司牧人神 經綸天下 故能世闡玄功 時流至德 今朕奉承大運 愛育黎元 何當聿遵皇祖之跡 永保無窮之祚 其群卿百僚 竭爾忠貞 共安天下 不亦可乎」	54	
-96			2乙酉	-	-	五年 國內多疾疫 民有死亡者 且大半矣	55	○疾疫・敬神祭祀
-95			3丙戌	-	9丙申	六年 百姓流離 或有背叛 其勢難以德治之 是以 晨興夕惕 請罪神祇 先是 天照大神 倭大國魂二神 並祭於天皇大殿之内 然畏其神勢 共住不安 故以天照大神 託豐鍬入姫命 祭於倭笠縫邑 仍立磯堅城神籬（神籬 此云比奈呂岐） 亦以日本大國魂神 託淳名城入姫命令祭 然淳名城入姫 髮落體瘦而不能祭	56	
-94			4丁亥	-	10庚申	七年春二月丁丑朔辛卯 詔曰「昔我皇祖 大啓鴻基 其後 聖業逾高 王風轉盛 不意 今當朕世 數有災害 恐朝無善政 取咎於神祇耶 蓋命神龜 以極致災之所由也」 於是 天皇乃幸於神淺茅原 而會八十萬神 以卜問之 是時 神明憑倭迹迹日百襲姫命曰「天皇 何憂國之不治也 若能敬祭我者 必當自平矣」 天皇問曰「教如此者誰神也」 答曰「我是倭國域内所居神 名爲大物主神」 時得神語 隨教祭祀 然猶於事無驗 天皇乃沐浴齋戒 潔淨殿内 而祈之曰 朕禮神尚未盡耶 何不享之甚也 冀亦夢裏教之 以畢神恩 是夜夢 有一貴人 對立殿戸 自稱大物主神曰「天皇 勿復爲愁 國之不治 是吾意也 若以吾兄大田田根子 令祭吾者 則立平矣 亦有海外之國 自當歸伏」	57	
-93			5戊子	-	-	秋八月癸卯朔己酉 倭迹速神淺茅原日妙媛 穗積臣遠祖大水口宿禰 伊勢麻績君 三人共同夢 而奏言「昨夜夢之 有一貴人 誨曰『以大田田根子命爲祭大物主大神之主 亦以市磯長尾市 爲祭倭大國魂神主 必天下太平矣』 天皇得夢辭 益歡於心 布告天下 求大田田根子 即於茅渟縣陶邑得大田田根子而貢之」 天皇即親臨於神淺茅原 會諸王卿及八十諸部 而問大田田根子曰「汝其誰子」 對曰「父曰大物主大神 母曰活玉依媛 陶津耳之女」 亦云「奇日方天日方武茅渟祇之女也」 天皇曰「朕當榮樂」 乃卜使物部連祖伊香色雄 爲神班物者 奇之 又卜使祭他神 不吉 十一月丁卯朔己卯 命伊香色雄 而以物部八十平瓮 作祭神之物 即以大田田根子 爲祭大物主大神之主 又以長尾市 爲祭倭大國魂神之主 然後卜祭他神 吉焉 便別祭八十萬群神 仍定天社 國社 及神地 神戸 於是 疫病始息 國內漸盛 五穀既成 百姓饒之 八年夏四月庚子朔乙卯 以高橋邑人活日 爲大神之掌酒（掌酒 此云佐介弭咎） 冬十二月丙申朔乙卯 天皇 以大田田根子 令祭大神 是日 活日自舉神酒 獻天皇 仍歌之曰 許能瀾枳破 和餓瀾枳那羅孺 椰磨等那殊 於朋望能農之能 介瀾之瀾枳 伊句臂佐 伊久臂佐 如此歌之 宴于神宮 即宴竟之 諸大夫等歌之曰 宇磨佐開 瀾和能等能能 阿佐妬珥毛 伊弟由介那 瀾和能等能渡場 於茲 天皇歌之曰 宇磨佐階 瀾和能等能能 阿佐妬珥毛 於辭寐羅箇禰 瀾和能等能渡鳥 即開神宮門 而幸行之 所謂大田田根子 今三輪君等之始祖也 九年春三月甲子朔戊寅 天皇夢有神人 誨之曰 以赤盾八枚 赤矛八竿 祠墨坂神 亦以黑盾八枚 黑矛八竿 祠大坂神 四月甲午朔己酉 依夢之教 祭墨坂神 大坂神	58	
-92			6己丑	-	-	十年秋七月丙戌朔己酉 詔群卿曰「導民之本 在於教化也 今既禮神祇 災害皆耗 然遠荒人等 猶不受正朔 是未習王化耳 其選群卿 遣于四方 令知朕憲」	59	
-91	崇神	崇神	7庚寅	-	-	十一月丁卯朔己卯 命伊香色雄 而以物部八十平瓮 作祭神之物 即以大田田根子 爲祭大物主大神之主 又以長尾市 爲祭倭大國魂神之主 然後卜祭他神 吉焉 便別祭八十萬群神 仍定天社 國社 及神地 神戸 於是 疫病始息 國內漸盛 五穀既成 百姓饒之 八年夏四月庚子朔乙卯 以高橋邑人活日 爲大神之掌酒（掌酒 此云佐介弭咎） 冬十二月丙申朔乙卯 天皇 以大田田根子 令祭大神 是日 活日自舉神酒 獻天皇 仍歌之曰 許能瀾枳破 和餓瀾枳那羅孺 椰磨等那殊 於朋望能農之能 介瀾之瀾枳 伊句臂佐 伊久臂佐 如此歌之 宴于神宮 即宴竟之 諸大夫等歌之曰 宇磨佐開 瀾和能等能能 阿佐妬珥毛 伊弟由介那 瀾和能等能渡場 於茲 天皇歌之曰 宇磨佐階 瀾和能等能能 阿佐妬珥毛 於辭寐羅箇禰 瀾和能等能渡鳥 即開神宮門 而幸行之 所謂大田田根子 今三輪君等之始祖也 九年春三月甲子朔戊寅 天皇夢有神人 誨之曰 以赤盾八枚 赤矛八竿 祠墨坂神 亦以黑盾八枚 黑矛八竿 祠大坂神 四月甲午朔己酉 依夢之教 祭墨坂神 大坂神	59	『日本書紀曆日原典』：原文「丁卯朔」→「壬申朔」
-90			8辛卯	-	12丙申	十年秋七月丙戌朔己酉 詔群卿曰「導民之本 在於教化也 今既禮神祇 災害皆耗 然遠荒人等 猶不受正朔 是未習王化耳 其選群卿 遣于四方 令知朕憲」	60	○四道將軍・武埴 ○伊勢兼右本は甲子、北野本より訂正
-89			9壬辰	-	3甲子	十年秋七月丙戌朔己酉 詔群卿曰「導民之本 在於教化也 今既禮神祇 災害皆耗 然遠荒人等 猶不受正朔 是未習王化耳 其選群卿 遣于四方 令知朕憲」	61	○伊勢兼右本は甲子、北野本より訂正
-88			10癸巳	-	7丙戌	十年秋七月丙戌朔己酉 詔群卿曰「導民之本 在於教化也 今既禮神祇 災害皆耗 然遠荒人等 猶不受正朔 是未習王化耳 其選群卿 遣于四方 令知朕憲」	61	○伊勢兼右本は甲子、北野本より訂正

【崇神天皇（御間城入五十瓊殖彦尊）】

西暦	天皇 代	天皇	年号	年	月	日	記事・原文	年令	備考
				年	月	日	9甲午 九月丙戌朔甲午 以大彦命遣北陸 武渟川別遣東海 吉備津彦遣西道 丹波道主命遣丹波 因以詔之曰「若有不受教者 乃舉兵伐之」 既而共授印綬爲將軍 壬子 大彦命到於和珥坂上 時有少女歌之曰〔一云 大彦命到山背平坂 時道側有童女歌之曰〕 瀾磨紀異利寐胡播擲 飮適餓鳥塢 志齊務苔 農殊末句志羅珥 比賣那素寐殊望 〔一云 於朋耆妬庸利 于介伽卑 許呂佐務苔 須羅句塢志羅珥 比賣那素寐須望〕 於是 大彦命異之 問童女曰「汝言何辭」 對曰「勿言也 唯歌耳」 乃重詠先歌 忽不見矣 大彦乃還 而具以狀奏 於是 天皇姑倭迹迹日百襲姬命 聰明叡智 能識未然 乃知其歌怪 言于天皇「是武埴安彦將謀反之表者也 吾聞 武埴安彦之妻吾田媛 密來之 取倭香山土 裏領巾頭 而祈曰『是倭國之物實』 則反之〔物實 此云望能志呂〕 是以 知有事焉 非早圖 必後之」 於是 更留諸將軍 而議之 未幾時 武埴安彦與妻吾田媛 謀反逆 興師 忽至 各分道 而夫從山背 婦從大坂 共入欲襲帝京 時天皇 遣五十狹芹彦命 擊吾田媛之師 即遮於大坂 皆大破之 殺吾田媛 悉斬其軍卒〔復遣大彦與和珥臣遠祖彦國葺 向山背擊埴安彦 爰以忌瓮 鎮坐於和珥武坂上 則率精兵 進登那羅山而軍之 時官軍屯聚而草木 因以號其山曰那羅山〔此云布瀨那羅須〕 更避那羅山 而進到輪韓河 與埴安彦 挾河屯之 各相挑焉 故時人改號其河 曰挑河 今謂泉河訛也 埴安彦望之問彦國葺曰 何由矣 汝興師來耶 對曰 汝逆天無道 欲傾王室 故舉義兵 欲討汝逆 是天皇之命也 於是 各爭先射 武埴安彦 先射彦國葺 不得中 後彦國葺 射埴安彦 中胸而殺焉 其軍衆脅退 則追破於河北 而斬首過半 屍骨多溢 故號其處 曰羽振苑 亦其卒怖走 尿漏于禪 乃脫甲而逃之 知不得免 叩頭曰 我君 故時人號其脫甲處 曰伽和羅 禪尿處曰尿禪 今謂樟葉訛也 又號叩頭之處 曰我君〔叩頭 此云適務〕 是後 倭迹迹日百襲姬命 爲大物主神之妻 然其神常晝不見 而夜來矣 倭迹迹姬命語夫曰「君常晝不見者 分明不得視其尊顏 願暫留之 明旦仰欲觀美麗之威儀」 大神對曰「言理灼然 吾明旦入汝櫛笥而居 願無驚吾形」 爰倭迹迹姬命 心裏密異之 待明以見櫛笥 遂有美麗小蛇 其長大如衣紐 則驚之叫啼 時大神有恥 忽化人形 謂其妻曰「汝不忍令羞吾 吾還令羞汝」 仍踐大處 登于御諸山 爰倭迹迹姬命仰見 而悔之急居〔急居 此云免岐子〕 則箸撞陰而薨 乃葬於大市 故時人號其墓 謂箸墓也 是墓者日也人作 夜也神作 故運大坂山石而造 則自山至于墓 人民相踵 以手遞傳而運焉 時人歌之曰 飲朋佐介珥 菟藝迺煩例 伊辭務遲塢 多誤辭珥固佐摩 固辭介務介茂 冬十月乙卯朔 詔群臣曰 今反者悉伏誅 畿內無事 唯海外荒俗 騷動未止 其四道將軍等 今急發之 丙子 將軍等共發路 十一年夏四月壬子朔己卯 四道將軍 以平戎夷之狀奏焉 是歲 異俗多歸 國內安寧 十二年春三月丁丑朔丁亥 詔 「朕初承天位 獲保宗廟 明有所蔽 德不能綏 是以陰陽謬錯 寒暑失序 疫病多起 百姓蒙災 然今解罪改過 敦禮神祇 亦垂教而綏荒俗 舉兵以討不服 是以官無廢事 下無逸民 教化流行 衆庶樂業 異俗重譯來海外既歸化 宜當此時 更校人民 令知長幼之次第 及課役之先後焉」 秋九月甲辰朔己丑 始校人民 更料調役 此謂男之強調 女之手末調也 是以 天神地祇共和寧 而風雨順時 百穀用成 家給人足 天下大平矣 故稱讚御肇國天皇也		
-88			10癸巳			9丙戌 27壬子		61	
	10崇神	崇神				10乙卯 22丙子			
-87			11甲午	4壬子	28己卯			62	
-86			12乙未	3丁丑	11丁亥			63	○御肇国天皇の称号 『日本書紀曆日原典』：原文「甲辰朔己丑(46日)→甲戌朔己丑(16日)」
-85			13丙申	-	-	-		64	
-84			14丁酉	-	-	-		65	
-83			15戊戌	-	-	-		66	
-82			16己亥	-	-	-		67	
-81			17庚子	7丙午	1丙午			68	
-80			18	10乙亥	-	-		69	
-79			19					70	
-78			20					71	
-77			21甲辰	-	-	-		72	
-76			22					73	
-75			23					74	
-74			24					75	
-73			25					76	
-72			26					77	
-71			27					78	
-70			28					79	
-69			29壬子	-	-	-	垂仁生（〔垂仁即位前紀〕「天皇 以御間城天皇廿九年歲次壬子春正月己亥朔 生於瑞籬宮」から算出）	80	垂仁：生
-68			30癸丑	-	-	-		81	
-67			31甲寅	-	-	-		82	
-66			32					83	

【崇神天皇（御間城入五十瓊殖彦尊）】

西暦	天皇 代	天皇	年号	年 干支	月 閏	日 朔	日 干支	記事・原文	年令	備考
-65				33				-	84	
-64				34				-	85	
-63				35				-	86	
-62				36				-	87	
-61				37				-	88	
-60				38				-	88	垂仁：10歳
-59				39				-	90	
-58				40				-	91	
-57				41	甲子	-	-	-	92	
-56				42				-	93	
-55				43				-	94	
-54				44				-	95	
-53				45				-	96	
-52				46				-	97	
-51				47				-	98	
-50				48	辛未	-	1己卯 10戊子	四十八年春正月己卯朔戊子 天皇勅豐城命・活目尊曰「汝等二子 慈愛共齊 不知曷為嗣 各宜夢 朕以夢占之」 二皇子於是被命 淨沐而祈寐 各得夢也 會明 兄豐城命以夢辭奏于天皇曰「自登御諸山向東 而八迴弄槍 八迴擊刀」 弟活目尊以夢辭奏言「自登御諸山之嶺 繩四方 逐食粟雀」 則天皇相夢 謂二子曰「兄則一片向東 當治東國 弟是悉臨四方 宜繼朕位」	99	○ 嗣子の決定
						-	4戊申 19丙寅	四月戊申朔丙寅 立活目尊為皇太子 以豐城命令治東 是上毛野君 下毛野君之始祖也 垂仁年令：【垂仁即位前紀】「天皇 以御間城天皇廿九年歲次壬子春正月己亥朔 生於瑞籬宮」による		○ 垂仁：20歳 （立太子）
-49				49	壬申	-	-	-	100	
-48				50	癸酉	-	-	-	101	
-47				51	甲戌	-	-	-	102	
-46				52	乙亥	-	-	【垂仁即位前紀】 廿四歳 因夢祥以立為皇太子 【垂仁即位前紀】「天皇 以御間城天皇廿九年歲次壬子春正月己亥朔 生於瑞籬宮」による	103	垂仁：24歳 （立太子）
-45				53				-	104	
-44				54				-	105	
-43				55				-	106	
-42				56				-	107	
-41				57				-	108	
-40	崇神	崇神		58				-	109	垂仁：30歳
-39	10			59				-	110	
-38				60	癸未	-	7丙申 14己酉	六十年秋七月丙申朔己酉 詔群臣曰「武日照命（一云 武夷鳥 又云 天夷鳥） 從天將來神寶 藏于出雲大神宮 是欲見焉」 則遣矢田部造遠祖武諸隅（一書云 一名大母隅也） 而使獻 當是時 出雲臣之遠祖出雲振根主于神寶 是往筑紫國而不遇矣 其弟飯入根則被皇命 以神寶 付弟甘美韓日狹與子濡淳而貢上 既而出雲振根從筑紫還來之 聞神寶獻于朝廷 責其弟飯入根曰「數日當待 何恐之乎 輒許神寶」 是以既經年月 猶懷恨忿有殺弟之志 仍欺弟曰「頃者於止屋淵多生 願共行欲見」 則隨兄而往之 先是 兄竊作木刀 形似真刀 當時自佩之 弟佩真刀 共到淵頭 兄謂弟曰「淵水清冷 願欲共游泳」 弟從兄言 各解佩刀置淵邊 沐於水中 乃兄先上陸 取弟真刀自佩 後弟驚而取兄木刀 共相擊矣 弟不得拔木刀 兄擊弟飯入根而殺之 故時人歌之曰 椰勾毛多菟 伊頭毛多鷄流饑 波鷄流多知 菟頭還佐波磨枳 佐微那辭耳 阿波禮 於是甘美韓日狹 濡淳 參向朝廷曲奏其狀 則遣吉備津彥與武渟河別 以誅出雲振根 故出雲臣等畏是事 不祭大神而有間 時丹波水上人 名水香戸邊 啓于皇太子活目尊曰 「己子有小兒 而自然言之 玉鑽石 出雲人祭 真種之甘美鏡 押羽振 甘美御神底寶御寶主 山河之水泳御魂 靜挂甘美御神 底寶御寶主也（此云毛） 是非似小兒之言 若有託言乎」 於是 皇太子奏于天皇 則勅之使祭	111	○ 出雲神寶の献上
-37				61	甲申	-	-	-	112	
-36				62	乙酉	-	7乙卯 2丙辰	六十二年秋七月乙卯朔丙辰 詔曰「農天下之大本也 民所恃以生也 今河内狹山埴田水少 是以 其國百姓怠於農事 其多開池溝 以寬民業」 十一月 作劬坂池 反折池（一云 天皇居桑間宮造是三池也）	113	
-35				63	丙戌	-	-	-	114	
-34				64	丁亥	-	-	-	115	
-33				65	戊子	-	7丁卯	六十五年秋七月 任那國遣蘇那曷叱知 令朝貢也 任那者 去筑紫國二千餘里 北阻海以在鷄林之西南	116	○ 任那の朝貢
-32				66	己丑	-	-	-	117	
-31				67	庚寅	-	-	-	118	
-30				68	辛卯	-	12戊申 5壬子	天皇踐祚六十八年冬十二月戊申朔壬子 崩 時年百廿歳	119	記：168歳 海：120歳 垂仁：40歳
-29	崇神 後記	垂仁		1壬辰	-	8甲辰	11甲寅	明年秋八月甲辰朔甲寅 葬于山邊道上陵	-	

【垂仁天皇（活目入彦五十狹茅尊）】

西曆	天皇 代 天皇	年号	年 干支	月 閏月	日 朔日	日 干支	記事・原文	年令	備考
-		-	-	-	-	-	活目入彦五十狹茅天皇 御間城入彦五十瓊殖天皇第三子也 母皇后曰御間城姬 大彥命之女也	-	
-69			29壬子	-	1己亥	1己亥	天皇 以御間城天皇二十九年歲次壬子春正月己亥朔 生於瑞籬宮 生而有岐嶷之姿 及壯口備大度 率性任真 無所矯飾 天皇愛之引置左右 □：1+周	1	○垂仁誕生
-46	崇仁 即位前紀	崇神	52乙亥	-	-	-	二十四歲 因夢祥 以立為皇太子 【崇神紀】 （四十八年）四月戊申朔丙寅 立活目尊為皇太子 以豐城命令治東 是上毛野君 下毛野君之始祖也 → 20歲	24	○垂仁立太子
-30			68辛卯	-	12戊申	-	六十八年冬十二月 御間城入彦五十瓊殖天皇崩 【崇神紀】 天皇踐祚六十八年冬十二月戊申朔壬子 崩 時年百廿歲	40	
-29			1壬辰	-	1丁丑	2戊寅	元年春正月丁丑朔戊寅 皇太子即天皇位		○垂仁即位
				-	10癸卯	11癸丑	冬十月癸卯朔癸丑 葬御間城天皇 於山邊道上陵	41	
				-	11壬申	2癸酉	十一月壬申朔癸酉 尊皇后曰皇太后		
				-	-	-	是年也 大歲壬辰		
				-	2辛未	9己卯	二年春二月辛未朔己卯 立狹穗姬為皇后 后生譽津別命 生而天皇愛之 常在左右 及壯而不言		
				-	10丁卯	-	冬十月 更都於纏向 是謂珠城宮也		
-28	11 垂仁 垂仁		2癸巳	-	-	-	是歲 任那人蘇那曷叱智請之「欲歸于國」 蓋先皇之世來朝未還歟 故敦賞蘇那曷叱智 仍齎赤絹一百疋 賜任那王 然新羅人遮之於道而奪焉 其二國之怨始起 於是時也 〔一云 御間城天皇之世 額有角人 乘一船 泊于越國筍飯浦。故號其處曰角鹿也 問之曰「何國人也」 對曰「意富加羅國王之子 名都怒我阿羅斯等 亦名曰于斯岐阿利叱智于岐 傳聞日本國有聖皇 以歸化之 到于穴門時 其國有人 名伊都都比古 謂臣曰『吾則是國王也 除吾 復無二王 故勿往他處』 然臣究見其為人 必知非王也 既更還之 不知道路 留連嶋浦 自北海迴之 經出雲國 至於此間也」 是時遇天皇崩 便留之 仕活目天皇 逮于三年 天皇問都怒我阿羅斯等曰「欲歸汝國耶」 對曰「甚望也」 天皇詔阿羅斯等曰「汝不迷道必速詣之 遇先皇而仕歟 是以 改汝本國名 追負御間城天皇御名 便為汝國名」 仍以赤織絹 給阿羅斯等 返于本土 故 號其國 謂彌摩那國 其是之緣也 於是 阿羅斯等 以所給赤絹 藏于己國郡府 新羅人聞之 起兵至之皆奪其赤絹 是二國相怨之始也 一云 初都怒我阿羅斯等 有國之時 黃牛負田器 將往田舍 黃牛忽失 則尋迹 之 跡留一郡家中 時有一老夫曰「汝所求牛者 入此郡家中 然郡公等曰『由牛所負物 而推之 必設殺食 若其主覓至則 以物償耳』 即殺食也 若問『牛直欲得何物』 莫望財物『便欲得郡內祭神』 云爾」 俄而郡公等到之曰「牛直欲得何物」 對如老父之教 其所祭神 是白石也 乃以白石 授牛主 因以 將來 置于寢中 其神石化 美麗童女 於是 阿羅斯等大歡之 欲合 然阿羅斯等去他處之間 童女忽失也 阿羅斯等大驚之 問己婦曰「童女何處去矣」 對曰「向東方」 則尋追求 遂遠浮海 以入日本國 所求童女者 詣于難波 為比賣語曾社神 且至豐國國前郡 復為比賣語曾社神 並二處見祭焉）	42	○任那・新羅抗爭
-27			3甲午	-	3甲午	-	三年春三月 新羅王子天日槍來歸焉 將來物 羽太玉一箇 足高玉一箇 鶴鹿々赤石玉一箇 出石小刀一口 出石梓一枝 日鏡一面 熊神籬一具 并七物 則藏于但馬國 常為神物也 〔一云 初天日槍 乘艇泊于播磨國 在於穴栗邑 時天皇遣三輪君祖大友主 與倭直祖長尾市於播磨 而問天日槍曰「汝也誰人 且何國人也」 天日槍對曰「僕新羅國主之子也 然聞日本國有聖皇 則以己國 授弟知古 而化歸之」 仍貢獻物 葉細珠 足高珠 鶴鹿鹿赤石珠 出石刀子 出石槍 日鏡 熊神籬 膽狹淺大刀 并八物 仍詔天日槍曰「播磨國穴栗邑 淡路島出淺邑 是二邑汝任意 居之」 時天日槍答之曰「臣將住處 若垂天恩 聽臣情願地者 臣親歷 視諸國 則合于臣心欲被給」 乃聽之 於是 天日槍自菟道河所之 北入 近江國吾名邑 而暫住 復更 自近江 經若狹國、西到 但馬國 則定住處也 是以 近江國鏡谷陶人 則天日槍之從人也 故天日槍娶但馬出嶋人大耳女 麻多烏 生但馬諸助也 諸生 但馬日槍杵 日槍杵生 清彥 清彥生 田邊聞守也〕	43	
-26			4乙未	-	9丙戌	23戊申	四年秋九月丙戌朔戊申 皇后母兄狹穗彥王謀反 欲危社稷 因伺皇后之燕居 而語之曰「汝孰愛兄與夫焉」 於是 皇后不知所問之意 趣鞭對曰「愛兄也」 則詔皇后曰「夫以色事人 色衰寵緩 今天下多佳人 各遞進求寵 豈永得特色乎 是以冀 吾登鴻祚 必與與汝照臨天下 則高枕 而永終百年 亦不快乎 願為弑天皇」 仍取匕首授皇后曰「是匕佩于中、當天皇之寢 適刺頸 而弑焉」 皇后於是心裏兢戰 不知所如 然視兄王之志 便不可得諫 故受其匕首 獨無所藏 以著衣中 遂有諫兄之情歟	44	○狹穗彥王の謀叛

【垂仁天皇（活目入彦五十狹茅尊）】

西曆	天皇 代	天皇	年号	年 年	月 月	日 日	支 支	記事・原文	年令	備考
-25				5丙申	-	10己卯	1己卯	五年冬十月己卯朔 天皇幸來目 居於高宮 時天皇枕皇后膝而晝寢 於是 皇后既无成事 而空思之 兄王所謀 適是時也 即眼淚流之落帝面 天皇則 寤之語皇后曰「朕今日夢矣 錦色小蛇 繞於朕頸 復大雨從狹穗發而來之濡面 是何祥也」 皇后則知不得匿謀 而惶恐伏地 曲上兄王之反狀 因以奏曰「妾不能違兄王之志 亦不得背天皇之恩 告言則亡兄王 不言則傾社稷 是以 一則以懼 一則以悲 俯仰喉咽 進退血泣 日夜懷悵 無所訴言 唯今日也 天皇枕妾膝 而寢之 於是 妾一思矣 若有狂婦 成兄志者 適遇是時 不勞以成功乎 茲意未竟 眼淚自流 則舉袖拭涕 從袖溢之沾帝面 故今日夢也 必是事應焉 錦色小蛇 則授妾匕首也 大雨忽發 則妾眼淚也」 天皇謂皇后曰「是非汝罪也」 即發近縣卒 命上毛野君遠祖八綱田 令擊狹穗彦 時狹穗彦與師距之 忽積稻作城 其堅不可破 此謂稻城也 踰月不降 於是 皇后悲之曰「吾雖皇后 既亡兄王 何以面目 莅天下耶」 則抱王子誓津別命 而入之於兄王稻城 天皇更益軍衆 悉圍其城 即勅城中曰「急出皇后與皇子」 然不出矣 則將軍八綱田放火 焚其城 於焉 皇后令懷抱皇子 踰城上而出之 因以奏請曰「妾始所以逃入兄城 若有因妾子 免兄罪乎 今不得免 乃知 妾有罪 何得面縛 自經而死耳 唯妾雖死之 敢勿忘天皇之恩 願妾所掌后宮之事 宜授好仇 丹波國有五婦人 志並貞潔 是丹波道主王之女也（道主王者 稚日本根子太日天天皇之孫 彦產王子也 一云 彦湯產隅王之子也） 當納掖庭、以盈后宮之數」 天皇聽矣 時火興城崩 軍衆悉走 狹穗彦與妹共死于城中 天皇 於是 美將軍八綱田之功 號其名謂倭日向武日向彦八綱田也	45	
-24				6丁酉	-	-	-		46	
-23				7戊戌	-	7己巳	7乙亥	七年秋七月己巳朔乙亥 左右奏言「當麻邑有勇悍士 曰當麻蹶速 其爲人也 強力以能毀角申鉤 恒語衆中曰『於四方求之 豈有比我力者乎 何遇強力者 而不期死生 頓得爭力焉』」 天皇聞之 詔羣卿曰「朕聞 當麻蹶速者 天下之力士也 若有比此人耶」 一臣進言「臣聞出雲國有勇士 曰野見宿禰 試召是人 欲當于蹶速」 即日 遣倭直祖長尾市 喚野見宿禰 於是 野見宿禰自出雲至 則當麻蹶速 與野見宿禰令□力（□：+角） 二人相對立 各舉足相蹶 則蹶折當麻蹶速之脇骨 亦蹈折其腰 而殺之 故尊當麻蹶速之地 悉賜野見宿禰 是以其邑有腰折田之緣也 野見宿禰乃留仕焉	47	○野見宿禰
-22				8己亥	-	-	-		48	
-21				9庚子	-	-	-		49	
-20	11垂仁	垂仁		10辛丑	-	-	-		50	
-19				11壬寅	-	-	-		51	
-18				12癸卯	-	-	-		52	
-17				13甲辰	-	-	-		53	
-16				14乙巳	-	-	-		54	
-15				15丙午	-	2乙卯	10甲子	十五年春二月乙卯朔甲子 喚丹波五女納於掖庭 第一曰日葉酢媛 第二曰淳葉田瓊入媛 第三曰真砥野媛 第四曰薊瓊入媛 第五曰竹野媛 秋八月壬午朔 立日葉酢媛命爲皇后 以皇后弟之三女爲妃 唯竹野媛者 因形姿醜 返於本土 則羞其見返到 葛野 自墮輿而死之 故號其地謂墮國 今謂弟國訛也 皇后日葉酢媛命 生三男二女 第一曰五十瓊敷入彥命 第二曰大足彥尊 第三曰大中姬命 第四曰倭姬命 第五曰稚城瓊入彥命 妃淳葉田瓊入媛 生鐸石別命 與膽香足姬命 次妃薊瓊入媛 生池速別命 稚淺津姬命	55	○立后
-14				16丁未	-	-	-		56	
-13				17戊申	-	-	-	景行生（【景行即位前紀】「活目入彥五十狹茅天皇三十七年 立爲皇太子（時年廿一）」から算出）	57	景行：生
-12				18己酉	-	-	-		58	
-11				19庚戌	-	-	-		59	
-10				20辛亥	-	-	-		60	
-9				21壬子	-	-	-		61	
-8				22癸丑	-	-	-		62	
				9丙寅	-	2丁卯		二十三年秋九月丙寅朔丁卯 詔羣卿曰「譽津別王 是生年既州 鬻鬚八拘 猶泣如兒 羣不言 何由矣 因有司而議之」		○譽津別王
-7				23甲寅	閏	10乙丑	8壬申	冬十月乙丑朔壬申 天皇立 於大殿前 譽津別皇子侍之時有鳴鵠、度大虛 皇子仰觀鵠曰「是何物耶」 天皇則知皇子見鵠得言而喜之 詔左右曰「誰能捕是鳥獻之」 於是 鳥取造祖天湯河板舉奏言「臣必捕而獻」 即天皇勅湯河板舉「板舉此云□儼」曰「汝獻是鳥 必敦賞矣」（□：+它） 時湯河板舉遠望鵠飛之方 追尋詣出雲 而捕獲或曰「得于但馬國」 十一月甲午朔乙未 湯河板舉獻鵠也 譽津別命弄是鵠 遂得言語 由是 以敦賞湯河板舉 則賜姓而曰鳥取造 因亦定 鳥取部 鳥養部 譽津部	63	『日本書紀曆日原典』：原文「10月乙丑朔」→「閏10月乙丑朔」
-6				24乙卯	-	-	-		64	
-5				25丙辰	-	2丁巳	8甲子	二十五年春二月丁巳朔甲子 詔阿倍臣遠祖武渟川別・和珥臣遠祖彥國菴・中臣連遠祖大鹿嶋・物部連遠祖十千根・大伴連遠祖武日 五大夫曰「我先皇御間城入彥五十瓊殖天皇 惟獻作聖 欽明聰達 深執謙損 志懷沖退 網繆機衡 禮祭神祇 剋己勤躬 日慎一日是以 人民富足 天下太平也 今當朕世 祭祀神祇豈 得有怠乎」	65	

【垂仁天皇（活目入彦五十狹茅尊）】

西曆	天皇 代 天皇	年号	年 年 干支	月 閏月	日 朔 日 干支	記事・原文	年令	備考
-5			25丙辰	-	3丁亥 10丙申	三月丁亥朔丙申 離天照大神 於豐稻入姬命 託于倭姫命 爰倭姫命求鎮坐大神之處 而詣菟田彼幡〔彼 此云佐佐〕 更遣之入近江國 東迴美濃 到伊勢國 時天照大神詢倭姫命曰「是神風伊勢國 則常世之浪重 浪歸國也 傍國可憐國也 欲居是國」 故隨大神教 其祠立於伊勢國 因興齋宮 于五十鈴川上 是謂磯宮 則天照大神始自天降之處也 〔一云 天皇以倭姫命爲御杖 貢奉於天照太神 是以 倭姫命以天照太神鎮坐於磯城嚴櫃之本而祠之 然後隨神誨 取丁巳年冬十月甲子 遷于伊勢國渡邊宮 是時倭太神 著穗積臣遠祖大水口宿禰而誨之曰「太初之時期曰 天照大神悉治天原 皇御孫孫 專治葦原中國之八十魂神 我親治大地官者」 言已訖焉 然先皇御間城天皇 雖祭祀神祇 微細未探其源根 以粗留於枝葉 故其天皇 短命也 是以 今汝御孫尊梅 先皇之不及 而慎祭則 汝尊 壽命延長 復天下太平矣 時天皇聞是言 則仰中臣連祖探湯主 而卜之 誰人以 令祭大倭大神 即淳名城稚姫命食卜焉。 因以命淳名城稚姫命 定神地於穴磯邑 祠於大市長岡岬 然是淳名城稚姫命 既身體悉瘦弱 以不能祭 是以命大倭直祖長尾市宿禰 令祭矣〕 二十六年秋八月戊寅朔庚辰 天皇勅物部十干根大連曰「屢遣使者於出雲國 雖檢校其國之神寶 無分明申言者 汝親行干出雲 宜檢校定」 則十干根大連校定神寶 而分明奏言之 仍令掌神寶也 二十七年秋八月癸酉朔己卯 令祠官 卜兵器爲神幣 吉之 故弓矢及橫刀 納諸神之社 仍更定神地・神戶 以時祠之 蓋兵器祭神祇 始興於是時也 是歲 興屯倉于來目邑〔屯倉 此云彌夜氣〕	65	○伊勢神の祭祀
-4			26丁巳	-	8戊寅 3庚辰	二十八年冬十月丙寅朔庚午 天皇母弟倭彦命薨	66	○出雲神寶の檢校 景行：10歳
-3			27戊午	-	8癸酉 7己卯	十一月丙申朔丁酉 葬倭彦命于身狹桃花鳥坂 於是 集近習者悉生而埋立於陵域 數日不死 晝夜泣吟 遂死而爛臭之 犬鳥聚□焉 □□□□・敢 天皇聞此泣吟之聲 心有悲傷 詔羣卿曰「夫以生所愛 令殉亡者 是甚傷矣 其難古風之 非良何從 自今以後 議之止殉」	67	
-2			28己未	-	10丙寅 5庚午	卅一年春正月己未朔甲子 天皇詔五十瓊敷命・大足彦尊曰「汝等各言情願之物也」 兄王諂「欲得弓矢」 弟王諂「欲得皇位」 於是 天皇詔之曰「各宜隨情」 則弓矢賜五十瓊敷命 仍詔大足彦尊曰「汝必繼朕位」	68	○殉死の禁令・埴輪
-1			29庚申	-	-	卅二年秋七月甲戌朔己卯 皇后日葉酢媛命〔一云 日葉酢根命也〕薨 臨葬有日焉 天皇詔羣卿曰「從死之道前 知不可 今此行之葬 奈之爲何」 於是 野見宿禰進曰「夫君王陵墓 埋立生人 是不良也 豈得傳後葉乎 願今將議便事而奏之」 則遣使者 喚上出雲國之土部壹佰人 自領土部等 取埴以造・作人・馬及種種物形 獻于天皇曰「自今以後 以是土物更易生人 樹於陵墓 爲後葉之法則」 天皇 於是 大喜之 詔野見宿禰曰「汝之便議 寬洽朕心」 則其土物始立 于日葉酢媛命之墓 仍號是土物 謂埴輪 亦名立物也 仍下令曰「自今以後 陵墓必樹是土物 無傷人焉」 天皇厚賞野見宿禰之功 亦賜鍛地 即任土部職 因改本姓 謂土部臣 是土部連等主天皇喪葬之緣也 所謂野見宿禰 是土部連等之始祖也	69	
1			30辛酉	-	1己未 6甲子	三十四年春三月乙丑朔丙寅 天皇幸山背 時左右奏言之「此國有佳人 曰綺戸邊 姿？形美麗 山背大國不遲之女也」 天皇 於茲 執矛祈之曰「必遇其佳人 道路見瑞」 比至于行宮 大龜出河中 天皇舉矛刺龜忽 化爲白石 謂左右曰「因此物 而推之 必有驗乎」 仍喚綺戸邊 納于後宮 生磐衝別命 是三尾君之始祖也 先是 娶山背苅幡戸邊 生三男 第一曰祖別命 第二曰五十日足彥命 第三曰膽武別命 五十日足彥命 是子石田君之始祖也	70	
2	11垂仁	垂仁	31壬戌	-	-	三十五年秋九月 遣五十瓊敷命于河內國 作高石池・茅渟池 冬十月 作倭狹城池及迹見池 是歲 令諸國 多開池・溝 數八百之 以農爲事 因是 百姓富實 天下太平也	71	
3			32癸亥	-	7甲戌 6己卯	三十七年春正月戊寅朔 立大足彥尊 爲皇太子 【景行即位前紀】 活目入彦五十狹茅天皇三十七年 立爲皇太子〔時年廿一〕	72	
4			33甲子	-	-	三十九年冬十月 五十瓊敷命 居於茅渟菟砥川上宮 作劔一千口 因名其劔 謂川上部 亦名曰裸伴〔裸伴 此云 阿箇潘娜我等母〕 藏于石上神宮也 是後 命五十瓊敷命 俾主石上神宮之神寶 〔一云 五十瓊敷皇子 居于茅渟菟砥河上 而喚蝦名河上 作大刀一千口 是時 橘部・倭文部・神弓削部・神矢作部・大穴磯部・泊櫃部・玉作部・神刑部・日置部・大刀佩部 并十箇品部 賜五十瓊敷皇子 其一千口大刀者 藏于忍坂邑 然後 從忍坂移之 藏于石上神宮 是時 神乞之言 春日臣族 名市河令治 因以命市河令治 是今物部首之始祖也〕	73	
5			34乙丑	-	3乙丑 2丙寅	四十一年春三月乙丑朔丙寅 天皇幸山背 時左右奏言之「此國有佳人 曰綺戸邊 姿？形美麗 山背大國不遲之女也」 天皇 於茲 執矛祈之曰「必遇其佳人 道路見瑞」 比至于行宮 大龜出河中 天皇舉矛刺龜忽 化爲白石 謂左右曰「因此物 而推之 必有驗乎」 仍喚綺戸邊 納于後宮 生磐衝別命 是三尾君之始祖也 先是 娶山背苅幡戸邊 生三男 第一曰祖別命 第二曰五十日足彥命 第三曰膽武別命 五十日足彥命 是子石田君之始祖也	74	
6			35丙寅	-	9丙戌 10乙卯	四十一年秋九月 遣五十瓊敷命于河內國 作高石池・茅渟池 冬十月 作倭狹城池及迹見池 是歲 令諸國 多開池・溝 數八百之 以農爲事 因是 百姓富實 天下太平也	75	
7			36丁卯	-	-	三十七年春正月戊寅朔 立大足彥尊 爲皇太子 【景行即位前紀】 活目入彦五十狹茅天皇三十七年 立爲皇太子〔時年廿一〕	76	
8			37戊辰	-	1戊寅 1戊寅	三十九年冬十月 五十瓊敷命 居於茅渟菟砥川上宮 作劔一千口 因名其劔 謂川上部 亦名曰裸伴〔裸伴 此云 阿箇潘娜我等母〕 藏于石上神宮也 是後 命五十瓊敷命 俾主石上神宮之神寶 〔一云 五十瓊敷皇子 居于茅渟菟砥河上 而喚蝦名河上 作大刀一千口 是時 橘部・倭文部・神弓削部・神矢作部・大穴磯部・泊櫃部・玉作部・神刑部・日置部・大刀佩部 并十箇品部 賜五十瓊敷皇子 其一千口大刀者 藏于忍坂邑 然後 從忍坂移之 藏于石上神宮 是時 神乞之言 春日臣族 名市河令治 因以命市河令治 是今物部首之始祖也〕	77	○景行：21歳 (立太子)
9			38己巳	-	-	四十一年秋九月 遣五十瓊敷命于河內國 作高石池・茅渟池 冬十月 作倭狹城池及迹見池 是歲 令諸國 多開池・溝 數八百之 以農爲事 因是 百姓富實 天下太平也	78	
10			39庚午	-	10壬戌	四十一年秋九月 遣五十瓊敷命于河內國 作高石池・茅渟池 冬十月 作倭狹城池及迹見池 是歲 令諸國 多開池・溝 數八百之 以農爲事 因是 百姓富實 天下太平也	79	○石上神宮
11			40			-	80	

【垂仁天皇（活目入彦五十狹茅尊）】

西曆	天皇 代 天皇	年号	年 干支	月 閏	日 朔	日 干支	記事・原文	年令	備考
12			41				-	81	
13			42				-	82	
14			43甲戌	-	-	-	-	83	
15			44				-	84	
16			45				-	85	
17			46				-	86	景行：30歳
18			47				-	87	
19			48				-	88	
20			49				-	89	
21			50				-	90	
22			51				-	91	
23			52				-	92	
24			53甲申	-	-	-	-	93	
25			54				-	94	
26			55				-	95	
27			56				-	96	景行：40歳
28			57				-	97	
29			58				-	98	
30			59				-	99	
31			60				-	100	
32			61				-	101	
33			62				-	102	
34			63甲午	-	-	-	-	103	
35			64				-	104	
36			65				-	105	
37			66				-	106	景行：50歳
38			67				-	107	
39			68				-	108	
40			69				-	109	
41			70				-	110	
42			71				-	111	
43			72				-	112	
44			73甲辰	-	-	-	-	113	
45			74				-	114	
46			75				-	115	
47			76				-	116	景行：60歳
48			77				-	117	
49			78				-	118	
50			79				-	119	
51			80				-	120	
52	11垂仁	垂仁	81				-	121	
53			82				-	122	
54			83甲寅	-	-	-	-	123	
55			84				-	124	
56			85				-	125	
57			86				-	126	景行：70歳
58			87戊午	-	2丁亥	5辛卯	八十七年春二月丁亥朔辛卯 五十瓊敷命 謂妹大中姬曰「我老也 不能掌神寶 自今以後 必汝主焉」 大中姬命辭曰「吾手弱女人也 何能登 天神庫耶〔神庫 此云 保玖羅〕」 五十瓊敷命曰「神庫雖高 我能爲神庫造梯 豈煩登庫乎」 故諺曰「神之神庫 隨樹梯之」 此其緣也 然遂大中姬命 授物部十千根大連而令治 故物部連等 至于今治石上神寶 是其緣也 昔丹波國桑田村有人 名曰穗襲 則穗襲家有犬 名曰足往 是犬昨山獸名牟士那而殺之 則獸腹有八尺瓊勾玉 因以獻之 是玉今有石上神宮 八十八年秋七月己酉朔戊午 詔羣卿曰「朕聞 新羅王子天日槍 初來之時 將來賣物 今有但馬 元爲國人見賣 則爲神寶也 朕 欲見其賣物」 即日 遣使者 詔天日槍之曾孫清彥而令獻 於是 清彥被勅 乃自捧神寶而獻之 羽太玉一箇・足高玉一箇・鶴鹿赤石玉一箇・日鏡一面・熊神籬一具 唯 有小刀一口 名曰出石 則清彥忽以爲非獻刀子 仍匿袍中 而自佩之 天皇 未知匿小刀之情 欲寵清彥而召之 賜酒於御所 時刀子從袍中 出而顯之 天皇見之親問 清彥曰「爾袍中刀子者 何刀子也」 爰清彥 知不得 匿刀子 而呈言「所獻神寶之類也」 則天皇 謂清彥曰「其神寶之 豈得離類乎」 乃出而獻焉 皆藏於神府 然後開寶府 而視之小刀自失 則使問清彥曰「爾所獻刀子忽失矣 若至汝所乎」 清彥答曰「昨夕 刀子自然至於臣家 乃明旦失焉」 天皇則惶之 且更勿覓 是後 出石刀子 自然至于淡路嶋 其嶋人謂神 而爲刀子立祠 是於今所祠也 昔有一人 乘艇而泊于但馬國 因問曰「汝 何國人也」 對曰「新羅王子名曰天日槍 則留于但馬 娶其國前津見〔一云 前津見 一云 太耳〕女麻呂能鳥 生但馬諸助 是清彥之祖父也 □： + 它	127	
59			88己未	-	7己酉	10戊午	即日 遣使者 詔天日槍之曾孫清彥而令獻 於是 清彥被勅 乃自捧神寶而獻之 羽太玉一箇・足高玉一箇・鶴鹿赤石玉一箇・日鏡一面・熊神籬一具 唯 有小刀一口 名曰出石 則清彥忽以爲非獻刀子 仍匿袍中 而自佩之 天皇 未知匿小刀之情 欲寵清彥而召之 賜酒於御所 時刀子從袍中 出而顯之 天皇見之親問 清彥曰「爾袍中刀子者 何刀子也」 爰清彥 知不得 匿刀子 而呈言「所獻神寶之類也」 則天皇 謂清彥曰「其神寶之 豈得離類乎」 乃出而獻焉 皆藏於神府 然後開寶府 而視之小刀自失 則使問清彥曰「爾所獻刀子忽失矣 若至汝所乎」 清彥答曰「昨夕 刀子自然至於臣家 乃明旦失焉」 天皇則惶之 且更勿覓 是後 出石刀子 自然至于淡路嶋 其嶋人謂神 而爲刀子立祠 是於今所祠也 昔有一人 乘艇而泊于但馬國 因問曰「汝 何國人也」 對曰「新羅王子名曰天日槍 則留于但馬 娶其國前津見〔一云 前津見 一云 太耳〕女麻呂能鳥 生但馬諸助 是清彥之祖父也 □： + 它	128	○天日槍と神室
60			89庚申	-	-	-	-	129	
61			90辛酉	-	2庚子	1庚子	九十年春二月庚子朔 天皇命田道間守 遣常世國 令求非時香菓〔香菓 此云箇俱能末〕 今謂橘是也	130	○田道間守
62			91				-	131	
63			92				-	132	
64			93甲子	-	-	-	-	133	
65			94				-	134	
66			95				-	135	

【垂仁天皇（活目入彦五十狹茅尊）】

西曆	天皇 代	天皇	年号	年	月	日	記事・原文	年令	備考
西曆	代	天皇	年号	年	月	日	記事・原文	年令	備考
67				96			-	136	景行：80歳
68				97			-	137	
69				98			-	138	
70		垂仁	垂仁	99	庚午	-	九十九年秋七月戊午朔 天皇崩於纏向宮 時年百四十歳	139	『日本書紀曆日原典』：原文「戊午朔」→「乙巳朔」 記：153歳 海：120歳 景行：83歳
11				-	12	癸卯	冬十二月癸卯朔壬子 葬於菅原伏見陵		
71		垂仁 後紀	景行	1	辛未	-	明年春三月辛未朔壬午 田道間守 至自常世國 則寶物也 非時香菓・八竿八纒焉 田道間守 於是 泣悲歎之曰「受命天朝 遠往絕域 萬里蹈浪 遙度弱水 是常世國 則神仙秘區 俗非所臻 是以 往來之間 自經十年 豈期 獨凌峻澗 更向本土乎 然賴聖帝之神靈 僅得還來 今天皇既崩 不得復命 臣雖生之 亦何益矣」 乃向天皇之陵 叫哭而自死之 羣臣聞皆流淚也 田道間守 是三宅連之始祖也		

【景行天皇（大足彦忍代別尊）】

西曆	天皇 代 天皇	年号	年 年 干支	月 閏月	日 朔 日 干支	記事・原文	年令	備考
-		-	-	-	-	大足彦忍代別天皇 活目入彦五十狹茅天皇第三子也 母皇后曰日葉洲媛命丹波道主王之女也	-	
-13			17戊申	-	-	景行生（「活目入彦五十狹茅天皇三十七年 立為皇太子〔時年廿一〕から算出）	1	○景行誕生
8	景行 即位 前紀	垂仁	37戊辰	-	-	活目入彦五十狹茅天皇三十七年 立為皇太子〔時年廿一〕 【崇神紀】 三十七年春正月戊寅朔 立大足彦尊 為皇太子	21	○景行立太子
70			99庚午	-	2戊寅	九十九年春二月 活目入彦五十狹茅天皇崩 【垂仁紀】 九十九年秋七月戊午朔 天皇崩於纏向宮 時年百四十歲	83	
71			1辛未	-	7己巳 11己卯	元年秋七月己巳朔卯己卯 太子即天皇位 因以改元 是年也 太歲辛未	84	○景行即位
72			2壬申	-	3丙寅 3戊辰	二年春三月丙寅朔戊辰 立播磨稻日大郎姬（一云 稻日稚郎姬 郎姬此云異羅菟咩）為皇后 后生 二男 第一曰大碓皇子 第二曰小碓尊（一書云 皇后生三男 其第三曰稚倭根子皇子） 其大碓皇子・小碓尊 一日同胞而雙生 天皇異之 則詰於碓 故因號其二王曰大碓・小碓也。 是 小碓尊 亦名日本童男（童男 此云鳥具奈）亦曰日本武尊 幼有雄略之氣 及壯容貌魁偉 身長一丈 力能扛鼎焉	85	
73			3癸酉	-	2庚寅 1庚寅	三年春二月庚寅朔 卜幸于紀伊國將祭・祀群神祇而不吉 乃車駕止之 遣屋主忍男武雄心命（一云 武猪心） 令祭 爰 屋主忍男武雄心命詣之 居于阿備柏原而祭祀神祇 仍住九年則娶紀直遠祖菟媛之女影媛 生武內宿禰	86	
74	12	景行 景行	4甲戌	-	2甲寅 11甲子	四年春二月甲寅朔甲子 天皇幸美濃 左右奏言之「茲國有佳人 曰弟媛 容姿端正 八坂入彦皇子之女也」 天皇欲得為妃 幸弟媛之家 弟媛聞乘輿車駕 則隱竹林 於是 天皇權令弟媛 至而居于泳宮（泳宮 此云區玖利能彌押） 鯉魚浮池 朝夕臨視 而戲遊 時弟媛欲見其鯉魚 遊而密來臨池 天皇則留而通之 爰 弟媛以為 夫婦之道 古今達則也 然於吾而不便 則請天皇曰「妾性不欲交接之道 今不勝皇命之威 暫納帷幕之中 然意所不快 亦形姿穢陋久之 不堪陪於掖庭 唯有妾姊 名曰八坂入媛 容姿麗美 志亦貞潔 宜納後宮」 天皇聽之 仍喚八坂入媛為妃 生七男六女 第一曰稚足彥天皇 第二曰五百城入彥皇子 第三曰忍之別皇子 第四曰稚倭根子皇子 第五曰大許別皇子 第六曰淳熈斗皇女 第七曰淳名城皇女 第八曰五百城入姬皇女 第九曰？依姬皇女 第十曰五十狹城入彥皇子 第十一曰吉備兄彥皇子 第十二曰高城入姬皇女 第十三曰弟姬皇女 又妃三尾氏磐城別之妹水瀨郎媛 生五百野皇女 次妃五十河媛 生神櫛皇子 稻背入彥皇子 其兄神櫛皇子 是讃岐國造之始祖也 弟稻背入彥皇子 是播磨別之始祖也 次妃阿倍氏木事之女高田媛 生武國凝別皇子 是伊豫國御村別之始祖也 次妃曰向髮長大田根 生日向襲津彥皇子 是阿牟君之始祖也 次妃襲武媛 生國乳別皇子 與國背別皇子（一云 宮道別皇子） 豐戶別皇子 其兄國乳別皇子 是水沼別之始祖也 弟豐戶別皇子 是火國別之始祖也 夫天皇之男女 前後并八十子 然除日本武尊・稚足彥天皇・五百城入彥皇子 之外七十餘子 皆封國郡 各如其國 故當今時 謂諸國之別者 即其別王之苗裔焉	87	○今諸國之別之始祖
					-	是月 天皇聞美濃國造名神骨之女 兄名兄遠子 弟名弟遠子 並有國色 則 遣大碓命 使察其婦女之容姿 時大碓命 便密通而不復命 由是 恨大碓命		
				-	11庚辰 1庚辰	冬十一月庚辰朔 乘輿 自美濃還 則更都於纏向 是謂日代宮		
75			5乙亥	-	-	-	88	
76			6丙子	-	-	-	89	
77			7丁丑	-	-	-	90	
78			8戊寅	-	-	-	91	
79			9己卯	-	-	-	92	
80			10庚辰	-	-	-	93	
81			11辛巳	-	-	-	94	
				-	7乙丑	十二年秋七月 熊襲反之 不朝貢		○景行西征・神夏磯媛
				-	8乙未 15己酉	八月乙未朔己酉 幸筑紫		
82			12壬午	-	9甲子 5戊辰	九月甲子朔戊辰 到周芳婆娑時 天皇南望之 詔羣卿曰「於南方烟氣多起 必賊將在」 則留之 先遣多臣祖武諸木・國前臣祖菟名手・物部君祖夏花 令察其狀 爰有女人 曰神夏磯媛 其徒衆甚多 一國之魁帥也 聆天皇之使者至 則拔磯津山之寶木 以上枝挂八握鏡 中枝挂八咫鏡 下枝挂八咫瓊 亦素幡樹于船舳 參向而啓之曰 「願無下兵 我之屬類 必不有違者 今將 歸德矣 唯 有殘賊者 一曰鼻垂 妄假名號山・谷響聚 屯結 於菟狹川上 二曰耳垂 殘賊 貪婪勝略人民 是 居于御木（木 此云開）川上 三曰麻剝 潛聚徒黨 居于高羽川上 四曰土折猪折 隱住於綠野川上 獨恃山川之險 以多掠人民 是四人也 其所據並要害之地 故各領眷屬 為一處之長也 皆曰「不從皇命」 願急擊之勿失 於是 武諸木等 先誘麻剝之徒 仍賜赤衣・襪及種種奇物 兼令搗不服之三人 乃率已衆而參來 悉捕誅之 天皇遂幸筑紫 到豐前國長峽縣 興行宮而居 故號其處曰京也	95	

【景行天皇（大足彦忍代別尊）】

西曆	天皇 代 天皇	年号	年 年 干支	月 閏月	日 朔 日 干支	記事・原文	年令	備考
82			12壬午	-	10甲午	冬十月 到碩田國 其地形廣大亦麗 因名碩田也〔碩田 此云於保岐陀〕 到速見邑 有女人 曰速津媛 爲一處之長 其聞天皇車駕 而自奉迎之謠言 「茲山有大石窟 曰鼠石窟 有二土蜘蛛 住其石窟 一曰青 二曰白 又 於直入縣禰野 有三土蜘蛛 一曰打 二曰八田 三曰國摩侶是五人 並其爲人強力、亦衆類多之 皆曰『不從皇命』 若強喚者 興兵距焉」 天皇惡之 不得進行 即留于來田見邑 權與宮室而居之 仍與羣臣議之曰 「今多動兵衆 以討土蜘蛛 若其畏我兵勢 將隱山野 必爲後愁」 則採海石榴樹 作椎爲兵 因簡猛卒 授兵椎 以穿山排草 襲石室之土蜘蛛 而破于稻葉川上 悉殺其黨 血流至蹊 故時人其作海石榴椎之處 曰海石榴市 亦血流之處曰血田也 復將討打 徑度禰野山 時賊虜之矢 橫自山射之 流於官軍前如雨 天皇更返城原 而卜於水上 便勒兵 先擊八田於禰野而破 爰打 謂不可勝 而請服 然不聽矣 皆自投 洞谷 而死之 天皇 初將討賊 次于柏峽大野 其野有石 長六尺 廣三尺 厚一尺五寸 天皇祈之曰「朕得滅土蜘蛛者 將躡茲石 如柏葉而舉焉」 因躡之 則如 柏上於大虛 故號其石曰蹈石也 是時 □神 則 志我神・直入物部神・直入中臣神三神矣 □：示+壽	95	○土蜘蛛
				-	11甲子	十一月 到日向國 起行宮以居之 是謂高屋宮 十二月癸巳朔丁酉 議討熊襲 於是 天皇詔羣卿曰「朕聞之襲國有厚鹿文 ・□鹿文者 是兩人熊襲之渠帥者也 衆類甚多 是謂熊襲八十梟帥 其鋒 不可當焉 少興師 則不堪 滅賊多動兵 是百姓之害 何不假鋒刃之威 坐平其國？ □：作のイ・ソ・ニ・リ 時有一臣 進曰「熊襲梟帥有二女 兄曰市乾鹿文〔乾 此云賦〕 弟曰市 鹿文 容既端正 心且雄武 宜示重幣 以攝納麾下 因以 伺其消息 犯 不意之處 則嘗 不血刃賊必自敗」 天皇詔「可也」 於是 示幣欺其二女 而納幕下 天皇 則通市乾鹿文 而陽寵 時 市乾鹿文 奏于天皇曰「無愁熊襲之不服 妾有良謀 即令從一二兵於 己」 而返家以多設醇酒 令飲己父 乃醉而寐之 市乾鹿文 密斷父弦 爰從兵 一人進 殺熊襲梟帥 天皇則惡其不孝之甚 而誅市乾鹿文 仍以弟市鹿文 賜於火國造 十三年夏五月 悉平襲國 因以居於高屋宮 已六年也 於是 其國有佳人 曰御刀媛〔御刀 此云彌波迦志〕 則召爲妃 生豐國 別皇子 是日向國造之始祖也		○景行熊襲平定・ 九巡幸
83			13癸未	-	5辛酉		96	
84			14甲申	-	-		97	
85			15乙酉	-	-		98	
86			16丙戌	-	-		99	
87	12景行	景行	17丁亥	-	3戌戌	十七年春三月戊戌朔己酉 幸子湯縣 遊于丹養小野 時東望之 謂左右曰 「是國也直向於日出方」 故號其國曰日向也 是日 陟野中大石 憶京都而歌之曰 波辭枳豫辭 和藝幣能伽多由 區毛位多知區暮 夜摩苔波 區瑪能摩保遲摩 多多難豆久 阿烏伽枳 夜摩許養例慶 夜摩苔之于屢破試 異能知能 摩會祁務比苔破 多多瀧許葬 幣邁利能夜摩能 志邁伽之饒延埵 于受瓊左勢 許能固 是謂恩邦歌也	100	
				-	3癸巳	十八年春三月 天皇將向京 以巡狩筑紫國 始到夷守 是時 於石瀨河邊 人衆聚集 於是 天皇遙望之 詔左右曰「其集者何人也 若賊乎」 乃遣兄夷守・弟夷守二人令覲 乃弟夷守 還來而諮之曰「諸縣君泉媛 依 獻大御食 而其族會之」 夏四月壬戌朔甲子 到熊縣 其處有熊津彦者 兄弟二人 天皇先使徵兄熊 則從使詣之 因徵弟熊 而不來 故遣兵誅之 壬申 自海路泊於葦北小嶋 而進食 時召山部阿彌古之祖小左 令進冷水 適是時 嶋中無水 不知所爲 則仰之祈于天神地祇 忽有泉從崖傍涌出 乃酌以獻焉 故號其嶋曰水嶋也 其泉猶今在 水嶋崖也 五月壬辰朔 從葦北發船到火國 於是 日沒也 夜冥不知著岸 遙視火光 天皇詔挾抄者曰「直指火處」 因指火往之 即得著岸 天皇問其火光之處曰「何謂邑也」 國人對曰「是八代縣豐村」 亦尋其火「是誰人之火也」 然不得主 茲知非人火 故名其國曰火國 六月辛酉朔癸亥 自高來縣 渡玉杵名邑 時殺其處之土蜘蛛津類焉 丙子 到阿蘇國也 其國郊瘠曠遠 不見人居 天皇曰「是國有人乎」 時有二神 曰阿蘇都彥・阿蘇都媛 忽化人以遊詣之曰「吾二人在 何無人 耶」 故號其國曰阿蘇		
86			18戊子	-	6辛酉	秋七月辛卯朔甲午 到筑紫後國御木 居於高田行宮 時有僵樹 長九百七十丈焉 百寮蹈其樹而往來 時人歌曰 阿佐志毛能 瀧概能佐烏麼志 魔幣菟耆瀧 伊和□羅暮喜 □：□+ 多 爰天皇問之曰「是何樹也」 有一老夫曰「是樹者歷木也 嘗未僵之先 當 朝日暉 則隱杵嶋山 當夕日暉 覆阿蘇山也」 天皇曰「是樹者神木」 故是國宜號御木國 丁酉 到八女縣 則越藤山 以南望粟岬 詔之曰「其山峯岫重疊 且美麗 之甚 若神有 其山乎」 時水沼縣主猿大海奏言「有女神 名曰八女津媛 常居山中」 故八女國之名 由此而起也 八月 到的岳而進食 是日 膳夫等遺蓋 故時人號其忘蓋處曰浮羽 今謂的者訛也 昔筑紫俗號 蓋曰浮羽	101	
				-	7辛卯			
				-	8庚申			

西曆	天皇 代 天皇	年号	年 月 日					記事・原文	年令	備考			
			年	干支	閏月	月	期				日	干支	
89			19	己丑	-	9	甲申	20癸卯	十九年秋九月甲申朔癸卯	天皇至自日向	102		
90			20	庚寅	-	2	辛巳	4甲申	二十年春二月辛巳朔甲申	遣五百野皇女 令祭天照大神	103		
91			21	辛卯	-	-	-	-	-	-	104		
92			22	壬辰	-	-	-	-	-	-	105		
93			23	癸巳	-	-	-	-	成務生（【成務即位前紀】「大足彥天皇四十六年 立為太子 年二十四」から算出）	-	106	成務：生	
94			24	甲午	-	-	-	-	-	-	107		
95			25	乙未	-	7	庚辰	3壬午	二十五年秋七月庚辰朔壬午	遣武内宿禰 令察北陸及東方諸國之地形 且百姓之消息也	108		
96			26	丙申	-	-	-	-	-	-	109		
				-	-	2	辛丑	12壬子	二十七年春二月辛丑朔壬子	武内宿禰自東國還之奏言 「東夷之中有日高見國 其國人男女 並椎結文身 為人勇悍 是總曰蝦夷 亦土地沃壤而曠之 擊可取也」			
				-	-	8	戊戌	-	-	秋八月 熊襲亦反之 侵邊境不止			
				-	-	10	丁酉	13己酉	冬十月丁酉朔己酉	遣日本武尊 令擊熊襲 時年十六 於是 日本武尊曰「吾得善射者 欲與行 其何處有善射焉」 或者啓之曰「美濃國有善射者 日彥彥公」 於是 日本武尊 遣葛城人宮戸彥 喚弟彥公 故弟彥公 便率石占横立及尾張田子之稻置・乳近之稻置而來 則從日本武尊而行之		○日本武尊の熊襲征討 日本武尊 16歳	
97			27	丁酉	-	-	-	-	十二月 到於熊襲國 因以 伺其消息及地形之險易 時熊襲有魁帥者 名取石鹿文 亦曰川上梟帥 悉集親族 而欲宴 於是 日本武尊 解髮作童女姿 以密伺川上梟帥之宴時 仍餽佩□裏 入於川上梟帥之宴室 居女人之中 □：□+因 川上梟帥 感其童女之容姿 則携手同席 舉杯令飲而戲弄 于時也更深入闌 川上梟帥 且被酒 於是 日本武尊抽□中之劍 刺川上梟帥之胸 未及之死 川上梟帥叩頭曰「且待之 吾有所言」 □：□+因 時 日本武尊 留劍待之 川上梟帥啓之曰「汝尊誰人也」 對曰「吾是大足彥天皇之子也 名日本童男也」 川上梟帥亦啓之曰「吾是 國中之強力者也 是以 當時諸人不勝 我之威力 而無不從者 吾多遇武力矣 未有若皇子者 是以 賤賊陋口以 奉尊號 若聽乎」 曰「聽之」 即啓曰「自今以後 號皇子應稱日本武皇子」 言訖乃 通胸而殺之 故至于今 稱曰日本武尊 是其緣也 然後 遣弟彥等 悉斬其黨類 無餘□ 既而從海路還倭 到吉備以渡穴海 □：□+焦 其處有惡神則殺之 亦比至難波 殺柏濟之惡神〔濟 此云和多利〕		110		
98	12景行	景行	28	戊戌	-	2	乙丑	1乙丑	二十八年春二月乙丑朔	日本武尊奏平熊襲之狀曰「臣賴天皇之神靈 以兵一舉 頓誅熊襲之魁帥者 悉平其國 是以 西洲既謐 百姓無事 唯吉備六濟神及難波柏濟神 皆有害心 以放毒氣 令苦路人 並為禍害之數 故悉殺其惡神、並開水陸之徑」 天皇 於是 美日本武之功而異愛		111	
99			29	己亥	-	-	-	-	-	-	112		
100			30	庚子	-	-	-	-	-	-	113		
101			31	辛丑	-	-	-	-	-	-	114		
102			32	壬寅	-	-	-	-	-	-	115	成務：10歳	
103			33	癸卯	-	-	-	-	-	-	116		
104			34	甲辰	-	-	-	-	-	-	117		
105			35	乙巳	-	-	-	-	-	-	118		
106			36	丙午	-	-	-	-	-	-	119		
107			37	丁未	-	-	-	-	-	-	120		
108			38	戊申	-	-	-	-	-	-	121		
109			39	己酉	-	-	-	-	-	-	122		
				-	-	6	癸丑	-	-	四十年夏六月 東夷多叛 邊境騷動 秋七月癸未朔戊戌 天皇詔羣卿曰「今東國不安 暴神多起 亦蝦夷悉叛 屢略人民 遣誰人 以平其亂」 羣臣 皆不知誰遣也 日本武尊奏言「臣則先勞西征 是役 必大碓皇子之事矣」 時大碓皇子愕然之、逃隱草中 則遣使者 召來 爰天皇責曰「汝不欲矣 豈強遣耶 何未對 賊以豫懼甚焉」 因此 遂封美濃 仍如封地 是身毛津君守君二族之始祖 於是 日本武尊 雄詰之曰「熊襲既平 未經幾年 今更東夷叛之 何日逮于大平矣 臣雖勞之 頓平其亂」 則天皇持斧鉞 以授日本武尊曰 「朕聞其東夷也 識性暴強 凌犯為宗 村之無長 邑之勿首 各貪封埤 並相盜略 亦山有邪神 郊有姦鬼 遮衢塞徑 多令苦人 其東夷之中 蝦夷 是尤強焉 男女交居 父子無別 冬則宿穴 夏則住櫟 衣毛飲血 昆弟相疑 登山 如飛禽 行草如走獸 承恩 則忘見怨必報 是以 箭藏 頭簪刀佩 衣中 或聚黨類 而犯邊界 或伺農桑 以略人民 擊 則隱草 追則入山 故 往古以來 未染王化 今朕察汝為人 身體長大 容姿端正 力能扛鼎 猛如雷電 所向無前 所攻必勝 即知之形 則我子實則 神人 是寔天恩朕不觀 且國不平 令經綸天業 不絕宗廟乎 亦是天下 則汝天下也 是位則汝位也 願深謀遠慮 探姦伺變 示之以威 懷之以德 不煩兵甲 自令臣隸 即巧言而調暴神 振武以攘姦鬼」 於是 日本武尊 乃受斧鉞 以再拜奏之曰 「嘗西征之年 賴皇靈之威 提三尺劍 擊熊襲國 未經浹辰 賊首伏罪 今亦 賴神祇之靈 借天皇之威 往臨 其境 示 以德教 猶有不服 即舉兵擊」 仍重再拜之 天皇 則命吉備武彥與大伴武日連 令從日本武尊 亦以七掬脛為膳夫		123	○日本武尊の東征

【景行天皇（大足彦忍代別尊）】

西曆	天皇 代 天皇	年号	年 干支	月 閏月	日 朔日	日 干支	記事・原文	年令	備考
						2癸丑	冬十月壬子朔癸丑 日本武尊發路之		
					10壬子	7戊午	戊午 狂道拜伊勢神宮 仍辭于倭姫命曰「今被天皇之命 而東征將誅諸叛者 故辭之」 於是 倭姫取草薙劍 授日本武尊曰「慎之莫怠也」 是歲 日本武尊 初至駿河 其處賊陽從之歎曰「是野也 麋鹿甚多 氣如朝霧 足如茂林 臨而應狩」 日本武尊 信其言 入野中而異獸 賊有殺王之情（王 謂日本武尊也） 放火燒其野 王知被欺 則以縫 出火之向燒 而得免 （一云 王所佩薙草自抽之 薙草王之傍草 因是得免 故號其劍曰草薙也 薙草此云 茂薙玖毛） 王曰「殆被欺」 則悉焚其賊衆 而滅之 故號其處曰燒津 亦進 相模 欲往土總 望海高言曰「是小海耳 可立跳渡」 乃至海中 暴風忽起 王船漂蕩 而不可渡 時有從王之妾 曰弟橘媛 穗積氏忍山宿禰之女也 啓王曰「今風起浪湧 王船欲沒 是必海神心也 願以妾之身 贖王之命而入海」 言訖乃披瀾入之 暴風即止 船得著岸 故時人號其海曰馳水也 爰日本武尊 則從上總轉 入陸奥國 時大鎮縣於王船 從海路廻於葦浦 橫渡玉浦 至蝦夷境 蝦夷賊首嶋津神・國津神等 屯於竹水門而欲距 然遙視王船 豫怖其威勢 而心裏知之不可勝 悉捨弓矢 望拜之曰「仰視君容 秀於人倫 若神之乎 欲知姓名」 王對之曰「吾是 現人神之子也」 於是 蝦夷等悉懷 則□囊披浪 自扶王船而著岸 仍面縛服罪 故免其罪 因以俘其首帥 而令從身也 □：寒のカー衣 蝦夷既平 自日高見國還之 西南歷常陸 至甲斐國 居于酒折宮 時舉燭而進食 是夜 以歌之 問侍者曰 「珥比麼利 菟玖波場須擬□ 異玖用加禮菟流 □：低のイ無 諸侍者 不能答言 時有秉燭者 續王歌之末而歌曰 「伽羅奈倍？ 珥波波虛虛能用 比珥波苦場伽場 □：低のイ無 即美秉燭人之聰而敦賞 則居是宮 以勒部賜大伴連之遠祖武日也 於是 日本武尊曰「蝦夷凶首咸伏其辜 唯信濃國・越國 頗未從化」 則自甲斐北 轉歷武藏・上野 西達于碓日坂 時日本武尊 每有顧弟橘媛之情 故登碓日嶺 而東南望之 三歎曰「吾嬌者耶」（嬌 此云菟摩） 故因 號山東諸國 曰吾嬌國也 於是 分道 遣吉備武彥於越國 令鑿察其地形險易及人民順不 則 日本武尊 進入信濃 是國也 山高谷幽 翠嶺萬重 人倚杖難升 巖險磴紆 長峯數千 馬頓轡而不進 然日本武尊 披烟凌霧 遙徑大山 既達于峯 而飢之食 於山中 山神令苦王 以化白鹿 立於王前 王異之 以一箇蒜彈白鹿 則中眼而殺之 爰王忽失道、不知所出 時白狗自來 有導王之狀 隨狗而行之 得出美濃 吉備武彥 自越出而遇之 先是度信濃坂者 多得神氣以□臥 但從殺白鹿之後 論是山者 嚼蒜塗人及牛馬 自不中神氣也 □：マツノレ・莫		
110			40庚戌					123	○弟橘媛入水
	12景行	景行							
111			41辛亥	-	-	-	-	124	
112			42壬子	-	-	-	-	125	成務：20歲
							日本武尊 更還於尾張 即娶尾張氏之女宮實媛 而淹留踰月 於是 聞近江膽吹山有荒神 即解劍 置於宮實媛家 而徒行之 至膽吹山 山神化大蛇 當道 爰 日本武尊 不知主神 化蛇之謂 是大蛇 必荒神之使也 既得殺主神 其使者 豈足求乎 因跨蛇猶行 時 山神之興雲 零水 奉霧谷？ 無復可行之路 乃捷遶 不知其所跋涉 然凌霧 強行方僅得出 猶失意如醉 因 居山下之泉側 乃飲其水 而醒之 故號其泉 曰居醒泉也 日本武尊 於是 始有痛身 然稍起之 還於尾張 爰不入 宮實媛之家 便移伊勢 而到尾津 昔 日本武尊 向東之歲 停尾津濱 而進食 是時 解一劍置於松下 遂忘而去 今至於此 是劍猶存 故歌曰 鳥波利珥 多陀珥霧伽幣流 比苔菟麻菟阿波例 比苔菟麻菟 比苔珥阿利勢摩 岐農岐勢摩之場 多知波開摩之場 逮于能褒野 而痛甚之 則以所俘蝦夷等 獻於神宮 因遣吉備武彥 奏之於天皇曰「臣受命天朝 遠征東夷 則被神恩 賴皇威 而叛者伏罪 荒神自調 是以 卷甲？戈 懼憐還之 冀曷曰曷時 復命天朝 然天命忽至 隙駟難停 是以獨臥曠野 無誰語之 豈憤身亡 唯愁不面」 既而 崩於能褒野 時年卅 天皇聞之 寢不安席 食不甘味 晝夜喉咽泣悲？ 因以 大歎之曰「我子小雄王 昔熊襲叛之日 未及總角 久煩征伐 既而恒在左右 捕朕不及 然東夷騷動 勿使討者 忍愛以入賊境 一日之無不顧 是以 朝夕進退 佇待還日 何禍兮 何罪兮 不意之間 ？亡我子 自今以後 與誰人之 經綸鴻業耶」 即詔羣卿命百寮 仍葬於伊勢國能褒野陵 時日本武尊化白鳥 從陵出之 指倭國而飛之 羣臣等 因以 聞其棺槨而視之 明衣空留 而屍骨無之 於是 遣使者追尋白鳥 則停於倭琴彈原 仍於其處造陵焉 白鳥更飛至河內 留舊市邑 亦其處作陵 故時人號是三陵 曰白鳥陵 然遂高翔上天 徒葬衣冠 因欲錄功名 即定武部也 是歲 天皇踐祚 四十三年焉		
113			43癸丑	-	-	-		126	○日本武尊崩・白鳥陵
114			44甲寅	-	-	-	-	127	
115			45乙卯	-	-	-	-	128	

【景行天皇（大足彦忍代別尊）】

西曆	天皇 代 天皇	年号	年 年 干支	月 閏月	日 朔 日 干支	記事・原文	年令	備考
116			46丙辰	-	- -	【成務即位前紀】 大足彦天皇四十六年 立為太子 年二十四 (景行 5 2 年)秋八月己酉朔壬子 立稚足彦尊 為皇太子 (2 8 歲)	129	成務：24歳
117			47丁巳	-	- -	-	130	
118			48戊午	-	- -	-	131	
119			49己未	-	- -	-	132	
120			50庚申	-	- -	-	133	
					1壬午	7戊子 五十一年春正月壬午朔戊子 招羣卿 而宴數日矣 時皇子稚足彦尊・武內宿禰不參赴于宴庭 天皇召之問其故 因以 奏之曰「其宴樂之日 羣卿百寮 必情在戲遊 不存國家 若有狂生 而何攝聞之隙乎 故侍門下 備非常」 時天皇謂之曰「灼然〔灼然 此云以耶知擊〕」 則異寵焉		
						秋八月己酉朔壬子 立稚足彦尊 為皇太子 『成務即位前』 大足彦天皇四十六年 立為太子 年二十四 是日 命武內宿禰 為棟梁之臣		○成務：29歳 (立太子)
121			51辛酉			初日本武尊所佩草薙橫刀 是今在尾張國年魚市郡熟田社也 於是 所獻神喜蝦夷等 晝夜喧譁 出入無禮 時倭姬命曰 是蝦夷等 不可近就於神宮 則進上於朝廷 仍令安置御諸山傍 未經幾時 悉伐神山樹 叫呼隣里 而驚人民 天皇聞之 詔羣卿曰「其責神山傍之蝦夷 是本有獸心 難住中國 故隨其情願 令班邦畿之外」 是今 播磨・讃岐・伊豫・安藝・阿波凡五國佐伯部之祖也	134	
	12景行	景行				初 日本武尊 娶兩道入姫皇女為妃 生稻依別王 次足仲彦天皇 次布忍入姫命 次稚武王 其兄稻依別王 是犬上君・武部君凡二族之始祖也 又妃 吉備武彥之女吉備穴戸武媛 生武卵王 與十城別王 其兄武卵王 是讃岐綾君之始祖也 弟十城別王 是伊豫別君之始祖也 次妃 穗積氏忍山宿禰之女弟橘媛 生稚武彥王		
122			52壬戌	-	5甲辰 4丁未 7癸卯 7己酉	五十二年夏五月甲辰朔丁未 皇后播磨太郎姫薨 秋七月癸卯朔己酉 立八坂入媛命為皇后	135	成務：30歳 成務：30歳
				-	8丁卯 1丁卯	五十三年秋八月丁卯朔 天皇詔羣卿曰「朕顧愛子 何日止？乎 冀欲巡狩小碓王所平之國」		
123			53癸亥	-	10丙寅	是月 乘輿幸 伊勢轉入東海 冬十月 至上總國 從海路渡淡水門 是時 聞覺賀鳥之聲 欲見其鳥形 尋而出海中 仍得白蛤 於是 膳臣遠祖名磐鹿六廬 以蒲為手綆 白蛤為膽 而進之 故美六廬臣之功 而賜膳大伴部	136	
				-	12乙丑	十二月 從東國還之 居伊勢也 是謂綺宮		
124			54甲子	-	9辛卯 19己酉	五十四年秋九月辛卯朔己酉 自伊勢還於倭居纏向宮 五十五年春二月戊子朔壬辰 以彦狹嶋王 拜東山道十五國都督 是豐城命之孫也	137	
125			55乙丑	-	2戊子 5壬辰	然到春日穴昨邑 臥病而薨之 是時 東國百姓 悲其王不至 竊盜王尸 葬於上野國	138	
126			56丙寅	-	8庚辰	五十六年秋八月 詔御諸別王曰「汝父彦狹嶋王 不得向任所 而早薨 故汝專領東國」 是以 御諸別王 承天皇命 且欲成父業 則行治之 早得善政 時蝦夷騷動 即舉兵而擊焉 時蝦夷首帥足振邊・大羽振邊・遠津間男邊等 叩頭而來之 頓首受罪 盡獻其地 因以 免降者 而誅不服 是以東久之無事焉 由是 其子孫 於今有東國	139	
127			57丁卯	-	9癸卯 - - 10癸酉 - -	五十七年秋九月 造坂手池 即竹時其堤上 冬十月 令諸國興田部屯倉	140	
128			58戊辰	-	2辛丑 11辛亥	五十八年春二月辛丑朔辛亥 幸近江國 居志賀三歳 是謂高穴穗宮	141	
129			59己巳	-	- -	-	142	
130			60庚午	-	11乙酉 7辛卯	六十年冬十一月乙酉朔辛卯 天皇崩於高穴穗宮 時年一百六歳	143	記：13歳 海：106歳 成務：38歳

【成務天皇（稚足彦尊）】

西暦	天皇 代 天皇	年号	年 年 干支	月 閏 月	日 朔 日 干支	記事・原文	年令	備考
-		-	-	-	-	稚足彦天皇 大足彦忍代別天皇第四子也 母后曰八坂入姫命 八坂入彦皇子之女也	-	
93			23癸巳	-	-	成務生（「大足彦天皇四十六年 立為太子 年二十四」から算出）	1	○成務誕生
116	成務即位前紀	景行	46丙辰	-	-	大足彦天皇四十六年 立為太子 年二十四 【景行紀】 （五十一年）秋八月己酉朔壬子 立稚足彦尊 為皇太子 → 29歳	24	○成務立太子
130			60庚午	-	11乙酉	六十年冬十一月 大足彦天皇崩 【景行紀】 六十年冬十一月乙酉朔辛卯 天皇崩於高穴穗宮 時年一百六歳	38	
131			1辛未	-	1甲申	元年春正月甲申朔戊子 皇太子即位 是年也 太歳辛未	39	○成務即位
132			2壬申	-	11癸酉	二年冬十一月癸酉朔壬午 葬大足彦天皇於倭國之山邊道上陵 尊皇后曰皇太后	40	
133			3癸酉	-	1癸酉	三年春正月癸酉朔己卯 以武内宿禰為大臣也 初天皇與武内宿禰 同日生之 故有異寵焉	41	
134			4甲戌	-	2丙寅	四年春二月丙寅朔 詔之曰 我先皇大足彦天皇 聰明神武 膺受國圖 治天順人 撥賊反正 德侔覆燾 道協造化（□：9冠+録） 是以 普天率土莫不主臣 莫氣懷靈 何非得處 今 朕嗣踐寶祚 夙夜兢惕 然黎元 蠢爾不俊野心 是國郡無君長 縣邑無首渠者焉 自今以後 國郡立長 縣邑置首 即取當國之幹了者 任其國郡之首長 是為中區之蕃屏也	42	
135			5乙亥	-	9丁亥	五年秋九月 令諸國以國郡立造長 縣邑置稻置 並賜楯矛以為表 則隔山河而分國縣 隨阡陌以定邑里 因以 東西為日縱 南北為日横 山陽日影面 山陰日背面 是以 百姓安居 天下無事焉。	43	○造長・稻置の設置
136			6丙子	-	-	-	44	
137			7丁丑	-	-	-	45	
138			8戊寅	-	-	-	46	
139			9己卯	-	-	-	47	
140			10庚辰	-	-	-	48	
141			11辛巳	-	-	-	49	
142			12壬午	-	-	-	50	
143			13癸未	-	-	-	51	
144			14甲申	-	-	-	52	
145			15乙酉	-	-	-	53	
146			16丙戌	-	-	-	54	
147			17丁亥	-	-	-	55	
148			18戊子	-	-	仲哀生（【仲哀紀】「稚足彦天皇四十八年立為太子〔時年卅一〕 稚足彦天皇無男 故立為嗣」から算出）	56	仲哀：生
149	13		19己丑	-	-	-	57	
150			20庚寅	-	-	-	58	
151			21辛卯	-	-	-	59	
152			22壬辰	-	-	-	60	
153	成務	成務	23癸巳	-	-	-	61	
154			24甲午	-	-	-	62	
155			25乙未	-	-	-	63	
156			26丙申	-	-	-	64	
157			27丁酉	-	-	-	65	仲哀：10歳
158			28	-	-	-	66	
159			29	-	-	-	67	
160			30	-	-	-	68	
161			31	-	-	-	69	
162			32	-	-	-	70	
163			33	-	-	-	71	
164			34甲辰	-	-	-	72	
165			35	-	-	-	73	
166			36	-	-	-	74	
167			37	-	-	-	75	仲哀：20歳
168			38	-	-	-	76	
169			39	-	-	-	77	
170			40庚戌	-	-	神功生（【神功撰政紀】「六十九年夏四月辛酉朔丁丑 皇太后崩 於稚櫻宮〔時年一百歳〕」から算出。神功年令以下同）	78	神功：生
171			41	-	-	-	79	
172			42	-	-	-	80	
173			43	-	-	-	81	
174			44甲寅	-	-	-	82	
175			45乙卯	-	-	-	83	
176			46丙辰	-	-	-	84	
177			47丁巳	-	-	-	85	
178			48戊午	-	3庚辰	四十八年春三月庚辰朔 立甥足仲彦尊 為皇太子 【仲哀即位前紀】 稚足彦天皇四十八年立為太子〔時年卅一〕 稚足彦天皇無男 故立為嗣	86	○仲哀：31歳 (立太子) 神功：9歳
179			49	-	-	-	87	
180			50	-	-	-	88	
181			51	-	-	-	89	
182			52	-	-	-	90	
183			53	-	-	-	91	
184			54甲子	-	-	-	92	
185			55乙丑	-	-	-	93	
186			56丙寅	-	-	-	94	

【成務天皇（稚足彦尊）】

西曆	天皇 代	天皇	年号	年	月	日	記事・原文	年令	備考
西曆	代	天皇	年号	年	月	日	記事・原文	年令	備考
187				57	丁卯	- - - -	-	95	仲哀：40歳 神功：18歳
188				58	戊辰	- - - -	-	96	
189	13	成務	成務	59	己巳	- - - -	-	97	
190				60	庚午	- 6己巳 11己卯	六十年夏六月己巳朔己卯 天皇崩 時年一百七歳	98	記：95歳 海：107歳 仲哀：43歳 神功：21歳

【仲哀天皇（足仲足尊）】

西暦	天皇 代 天皇	年号	年 年 干支	月 閏 月	日 朔 日 干支	記事・原文	年令	備考
-		-	- -	- -	- -	足仲彦天皇 日本武尊第二子也 母皇后曰兩道入姫命 活目入彦五十狹茅天皇之女也 天皇容姿端正 身長十尺	-	
148			18戊子	- -	- -	仲哀生（「稚足彦天皇四十八年立為太子（時年卅一） 稚足彦天皇無男故立為嗣」から算出）	1	○仲哀誕生
178	仲哀即位前紀	成務	48戊午	- -	- -	稚足彦天皇四十八年立為太子（時年卅一） 稚足彦天皇無男 故立為嗣【成務紀】 四十八年春三月庚辰朔 立甥足仲足尊 為皇太子	31	○仲哀立太子
190			60庚午	- -	- -	六十年 天皇崩 【成務紀】 六十年夏六月己巳朔己卯 天皇崩	43	神功：21歳
191		即位前	-1辛未	-	9壬辰 6丁酉	明年秋九月壬辰朔丁酉 葬于倭國狹城盾列陵（盾列 此云多多那美）	44	空白1年
					1庚寅 11庚子	元年春正月庚寅朔庚子 太子即天皇位		○仲哀即位
					- 9丙戌 1丙戌	秋九月丙戌朔 尊母皇后曰皇太后		
					- 乙酉 1乙酉	冬十一月乙酉朔 詔群臣曰「朕未逮于弱冠 而父王既崩之 乃神靈化白鳥而上天 仰望之情 一日勿息 是以冀獲白鳥 養之於陵域之池 因以覩其鳥欲慰顧情」 則令諸國 俾貢白鳥		○父日本武尊の追慕
192			1壬申		11 閏 乙卯 4戊午	閏十一月乙卯朔戊午 越國貢白鳥四隻 於是 送鳥使人宿菟道河邊 時蓬髮蒲見別王視其白鳥而問之曰「何處將去白鳥也」 越人答曰「天皇戀父王而將養狎 故貢之」 則蒲見別王謂越人曰「雖白鳥而燒之則為黑鳥」 仍強之奪白鳥而將去 爰越人參赴之請焉 天皇於是惡蒲見別王無禮於先王 乃遣兵卒而誅矣 蒲見別王 則天皇之異母弟也 時人曰「父是天也 兄亦君也 其慢天違君 何得免誅耶」	45	
					- - - -	是年也 大歲壬申		
					- 1甲寅 11甲子	二年春正月甲寅朔甲子 立氣長足姫尊為皇后 先是 娶叔父彦人大兄之女大中姫為妃 生 坂皇子 忍熊皇子 次娶來熊田造祖大酒主之女弟媛 生子磐屋別皇子		神功：24歳
					- 2癸未 6戊子	二月癸未朔戊子 幸角鹿 即興行宮而居之 是謂飯笥宮		
					- - - -	即月 定淡路屯倉		
193			2癸酉		- 3癸丑 15丁卯	三月癸丑朔丁卯 天皇巡狩南國 於是 留皇后及百寮 而從駕二三卿大夫及官人數百而輕行之 至紀伊國而居于德勒津宮 當是時 熊襲叛之不朝貢 天皇於是將討熊襲國 則自德勒津發之 浮海而幸穴門 即日使遣角鹿勅皇后曰「便從其津發之 達於穴門」	46	○熊襲征討
					- 6辛巳 10庚寅	夏六月辛巳朔庚寅 天皇泊于豐浦津 且皇后從角鹿發而行之 到淳田門 食於船上 時海鰯魚多聚船傍 皇后以酒瀉鰯魚 々々即醉而浮之 時海人多獲其魚而歡曰「聖王所賞之魚焉」 故其處之魚 至于六月常傾浮如醉 其是之緣也		
					- 7辛亥 5乙卯	秋七月辛亥朔乙卯 皇后泊豐浦津		
14					- 9庚戌 - -	是日 皇后得如意珠於海中		
					- 9庚戌 - -	九月 興宮室于穴門而居之 是謂穴門豐浦宮		
194			3甲戌	- -	- -	-	47	神功：25歳
195			4乙亥	- -	- -	-	48	
196			5丙子	- -	- -	-	49	
197			6丁丑	- -	- -	-	50	
198			7戊寅	- -	- -	-	51	
	仲哀 仲哀					八年春正月己卯朔壬午 幸筑紫 時岡縣主祖熊鰐 聞天皇之車駕 豫拔取五百枝賢木 以立九尋船之舳 而上枝掛白銅鏡 中枝掛十握劍 下枝掛八尺瓊 參迎于周芳沙麼之浦 而獻魚鹽地 因以奏言「自穴門至向津野大濟為東門 以名龍屋大濟為西門 限沒利嶋・阿間嶋為御宮 割柴嶋為御□（御□ 此云彌那陪） 以逆見海為鹽地」（□：篇+瓦） 既而導海路 自山鹿岬 迎之入岡浦 到水門 御船不得進 則問熊鰐曰「朕聞 汝能鰐者 有明心以參來 何船不進」 熊鰐奏之曰「御船所以不得進者 非臣罪 是浦口有男女二神 男神曰大倉主 女神曰菟夫羅媛 必是神之心歎」 天皇則禱祈之 以挾抄者倭國菟田人伊賀彦為祝令祭 則船得進 皇后別船自洞海（洞 此云久岐） 入之 潮涸不得進 時熊鰐更遣之 自洞奉迎皇后 則見御船不進 惶懼之 忽作魚沼・鳥池 悉聚魚鳥 皇后看是魚鳥之遊 而忿心稍解 及潮滿即泊于岡津 又筑紫伊賀縣主祖五十迹手 聞天皇之行 拔取五百枝賢木 立于船之舳 上枝掛八尺瓊 中枝掛白銅鏡 下枝掛十握劍 參迎于穴門引嶋而獻之 因以奏言「臣敢所以獻是物者 天皇如八尺瓊之勾 以曲妙御手 且如白銅鏡 以分明看行山川海原 乃提是十握劍 平天下矣」 天皇即美五十迹手曰伊蘇志 故時人號五十迹手之本土 曰伊蘇國 今謂伊觀者訛也		
					1己卯 4壬午			神功：30歳
199			8己卯			天皇則禱祈之 以挾抄者倭國菟田人伊賀彦為祝令祭 則船得進 皇后別船自洞海（洞 此云久岐） 入之 潮涸不得進 時熊鰐更遣之 自洞奉迎皇后 則見御船不進 惶懼之 忽作魚沼・鳥池 悉聚魚鳥 皇后看是魚鳥之遊 而忿心稍解 及潮滿即泊于岡津 又筑紫伊賀縣主祖五十迹手 聞天皇之行 拔取五百枝賢木 立于船之舳 上枝掛八尺瓊 中枝掛白銅鏡 下枝掛十握劍 參迎于穴門引嶋而獻之 因以奏言「臣敢所以獻是物者 天皇如八尺瓊之勾 以曲妙御手 且如白銅鏡 以分明看行山川海原 乃提是十握劍 平天下矣」 天皇即美五十迹手曰伊蘇志 故時人號五十迹手之本土 曰伊蘇國 今謂伊觀者訛也	52	
					21己亥	己亥 到難縣 因以居檀日宮		
					- 9乙亥 5己卯	秋九月乙亥朔己卯 詔群臣以議討熊襲 時有神託皇后而誨曰「天皇何憂熊襲之不服 是臂完之空國也 豈足舉兵伐乎 愈茲國而有貢國 譬如處女之□ 有向津國（□ 此云麻用弼枳） 眼炎之金銀彩色多在其國 是謂拷衾新羅國焉 若能祭吾者 則曾不血刃 其國必自服矣 復熊襲為服 其祭之以天皇之御船及穴門直踐立所獻之水田名大田 是等物為幣也」 天皇聞神言 有疑之情 便登高岳遙望之 大海曠遠而不見國 於是 天皇對神曰「朕周望之 有海無國 豈於大虛有國乎 誰神徒誘朕 復我皇祖諸天皇等盡祭神祇 豈有遺神耶」 時神亦託皇后曰「如天津水影押伏而我所見國 何謂無國 以誹謗我言 其汝王之 如此言而遂不信者 汝不得其國唯今皇后始之有胎 其子有獲焉」 然天皇猶不信 以強擊熊襲 不得勝而還之		○仲哀神託を疑い、崩
200			9庚辰	-	2癸卯 5丁未	九年春二月癸卯朔丁未 天皇忽有痛身	53	

【仲哀天皇（足仲足尊）】

西暦	天皇 代	天皇	年号	年	月	日	記事・原文					年令	備考				
				年	干支	閏月	朔	日	干支								
200	14	仲哀	仲哀	9	庚辰	-	2	癸卯	6	戊申	而明日崩 時年五十二 即知。不用神言而早崩 〔一云 天皇親伐熊襲中賊矢而崩也〕 於是皇后及大臣武内宿禰 匿天皇之喪 不令知天下 則皇后詔大臣及中臣烏賊津連 大三輪大友主君 物部膽咋連 大伴武以連 曰「今天下未知天皇之崩 若百姓知之有懈怠者乎」 則命四大夫 領百寮 令守宮中 竊收天皇之屍 付武内宿禰 以從海路遷穴門 而殯于豐浦宮 爲无火殯斂〔无火殯斂 此謂褒那之阿餓利〕 応神生（【神功撰政前紀】「仲哀九年十二月戊戌朔辛亥 生磐田天皇於筑紫」による） 甲子 大臣武内宿禰自穴門還之 復奏於皇后 是年 由新羅役 以不得葬天皇也					53	記：52歳 海：52歳 神功：31歳 応神：生（12月）

【神功皇后（氣長足姫尊）】

西曆	天皇 代 天皇	年号	年 年 干支	月 閏月	日 朔 日 干支	記事・原文	年令	備考
-		-	- -	-	- -	氣長足姫尊 稚日本根子彦太日日天皇之曾孫氣長宿禰王之女也 母曰葛城高媛	-	
170		成務	40庚戌	-	- -	神功生（「六十九年夏四月辛酉朔丁丑 皇太后崩 於稚櫻宮〔時年一百歲〕」から算出）	1	○神功誕生
193			2癸酉	-	- -	足仲彥天皇二年 立爲皇后 幼而聰明觀智 貌容壯麗 父王異焉	24	○神功皇后
				-	2癸卯	九年春二月 足仲彥天皇崩 於筑紫檀日宮 時皇后傷天皇不從神教 而早崩 以爲知所崇之神 欲求財寶國 是以 命羣臣及百寮 以解罪改過 更造齋宮於小山田邑 【仲哀紀】 九年春二月癸卯朔丁未 天皇忽有痛身 而明日崩 時年五十二 三月壬申朔 皇后遷吉日 入齋宮親爲神主 則命武內宿禰令撫琴 喚中臣烏賊津使主爲審神者 因以 千緒高緒 置琴頭尾 而請曰「先日 教天皇者誰神也 願欲知其名」 逮于七日七夜 乃答曰「神風伊國之百傳度達縣之折鈴五十鈴宮所居神 名撞貫木嚴之御魂天疎向津媛命焉」 亦問之「除是神復有神乎」 答曰「幡荻穗出吾也 於尾田吾田節之淡郡所居神之有也」 問「亦有耶」 答曰「天事代虛事代玉籤入彥嚴之事代主神 有之也」 問亦「有耶」 答曰「有無之不知焉」 於是 審神者曰「今不答而更後 有言乎」 則對曰「於日向國橘小門之水底 所居而 水葉稚之出居神 名表筒男・中筒男・底筒男神之有也」 問亦「有耶」 答曰「有無之不知焉 遂不言且有神矣」 時得神語 隨教而祭 然後 遣吉備臣祖鴨別 令擊熊襲國 未經決辰 而自服焉 且 荷持田村〔荷持 此云能登利〕 有羽白熊驚者 其爲人強健 亦身有翼能飛 以高翔 是以 不從皇命 每略盜人民		
					1壬申	戊子 皇后欲擊熊襲 而自檀日宮遷于松峽宮 時飄風忽起、御笠墮風 故時人號其處曰御笠也		
					3壬申	辛卯 至厩增岐野 即舉兵擊羽白熊驚 而滅之 謂左右曰「取得熊驚 我心則安」 故號其處曰安也		
					17戊子	丙申 轉至山門縣 則誅士蜘蛛田油津媛 時 田油津媛之兄夏羽 興軍而迎來 然聞其妹被誅 而逃之		
					20辛卯	夏四月壬寅朔甲辰 北到火前國松浦縣 而進食於玉嶋里小河之側 於是 皇后勾針爲鉤 取粒爲餌 抽取囊糸爲繯 登河中石上 而投鉤祈之 曰「朕西欲求財國 若有成事者 河魚飲鉤」 因以舉竿 乃獲細鱗魚 時皇后曰「希見物也」〔希見 此云梅豆運志〕 故時人 號其處曰梅豆羅國 今謂松浦訛焉 是以 其國女人 每當四月上旬 以鉤投河中捕年魚 於今不絕 唯男夫 雖釣以不能獲魚 既而 皇后則識神教有驗 更祭祀神祇 躬欲西征 爰 定神田而佃之 時引儻河水 欲潤神田而掘溝 及于迹驚崗 大磐塞之 不得穿溝		
					25丙申	皇后 召武內宿禰 捧鉏鏡令 祈神祇 而求通溝 則當時 雷電霹靂 鐵裂其磐 令通水 故時人 號其溝曰裂田溝也 皇后還詣檀日浦 解髮臨海曰「吾被神祇之教・賴皇祖之靈 浮涉滄海 躬欲西征 是以 今頭瀟海水 若有驗者 髮自分爲兩」 即入海洗之 髮自分也 皇后便結分髮而爲髻 因以 謂羣臣曰「夫興師動衆 國之大事 安危成敗 必在於斯 今有所征伐 以事付羣臣 若事不成者 罪有於羣臣 是 甚傷焉 吾婦女之 加以不肖 然暫假男貌 強起雄略 上蒙神祇之靈 下藉羣臣之助 振兵甲而度嶮瀨 整艦艦以求財土 若事就者 羣臣共有功事 不就者吾獨有罪 既有此意 其共議之」 羣臣皆曰「皇后爲天下 計所以安宗廟社稷 且罪不及于臣下 頓首奉詔」		
200	神功 攝政 前紀	仲哀	9庚辰		4壬寅	秋九月庚午朔己卯 令諸國集船舶 練兵甲 時軍卒難集 皇后曰「必神心焉」 則立大三輪社 以奉刀矛矣 軍衆自聚 於是 使吾瓮海人烏摩呂 出於西海 令察有國耶 還曰「國不見也」 又遣磯鹿海人名草 而令覩 數日 還之曰「西北有山帶雲橫？ 蓋有國乎」 爰卜吉日 而臨發有日 時皇后 親執斧鉞 令三軍曰「金鼓無節 旌旗錯亂 則士卒不整 貪財多欲 懷私內顧 必爲敵所虜 其敵少而勿輕 敵強而無屈 則 暴勿聽 自服勿殺 遂戰勝者 必有賞 背走者自有罪 既而 神有誨曰 和魂服 王身 而守壽命 荒魂爲先鋒 而導師船」〔和魂 此云珥岐瀾多摩 荒魂此云 阿遲瀾多摩〕 即得神教 而拜禮之 因以依網吾彥垂垂見 爲祭神主 于時也 適當皇后之開胎 皇后則取石挿腰 而祈之曰「事竟還日 產於茲土」 其石今在于伊靚縣道邊 既而 則搗荒魂、爲軍先鋒 請和魂 爲王船鎮	31	
					9庚午			○新羅親征

西曆	天皇		年号		年		月		日		記事・原文	年令	備考
	代	天皇	年	干支	閏	月	朔	日	干支				
200	神功 撰政 前紀	仲哀	9庚辰	-	10	己亥	3	辛丑	冬十月己亥朔辛丑 從和珥津 發之 時飛廉起風 陽侯舉浪 海中大魚 悉浮扶舩 則大風順吹 帆船隨波 不 勞楫楫 便到新羅 時隨船潮浪 遠達國中 即知 天神地祇悉助歟 新羅王 於是 戰戰栗栗？身無所 則集諸人曰「新羅之建國以來 未嘗聞 海水凌國 若天運盡之 國爲海乎」 是言 未訖間 船師滿海 旌旗耀日 鼓吹起聲 山川悉振 新羅王 遙望 以爲 非常之兵 將滅己國 ？焉失志 乃今醒之曰「吾聞 東有神國 謂 日本 亦有聖王 謂天皇 必其國之神兵也 豈可舉兵以距乎」 即素旆而 自服 素組以面縛 封圖籍 降於王船之前 因以 叩頭之曰「從今以後 長與乾坤 伏爲飼部 其不乾船柁 而春秋獻 馬梳及馬鞭 復不煩海遠 以每年 貢男女之調」 則重誓之曰「非東日更出西 且除阿利那禮河 返以之 逆流 及河石鼻爲 星辰 而殊闕春秋之朝 怠廢梳鞭之貢 天神地祇 共討焉」 時或曰「欲誅新羅王」 於是 皇后曰「初承神教 將授金銀之國 又號令 三軍曰『勿殺自服』 今既獲財國 亦人自降服 殺之不祥」 乃解其縛爲 飼部 遂入 其國中封重寶府庫 收圖籍文書 即以皇后所杖矛 樹於新羅王門 爲後葉之印 故其矛今猶樹于新羅王之門也 爰新羅王波沙寐錦 即以微叱 已知波珍干岐爲質 仍齎金銀彩色及綾羅？絹 載于八十艘船 令從官軍 是以 新羅王 常以八十船之調貢于日本國 其是之緣也 於是 高麗百濟二國王 聞新羅收圖籍 降於日本國 密令伺其軍？ 則知 不可勝 自來于營外 叩頭而歎曰「從今以後 永稱西蕃 不絕朝貢」 故 因以 定內官家 是所謂之三韓也 皇后 從新羅還之			31	○ 応神：生（仲哀 2月崩）
									十二月戊戌朔辛亥 生磐田天皇於筑紫 故時人號其產處曰宇瀨也 【応神即位前紀】 天皇 以皇后討新羅之年 歲次庚辰冬十二月 生於筑紫之蚊田 〔一云 足仲彦天皇 居筑紫權日宮 是有神 託沙麼縣主祖內避高國避高松屋種 以誨天皇曰「御孫尊也 若欲 得實國耶 將現授之」 便復曰「琴將來 以進于皇后」 則隨神言 而皇 后撫琴 是神 託皇后 以誨之曰「今御孫尊 所望之國 譬如鹿角 以無實國也 其今 御孫尊所御之船 及穴戸直竝立 所貢之水田 名大田爲幣 能祭我 者 則如美女之？而金銀多之 眼災國以授御孫尊」 時天皇對神曰「其雖神 何謾語耶 何處將有國 且朕所乘船既奉於神 朕 乘曷船？ 然未知誰神 願欲知其名」 時神稱其名曰「表筒雄・中筒雄・底筒雄」 如是稱三神名 且重曰「吾 名向匱男聞襲大歷五御魂速狹騰尊也」 時天皇謂皇后曰「聞惡事之言坐婦人乎 何言速狹騰也」 於是神謂天皇曰「汝王如是不信 必不得其國 唯今皇后懷妊之子 蓋有獲 歟」 是夜天皇忽病發以崩之 然後 皇后隨神教而祭 則皇后爲男束裝 征新羅 時神導之 由是隨船浪 之遠及 于新羅國中 於是 新羅王宇流助富利智干 參迎跪之 取王船即叩頭曰「臣自今以後 於日本國所居神御子 爲內官家 無絕朝貢」 一云 禽獲新羅王 詣于海邊 拔王膝肋、令匍匐石上 俄而斬之 埋沙中 則留一人 爲新羅宰 而還之 然後 新羅王妻 不知埋夫屍之地 獨有誘宰之情 乃詵宰曰「汝當令識埋 王屍之處 必薦報之 且吾 爲汝妻」 於是 宰信誘言 密告埋屍之處 則王妻與國人 共議之殺宰 更出王屍葬 於他處 乃時取宰屍 埋于王墓土底 以擊王？ ？其上曰「尊卑次第 固 當如此」 於是 天皇聞之 重發震忿 大起軍衆 欲頓滅新羅 是以 軍船滿海而詣 之 是時 新羅國人恐懼 不知所如 則相集共議之 殺王妻 以謝罪） 於是 從軍神表筒男・中筒男・底筒男 三神誨皇后曰「我荒魂 令祭於穴 門山田邑也」 時穴門直之祖踐立・津守連之祖田裳見宿禰 啓于皇后曰「神欲居之地 必 宜奉定」 則以踐立 爲祭荒魂之主 仍祠立於穴門山田邑				

【神功皇后（氣長足姫尊）】

西曆	天皇 代 天皇	年号	年 年 干支	月 閏 月	日 朔 日 干支	記事・原文	年令	備考			
201	神功 攝政	攝政	1辛巳	-	2丁卯	-	爰伐新羅之明年春二月 皇后領羣卿及百寮 移于穴門豐浦宮 即收天皇之喪 從海路以向京 時 坂王・忍熊王聞 天皇崩 亦皇后西征 并皇子新生 而密謀之曰「今皇后有子 羣臣皆從焉 必共議之立幼主 吾等何以兄從弟乎」乃詳為天皇作陵 詣播磨興山陵於赤石 仍編船 于淡路嶋、運其嶋石 而造之 則每人令取兵 而待皇后 於是 犬上君祖倉見別與吉師祖五十狹茅宿禰 共隸于 坂王 因以為將軍 令興東國兵 時 坂王・忍熊王共出 菟餓野而祈狩之曰〔祈狩 此云于氣比餓利〕「若有成事 必獲良獸也」 二王各居假？ 赤猪忽出之 登假？ 咋 坂王而殺焉 軍士悉慄也 忍熊王謂倉見別曰「是事大怪也 於此不可待敵」 則引軍更返 屯於住吉 時皇后聞忍熊王起師以待之 命武內宿禰 懷皇子 橫出南海 泊于紀伊水門 皇后之船 直指難波 于時皇后之船 迴於海中 以不能進 更還務古水門而卜之 於是 天照大神謠之曰「我之荒魂 不可近皇后 當居御心廣田國」 即以山背根子之女葉山媛令祭 亦稚日女尊謠之曰「吾欲居活田長峽國」 因以海上五十狹茅令祭 亦事代主尊謠之曰「祠吾 于御心長田國」 則以葉山媛之弟長媛令祭 亦表筒男・中筒男・底筒男三神謠之曰「吾和魂宜居大津渟中倉之長峽 便因看往來船」 於是 隨神教以鎮坐焉 則平得度海 忍熊王復引軍退之 到菟道而軍之 皇后南詣紀伊國 會太子於日高 以議及羣臣 遂欲攻忍熊王 更遷小竹宮〔小竹 此云之努〕 適是時也 晝暗如夜 已經多日 時人曰「常夜行之也」 皇后問紀直祖豐耳曰「是怪何由矣」 時有一老父曰「傳聞 如是怪謂阿豆那此之罪也」 問「何謂也」 對曰「二社祝者 共合葬歟」 因以 令推問巷里 有一人曰「小竹祝與天野祝 共為善友 小竹祝逢病而死之 天野祝血泣曰『吾也生為交友 何死之無同穴乎』 則伏屍側而自死 仍合葬焉 蓋是之乎」 乃開墓視之 實也 故更改棺 各異處以埋之 則日暉炳 日夜有別	32	○ 坂王・忍熊王の謀反		
					-	3丙申	5庚子			三月丙申朔庚子 命武內宿禰・和珥臣祖武振熊、率數萬衆 令擊忍熊王 爰武內宿禰等 選精兵從山背出之 至菟道以屯河北 忍熊王出營欲戰 時有熊之凝者 為忍熊王軍之先鋒〔熊之凝者 葛野城首之祖也。一云 多吳吉師之遠祖也〕 則欲勸己衆 因以高唱之歌曰 烏智箇多能 阿邏々麻菟麼邏 摩菟麼邏珥 和多利喻祇？ 菟區喻彌珥 末利椰塢多具陪 宇摩比等破 于摩譬荖奴知野 伊徒姑播茂 伊徒姑奴池 伊裝阿波那 和例波 多摩岐波屢 于池能阿屢餓 波邏濃知波 異佐誤阿例椰 伊裝阿波那 和例波 時武內宿禰 令三軍悉令椎結 因以號令曰「各儲弦藏于 髮中且佩木刀」 既而舉皇后之命 誘忍熊王曰「吾勿貪天下 唯懷幼王 從君王者也 豈有距戰耶 願共絕弦捨兵 與連和焉 然則 君王登天業 以安席高枕 專制萬機」 則顯令軍中 悉斷弦解刀 投於河水 忍熊王信其誘言 悉令軍衆 解兵投河水 而斷弦 爰武內宿禰 令三軍出儲弦 更張、以佩真刀 度河而進之 忍熊王知被欺 謂倉見別・五十狹茅宿禰曰「吾既被欺 今無儲兵 豈可得戰乎」 曳兵稍退 武內宿禰出精兵而追之 適遇于逢坂以破 故號其處曰逢坂也 軍衆走之 及于狹狹浪栗林 而多斬 於是 血流溢栗林 故惡是事 至于今 其栗林之菓不進御所也 忍熊王逃無所入 則喚五十狹茅宿禰 而歌之曰 伊裝阿藝 伊佐智須區禰 多摩枳波屢 于知能阿曾餓 勾夫菟智能 伊多？於破孺破 珥倍迺利能 介豆岐齊奈 則共？瀨田濟而死之 于時 武內宿禰歌之曰 阿布彌能彌 齊多能和多利珥 伽豆區荖利 梅珥志彌曳泥麼 異枳迺倍呂之茂 於是 採其屍而不得也 然後 數日之出於菟道河 武內宿禰亦歌曰 阿布彌能彌 齊多能和多利珥 介豆區荖利 多那伽彌須疑？ 于泥珥等邏倍菟	
							10癸亥	2甲子	冬十月癸亥朔甲子 羣臣尊皇后 曰皇太后		○ 神功皇太后
							-	-	是年也 太歲辛巳		
				-	-	則為攝政元年					
202			2壬午	-	11丁亥	8甲午	二年冬十一月丁亥朔甲午 葬天皇於河內國長野陵	33			
203			3癸未	-	1丙戌	3戊子	三年春正月丙戌朔戊子 立磐田別皇子為皇太子 因以都於磐余〔是謂若櫻宮〕 【応神即位前紀】 皇太后攝政之三年 立為皇太子〔時年三〕	34	○ 応神立太子（4歳）		
204			4甲申	-	-	-	-	35			
205			5乙酉	-	3癸卯	7己酉	五年春三月癸卯朔己酉 新羅王遣汗禮斯伐・毛麻利叱智・富羅母智等朝貢 仍有返先質微叱許智伐旱之情 是以 詔許智伐旱 而給之曰「使者汗禮斯伐・毛麻利智等告臣曰『我王以坐臣久不還 而悉沒妻子為俘』 冀？還本土 知虛實而請焉」 皇太后則聽之 因以 副葛城襲津彦而遣之 共到對馬 宿于？海水門 時新羅使者毛麻利叱智等 竊分船及水手 載微叱旱岐 令逃於新羅 乃造菟靈 置微叱許智之床 詳為病者 告襲津彦曰「微叱許智 忽病之將死」 襲津彦使人令看病者 既知欺 而捉新羅使者三人 納檻中 以火焚而殺 乃詣新羅 次于蹈鞬津 拔草羅城還之 是時倭人等 今桑原・佐廩・高宮・忍海凡四邑漢人等之始祖也	36			
206			6				-	37			
207			7				-	38			
208			8				-	39			
209			9				-	40			

【神功皇后（氣長足姫尊）】

西曆	天皇 代 天皇	年号	年 干支	月 閏月	日 朔日	干支	記事・原文	年令	備考
210			10				-	41	
211			11				-	42	
212			12				-	43	
					8甲子		十三年春二月丁巳朔甲子 命武内宿禰 從太子令拜角鹿筥飯大神 癸酉 太子至自角鹿		
213			13癸巳	-	2丁巳	17癸酉	是日 皇太后宴太子於大殿 皇太后舉觴以壽于太子 因以歌曰 虛能彌企破 和鐵彌企那羅備 區之能伽彌 等虛彌瑪伊麻輪 伊破多多須 周玖那彌伽未能 等豫保枳 保枳茂苔陪之 訶武保枳 保枳玖流保之 摩免利虛辭彌企層 阿佐彌塲齊 佐佐 武内宿禰爲太子答歌之曰 許能彌企塲 伽彌雞武比等破 曾能免豆彌 于輪瑪多?? 于多比免免 伽彌雞梅伽墓 許能彌企能 阿椰瑪 于多娜濃芝 作沙	44	
214			14甲午	-	-	-	-	45	
215			15				-	46	
216			16				-	47	
217			17				-	48	
218			18				-	49	
219			19				-	50	
220			20				-	51	
221			21				-	52	
222			22				-	53	
223			23				-	54	
224			24甲辰	-	-	-	-	55	
225			25				-	56	
226			26				-	57	
227			27				-	58	
228			28				-	59	
229			29				-	60	
230			30				-	61	
231			31				-	62	
232	神功 摂政	摂政	32				-	63	
233			33				-	64	
234			34甲寅	-	-	-	-	65	
235			35				-	66	
236			36				-	67	
237			37				-	68	
238			38				-	69	
239			39己未	-	-	-	三十九年 是年也 太歲己未 〔魏志云 明帝景初三年六月 倭女王遣大夫難斗米等 詣郡求詣天子朝獻 太守鄧夏遣吏 將送詣京都也〕	70	
240			40庚申	-	-	-	四十年 〔魏志云 正始元年 遣建忠校尉梯携等 奉詔書印綬 詣倭國也〕	71	
241			41辛酉	-	-	-	-	72	
242			42壬戌	-	-	-	-	73	
243			43癸亥	-	-	-	四十三年 〔魏志云 正始四年 倭王復遣使大夫伊聲者・掖耶約等八人上 獻〕	74	
244			44甲子	-	-	-	-	75	
245			45乙丑	-	-	-	-	76	
246			46丙寅	-	3乙亥	1乙亥	四十六年春三月乙亥朔 遣斯摩宿禰 于卓淳國〔斯麻宿禰者 不知何姓人 也〕 於是 卓淳王末錦早岐 告斯摩宿禰曰「甲子年七月中 百濟人久・彌州 流・莫古三人到 於我土曰『百濟王聞 東方有日本貴國 而遣臣等 令朝 其貴國 故求道路 以至于斯土 若能教臣等 令通道路 則我王必深德 君王』 時謂久 等曰『本聞東有貴國 然未曾有通 不知其道 唯海遠浪嶮 則乘 大船 僅可得通 若雖有路津 何以得達耶』 於是 久 等曰『然即當今不得通也 不若 更遣之備船 而後通矣』 仍曰『若有貴國使人來 必應告吾國』 如此乃還」 爰斯摩宿禰 即以倭人爾波移與卓淳人過古二人 遣于百濟國 慰勞其王 時百濟〔肖古王 深之歡喜 而厚遇焉 仍以五色綵絹各一疋 及角弓箭 并鐵?四十枚 幣爾波移 便復開寶藏 以示諸珍異曰「吾國多有是珍寶 欲貢貴國 不知道路 有志無從 然猶今付使者 尋貢獻耳」 於是 爾波 移奉事而還 告志摩宿禰 便自卓淳還之也	77	○百濟國との親交 開始

【神功皇后（氣長足姫尊）】

西曆	天皇 代 天皇	年号	年 年 干支	月 閏月	日 朔 日 干支	記事・原文	年令	備考	
247			47丁卯	-	4己巳	-	四十七年夏四月 百濟王使久・彌洲流・莫古令朝貢 時新羅國調使與久共詣 於是 皇太后・太子譽田別尊 大歡喜之曰「先王所望國人 今來朝之 痛哉 不逮于天皇矣」 羣臣皆莫不流涕 仍檢校二國之貢物 於是 新羅貢物者 珍異甚多 百濟貢物者 少賤不良 便問 久 等曰「百濟貢物 不及新羅 奈之何」 對曰「臣等失道 至沙比新羅 則新羅人捕臣等 禁固園 經三月而欲殺 時久 等向 天而咒詛之 新羅人怖其呪詛而不殺 則奪我貢物 因以 爲己國之貢物 以新羅賤物相易 爲臣國之貢物 謂臣等曰『若誤此辭者 及于還日 當殺汝等』 故久 等恐怖從耳 是以僅得達于天朝」 時皇太后・譽田別尊 責新羅使者 因以 祈天神曰「當遣誰人 於百濟 將檢事之虛實 當遣誰人於新羅 將推問其罪」 便天神諭之曰「令武內宿禰行議 因以千熊長彦爲使者 當如所願〔千熊長彦者 分明不知其姓人 一云 武藏國人 今是 額田部槻本首等之始祖也 百濟記云 職麻那那加比跪者 蓋是歟也〕」 於是 遣千熊長彦于新羅 責以濫百濟之獻物	78	○百濟・新羅の確執
248			48戊辰	-	-	-	79		
249			49己巳	-	3戊子	-	四十九年春三月 以荒田別・鹿我別爲將軍 則與久 等共勒兵而度之 至卓淳國 將襲新羅 時或曰「兵衆少之 不可破新羅 更復奉上沙白・蓋盧 請增軍士」 即命木羅斤資・沙沙奴跪〔是二人 不知其姓人也 但木羅斤資者 百濟將也〕 領精兵 與沙白・蓋盧共遣之 俱集于卓淳 擊新羅而破之因以 平定比自・南加羅・？國・安羅・多羅・卓淳・加羅七國 仍移兵 西進 至古婁津 屬南蠻枕彌多禮 以賜百濟 於是 其王肖古及王子貴須 亦領軍來會 時比利・辟中・布彌支・半古四邑 自然降服 是以 百濟王父子及荒田別・木羅斤資等 共會意流村（今云 州流須祇）相見欣感 厚禮送遣之 唯千熊長彦與百濟王 至于百濟國 登辟支山盟之 復登古沙山 共居磐石上時 百濟王盟之曰「若敷草爲坐 恐見火燒 且取木爲坐 恐爲水流 故居磐石而盟者 示長遠之不朽者也 是以 自今以後 千秋萬歲 無絕無窮 常稱西蕃春秋朝貢」 則 將千熊長彦 至都下 厚加禮遇 亦副久 等而送之	80	○新羅征討
250	神功 攝政	攝政	50庚午	-	2壬午	-	五十年春二月 荒田別等遣之 夏五月 千熊長彦・久 等 自自百濟 於是 皇太后歡之問久 曰「海西諸韓既賜汝國 今何事以頻復來也」 久 等奏曰「天朝鴻澤 遠及弊邑 吾王歡喜踊躍 不任于心 故因遣使 以致至誠 雖遠萬世 何年非朝」 皇太后勅云「善哉汝言 是朕懷也」 增賜多沙城 爲往還路驛	81	
-				5辛亥	-	於是 皇太后詔太子及武內宿禰曰「朕所交親百濟國者 是天所致 非由人故玩好珍物 先所未有 不關歲時 常來貢獻 朕省此款 每用喜焉 如朕存時 敦加恩惠」			
251				51辛未	-	-	-	五十一年春三月 百濟王亦遣久 朝貢 於是 皇太后詔太子及武內宿禰曰「朕所交親百濟國者 是天所致 非由人故玩好珍物 先所未有 不關歲時 常來貢獻 朕省此款 每用喜焉 如朕存時 敦加恩惠」 即年 以千熊長彦 副久 等 遣百濟國 因以 垂大恩曰「朕從神所驗 始開道路 平定海西 以賜百濟 今復厚結好 永寵賞之」 是時 百濟王父子 並？致地 啓曰「貴國鴻恩 重於天地 何日何時 敢有忘哉 聖王在上、明如日月 今臣在下 固如山岳 永爲西蕃 終無貳心」	82
252			52壬申	-	9丁卯	10丙子	五十二年秋九月丁卯朔丙子 久 等從 千熊長彦詣之 則獻七枝刀一口・七子鏡一面及種種重寶 仍啓曰「臣國以西有水 源出自谷那鐵山 其？七日行之不及 當飲是水 便取是山鐵 以永奉聖朝」 乃謂孫枕流王曰「今我所通 海東貴國 是天所啓 是以 垂天恩 割海西而賜我 由是 國基永固 汝當善脩和好 聚飲土物 奉貢不絕 雖死何恨」 自是後 每年相續朝貢焉	83	
253			53癸酉	-	-	-	84		
254			54甲戌	-	-	-	85		
255			55乙亥	-	-	-	86		
256			56丙子	-	-	-	87		
257			57丁丑	-	-	-	88		
258			58	-	-	-	89		
259			59	-	-	-	90		
260			60	-	-	-	91		
261			61	-	-	-	92		
262			62壬午	-	-	-	六十二年 新羅不朝 即年 遣襲津彦擊新羅 〔百濟記云 壬午年 新羅不奉貴國 貴國遣沙至比跪令討之 新羅人莊飭美女二人 迎誘於津 沙至比跪 受其美女 反伐加羅國 加羅國王己本早岐 及兒百久至・阿首至・國沙利・伊羅麻酒・爾？至等 將其人民 來奔百濟 百濟厚遇之 加羅國王妹既殿至 向大倭啓云「天皇遣沙至比跪 以討新羅 而納新羅美女 捨而不討 反滅我國 兄弟人民 皆爲流沈 不任憂思 故以來啓」 天皇大怒 即遣木羅斤資 領兵衆來集 加羅復其社稷 一云 沙至比跪知天皇怒 不敢公還 乃自竄伏 其妹有幸於皇宮者 比跪密遣使人問「天皇怒解不」 妹乃託夢言「今夜夢見 沙至比跪」天皇大怒云「比跪何敢來」 妹以皇言報之 比跪知不免 入石穴而死也〕	93	
263			63癸未	-	-	-	94		
264			64甲申	-	-	-	六十四年 百濟國貴須王薨 王子枕流王立爲王	95	

【神功皇后（氣長足姫尊）】

西曆	天皇 代	天皇	年号	年 干支	月 閏	日 朔	記事・原文	年令	備考
265				65乙酉	-	-	六十五年 百濟枕流王薨 王子阿花年少 叔父辰斯奪立為王	96	
266				66丙戌	-	-	六十六年 〔是年 晉武帝泰初二年 晉起居注云 武帝泰初二年十月 倭女王遣重譯貢獻〕	97	
267				67丁亥	-	-	-	98	
268				68戊子	-	-	-	99	
	神功 攝政	神功 攝政		-	4辛酉	17丁丑	六十九年夏四月辛酉朔丁丑 皇太后崩 於稚櫻宮〔時年一百歲〕		記：100歳 海：100歳 応神：70歳
269				69己丑	-	10戊午	冬十月戊午朔壬申 葬狹城橋列陵	100	
				-	-	15壬申	是日 追尊皇太后 曰氣長足姫尊		
				-	-	-	是年也 太歳己丑		

【応神天皇（誉田別尊）】

西暦	天皇 代 天皇	年号	年 干支	月 閏月	日 朔日	干支	記事・原文	年令	備考
-		-	-	-	-	-	誉田天皇 足仲彦天皇第四子也 母曰氣長足姫尊	-	
200		仲哀	9庚辰	-	12戊戌	-	天皇 以皇后討新羅之年 歲次庚辰冬十二月 生於筑紫之蚊田 幼而聡達 玄監深遠 動容進止 聖表有異焉 【神功撰政前紀】 十二月戊戌朔辛亥 生譽田天皇於筑紫 故時人號其產處曰宇瀨也	1	○ 応神誕生
203	応神即位前紀	神功撰政	3癸未	-	-	-	皇太后攝政之三年 立為皇太子〔時年三〕 初天皇在孕而 天神地 授三韓 既產之 宐生腕上 其形如籬 是肖皇太后為雄裝之負籬〔肖 此云阿蘇〕 故稱其名 謂譽田天皇 〔上古時俗 号籬謂褻武多焉 一云 初天皇為太子 行于越国 拜祭角鹿 箭飯大神 時大神與太子名相易 故号大神曰去来紗別神 太子名譽田別尊 然則可謂大神本名譽田別神 太子元名去来紗別尊 然無所見也 未詳〕 【神功撰政紀】 三年春正月丙戌朔戊子 立譽田別皇子為皇太子 因以都於磐余	4	○ 応神立太子 生誕から4歳
269			69乙丑	-	4辛酉	-	撰政六十九年夏四月 皇太后崩〔時年百歳〕	70	
270			1庚寅	-	1丁亥	1丁亥	元年春正月丁亥朔 皇太子即位 是年也 太歳庚寅	71	○ 応神即位
271			2辛卯	-	4庚戌	3壬子	二年春三月庚戌朔壬子 立仲姫為皇后 々生荒田皇女・大鸕鷀天皇・根鳥皇子 先是 天皇以皇后姉高城入姫為妃 生額田大中彦皇子・大山守皇子・去来真稚皇子・大原皇女・？来田皇女 又妃皇后弟々姫 生阿倍皇女・淡路御原皇女・紀之菟野皇女 次妃和珥臣祖日触使主之女宮主宅媛 生菟道稚郎子皇子・矢田皇女・雌鳥皇女 次妃宅媛之弟小？〔小？ 此云烏難謎〕媛 生菟道稚郎姫皇女 次妃河派仲彦女弟媛 生稚野毛二派皇子〔派 此云摩多〕 次妃櫻井田部連男？之妹糸媛 生牟綖別皇子 次妃日向泉長媛 生大葉枝皇子・小葉枝皇子 凡是天皇男女 并廿王也 根鳥皇子 是大田君之始祖也 大山守皇子 是土形君・榛原君 凡二族之始祖也 去来真稚皇子 是深河別之始祖也 三年冬十月辛未朔癸酉 東蝦夷悉朝貢 即役蝦夷 而作廩坂道 十一月 姬々海人 ？之不從命〔？？ 此云佐麼壳玖〕 則遣阿曇連祖大浜宿禰 平其？？ 因為海人之幸 故俗人謠曰「佐麼阿摩者」其是緣也	72	『日本書紀曆日原典』：原文「三月庚戌朔」→「四月庚戌朔」 仁徳：生
272			3壬辰	-	11庚子	-	是歳 百濟辰斯王立之失礼於貴国天皇 故遣紀角宿禰・羽田矢代宿禰・石川宿禰・木菟宿禰・嘸讓其无礼状 由是 百濟国殺辰斯王以謝之 紀角宿禰等 便立阿花為王而帰	73	
273	15		4癸巳	-	-	-	-	74	
274			5甲午	-	10乙丑	-	五年秋八月庚寅朔壬寅 令諸国 定海人及山守部 冬十月 科伊豆国 令造船 長十丈 船既成之 試浮于海 便輕泛疾行如馳 故名其船曰枯野 〔由船輕疾名枯野 是義違焉 若謂輕野 後人訛歟〕 六年春二月 天皇幸近江国 至菟道野上 而歌之曰 知麼能 伽豆忍場弥例麼 茂々智？蘆 夜珥波母弥喻 区珥能朋母弥喻	75	
275	応神	応神	6乙未	-	2丁亥	-	七年秋九月 高麗人・百濟人・任那人・新羅人 並来朝 時命武内宿禰 領諸韓人等作池 因以 名池号韓人池	76	
276			7丙申	-	9戊申	-	八年春三月 百濟人来朝 〔百濟記云 阿花王立无礼於貴国 故奪我枕弥多礼 及 南・支倭・谷那・東韓之地 是以 遣王子直支于天朝 以脩先王之好也〕	77	
277			8丁酉	-	3乙亥	-	九年夏四月 遣武内宿禰於筑紫 以監察百姓 時武内宿禰弟甘美内宿禰 欲廢兄 即讒言于天皇「武内宿禰 常有望天下之情 今聞 在筑紫而密謀之曰『独裂筑紫 招三韓令朝於己 遂将有天下』」 於是 天皇則遣使 以令殺武内宿禰 時武内宿禰歎之曰「吾元無武心 以忠事君 今何禍矣 無罪而死耶」 於是 有壹伎直祖真根子者 其為人能似武内宿禰之形 独惜武内宿禰無罪而空死 便語武内宿禰曰「今大臣以忠事君 既無黒心 天下共知 願密避之 參赴于朝 親并無罪 而後死不晚也 且時人每云『僕形似大臣』 故今我代大臣而死之 以明大臣之丹心 則伏劒自死焉」 時武内宿禰 独大悲之 竊避筑紫 浮海以從南海廻之 泊於紀水門 僅得還朝 乃并無罪 天皇則推問武内宿禰與甘美内宿禰 於是 二人各堅執而爭之 是非難決 天皇勅之 令請神 探湯 是以 武内宿禰與甘美内宿禰 共出于磯城川？ 為探湯 武内宿禰勝之 便執橫刀 以毆仆甘美内宿禰 遂欲殺矣 天皇勅之令釈 仍賜紀直等之祖也	78	○ 甘美内宿禰・武内宿禰
279			10己亥	-	-	-	-	80	
280			11庚子	-	-	-	十一年冬十月 作劒池・輕池・鹿垣池・廩坂池 是歳 有人奏之曰「日向国有嬢子 名髪長媛 即諸県君牛諸井之女也 是国色之秀者」 天皇悦之 心裏欲覓	81	○ 髪長媛
281			12辛丑	-	-	-	-	82	
282			13壬寅	-	3丙子	-	十三年春三月 天皇遣專使 以徵髪長媛	83	

【応神天皇（誉田別尊）】

西暦	天皇 代	天皇	年号	年 年	月 月	日 日	支 支	記事・原文	年令	備考
282				13壬寅	-	9癸卯	-	秋九月中 髪長媛至自日向 便安置於桑津邑 爰皇子大鷦鷯尊 及見髪長媛 感其形之美麗 常有恋情 於是 天皇知大鷦鷯尊感髪長媛而欲配 是以 天皇宴於後宮之日 始喚髪長媛 因以、坐於宴席 時？大鷦鷯尊 以指髪長媛 乃歌之曰 伊奘阿芸 怒珥比蘆菟？珥 比蘆菟瀾珥 和餓喻区瀾智珥 伽遇破志 波那多智摩那 辞豆曳羅波 比等未那等利 保菟曳波 等利委餓羅辞 瀾菟遇利能 那伽菟曳能 府保詔茂利 阿伽例蘆塲等？ 伊奘佐伽摩曳那 於是 大鷦鷯尊 蒙御歌 便知得賜髪長媛 而大悦之 報歌曰 瀾豆多摩蘆 予佐瀾能伊戒珥 奴那波区利 破陪鷄区辞羅珥 委遇比菟区 伽破摩多曳能 比辞餓羅能 佐辞鷄区辞羅珥 阿餓許居呂辞 伊夜于古珥辞 大鷦鷯尊 與髪長媛既得交感 独對髪長媛歌之曰 弥知能之利、古破？塲等綿塲 伽未能語等 枳虚曳之介遇、阿比摩区羅摩区 又歌之曰 弥知能之利 古波？塲等綿 阿羅素破儒 泥辞区塲之敘 于蘆波辞弥茂布 〔一云 日向諸県君牛 仕于朝廷 年既耆？之不能仕 仍致仕退於本土 則貢上己女髪長媛 始至播磨 時天皇幸淡路島 而遊獵之 於是 天皇西望之 数十麋鹿 浮海来之 便入于播磨鹿子水門 天皇謂左右曰「其何麋鹿也 泛巨海多来」 爰左右共視而奇 則遣使令察。使者至見 皆人也 唯以著角鹿皮 為衣服耳 問曰「誰人也」 对曰「諸県君牛 是年耆之 雖致仕 不得忘朝 故以己女髪長媛而貢上矣」 天皇悦之 即喚令從御船 是以 時人号其著岸之处 曰鹿子水門也 凡水手曰鹿子 蓋始起于是時也〕 十四年春二月 百濟王貢縫衣工女 曰真毛津 是今来自衣縫之始祖也	83	
283				14癸卯	-	-	-	是歲 弓月君自百濟来歸 因以奏之曰「臣領己國之人夫百廿壘而歸化 然因新羅人之拒 皆留加羅國」 爰遣？城襲津彦 而召弓月之人夫於加羅 然經三年 而襲津彦不来焉 十五年秋八月壬戌朔丁卯 百濟王遣阿直伎 貢良馬二匹 即養於輕坂上廐 因以阿直岐令掌飼 故号其養馬之处 曰廐坂也 阿直岐亦能諳經典 即太子菟道稚郎子師焉 於是 天皇問阿直岐曰「如勝汝博士亦有耶」 对曰「有王仁者 是秀也」 時遣上毛野君祖 荒田別・巫別於百濟 仍徵王仁也 其阿直岐者 阿直岐史之始祖也	84	○弓月君・阿直伎
284	15	応神	応神	15甲辰	-	8壬戌	6丁卯	十六年春二月 王仁来之 則太子菟道稚郎子師之 習諸典籍於王仁 莫不通達 所謂王仁者 是書首等之始祖也 是歲 百濟阿花王薨 天皇召直支主謂之曰「汝返於國以嗣位」 仍且賜東韓之地而遣之 〔東韓者 甘羅城・高難城・爾林城是也〕 八月 遣平群木菟宿祢・的戸田宿祢於加羅 仍授精兵詔之曰「襲津彦久之不還 必由新羅之拒而滯之 汝等急往之擊新羅 披其道路」 於是 木菟宿祢等進精兵 莅于新羅之境 新羅王憊之服其罪 乃率弓月之人夫 與襲津彦共来焉	85	
285				16乙巳	-	-	-	十九年冬十月戊戌朔 幸吉野宮 時国樛人来朝之 因以醴酒 献于天皇 而歌之曰 伽辞能輔珥 予区周塲菟区利 予区周珥 伽綿蘆於朋瀾枳 宇摩羅珥 枳虚之茂知塲勢 摩呂餓智 歌之既訖、則打口以仰吟 今国樛献土毛之日 歌訖即擊口仰吟者 蓋上古之遺則也 夫国樛者 其為人甚淳朴也 每取山菓食 亦煮蝦蟇為上味 名曰毛瀾 其土自京東南之 隔山而居于吉野河上 峯嶺谷深 道路狹？ 故雖不遠於京 本希朝来 然自此之後 ？参赴以献土毛 其土毛者 栗？菌及年魚之類焉 二十年秋九月 倭漢直祖阿知使主 其子都加使主 並率己之党類十七果 而来歸焉	86	
286				17丙午	-	-	-		87	
287				18丁未	-	-	-		88	
288				19戊申	-	10戊戌	1戊戌	二十二年春三月甲申朔戊子 天皇幸難波 居於大隅宮 丁酉 登高台而遠望 時妃兄媛侍之 望西以大歎〔兄媛者 吉備臣祖御友別之妹也〕 於是 天皇問兄媛曰「何爾歎之甚也」 对曰「近日 妾有恋父母之情 便因西望 而自歎矣 冀暫還之 得省親歎」 天皇愛兄媛篤温？之情 則謂之曰「爾不視二親 既經多年 還欲定省 於理灼然」 兄聽之 仍喚淡路御原之海人八十人為水手 送于吉備。 夏四月 兄媛自天津瓮船而往之 天皇居高台 望兄媛之船以歌曰 阿波？辞摩 異柳敷多那羅弭 阿豆枳辞摩 異柳敷多那羅弭 予呂辞枳辞摩之魔 ？伽多佐例阿羅智之 吉備那流伊慕塲 阿比瀾菟流慕能 秋九月辛巳朔丙戌 天皇狩于淡路島 是島者横海 在難波之西 峯嶺紛錯 陵谷相繞 芳草薈蔚 長瀾潺湲 亦麋鹿・鳧・鴈 多在其島 故乘輿？遊之 天皇便自淡路輦 以幸吉備 遊于小豆島	89	
289				20乙酉	-	9癸亥	-		90	
290				21庚戌	-	-	-		91	
291				22辛亥	-	-	-		92	
					-	3甲申	14丁酉			○吉備行幸
					-	4癸丑	-			
					-	9辛巳	6丙戌			

【応神天皇（誉田別尊）】

西暦	天皇 代	天皇	年号	年 干支	月 閏	日 朔	日 干支	記事・原文	年令	備考
291				22辛亥	-	9辛巳	10庚寅	庚寅 亦移居於葉田（葉田 此云簸娜） 葦守宮 時御友別參赴之 則以其兄弟子孫為膳夫而奉饗焉 天皇 於是 看御友別謹惶侍奉之状 而有悦情 因以割吉備国 封其子等也 則分川島県 封長子稻速別 是下道臣之始祖也 次以上道県 封中子仲彦 是上道臣？香屋臣之始祖也 次以三野県 封弟彦 是三野臣之始祖也 復以波区芸県 封御友別弟鴨別 是笠臣之始祖也 即以苑県 封兄浦凝別 是苑臣之始祖也 即以織部 賜兄媛 是以 其子孫 於今在于吉備国 是其縁也	92	
292				23壬子	-	-	-	-	93	
293				24癸丑	-	-	-	-	94	
294				25甲寅	-	-	-	廿五年 百濟直支王薨 即子久爾辛立為王 王年幼 木満致執国政 與王母相婬 多行無礼 天皇聞而召之 〔百濟記云 木満致者 是木羅斤資 討新羅時 娶其国婦 而所生也 以其父功 專制任那 來入我国 往還貴国 承制天朝 執我国政 權重当世 然天朝聞其暴召之〕	95	
295				26乙卯	-	-	-	-	96	
296				27丙辰	-	-	-	-	97	
297				28丁巳	-	9丙午	-	二十八年秋九月 高麗王遣使朝貢 因以上表 其表曰「高麗王教日本国也」 時太子菟道稚郎子読其表 怒之責高麗之使 以表状無礼 則破其表	98	
298				29戊午	-	-	-	-	99	
299				30己未	-	-	-	-	100	
300	15	応神	応神	31庚申	-	8己丑	-	三十一年秋八月 詔群？曰「官船名枯野者 伊豆国所貢之船也 是朽之不堪用 然久為官用 功不可忘 何其船名勿絶 而得伝後葉焉」 群？便被詔 以令有司 取其船材 為薪而燒塩 於是 得五百籠塩 則施之周賜諸国 因令造船 是以 諸国一時貢上五百船 悉集於武庫水門 当是時 新羅調使 共宿武庫 爰於新羅停忽失火 即引之及于聚船 而多船見焚 由是 責新羅人 新羅王聞之 ？然大驚 乃貢能匠者 是猪名部等之始祖也 初枯野船 為塩薪燒之日 有余燼 則奇其不燒而獻之 天皇異以令作琴 其音鏗鏘而遠聆 是時 天皇歌之曰 訶羅怒烏 之褒珥椰枳 之餓阿摩離 虚等珥菟句離 訶枳訶句椰 由羅能斗能 斗那訶能異句離珥 敷例多菟 那豆能紀能 佐椰佐椰	101	○枯野船と縫工
301				32辛酉	-	-	-	-	102	
302				33壬戌	-	-	-	-	103	
303				34癸亥	-	-	-	-	104	
304				35甲子	-	-	-	-	105	
305				36乙丑	-	-	-	-	106	
306				37丙寅	-	2戊午	1戊午	三十七年春二月戊午朔 遣阿知使主・都加使主於吳 令求縫工女 爰阿知使主等 渡高麗国 欲達于吳 則至高麗 更不知道路 乞知道者於高麗 々々王乃副久礼波・久礼志 二人 為導者 由是 得通吳 吳王 於是 與工女兄媛・弟媛 吳織 穴織 四婦女	107	
307				38丁卯	-	-	-	-	108	
308				39戊辰	-	2丙子	-	三十九年春二月 百濟直支王 遣其妹新齊都媛以令仕 爰新齊都媛 率七婦女 而來歸焉	109	
309				40己巳	-	1辛丑	8戊申	四十年春正月辛丑朔戊申 天皇召大山守命・大鷦鷯尊 問之曰「汝等者愛子耶」 対言「甚愛也」 亦問之「長與少孰尤焉」 大山守命対言「不逮于長子」 於是 天皇有不悦之色 時大鷦鷯尊 預察天皇之色 以対言「長者多經寒暑 既為成人 更無飽矣 唯少子者 未知其成不 是以 少子甚憐之」 天皇大悦曰「汝言寔合朕之心」 是時 天皇常有立菟道稚郎子 為太子之情 然欲知二皇子之意 故發是問 是以 不悦大山守命之対言也 甲子 立菟道稚郎子為嗣	110	
					-	1辛丑	24甲子	即日 任大山守命 令掌山川林野 以大鷦鷯尊 為太子輔之 令知国事	108	○仁徳：菟道稚郎子太子の補佐。37歳
310				41庚午	-	2甲午	15戊申	四十一年春二月甲午朔戊申 天皇崩于明宮 時年一百一十歳〔一云 崩于大隅宮〕 是月 阿知使主等 自吳至筑紫 時胸形大神 有乞工女等 故以兄媛奉於胸形大神 是則今在筑紫国 御使君之祖也 既而率其三婦女 以至津国 及于武庫 而天皇崩之 不及 即献于大鷦鷯尊 是女人等之後 今吳衣縫・蚊屋衣縫是也	111	記：130歳 海：110歳

